特53
613

學生文庫

第貳拾編

新訂

西遊記

大町桂月校訂

東京 至誠堂 發兌

明治
45. 1. 20
内交

學生文庫に冕す

われ聞く、獨逸の中等程度の敎育にては、力めて多く古典を課すと。其意に曰く、古典の知識なければ、人物、學問、事業、共に淺薄なるを免れずと。獨逸は新進の國なるが、學問歐米に冠たり、工業亦英國を壓せむとし、國富み、兵强きも、亦以ある哉。我日本は獨逸よりも猶一層新進の國なるが、一躍して世界一等國の列に入り、新興の勢、さすがの獨逸をして後に瞠若たらしめむとす。而して我國は三千年の金甌無缺の歷史を有し、萬世一系の天皇を戴き、世界無類の國體を有す。卽ち我國は世界最古の國なると共に、世界最新の國也。其新興の原因を討ぬるに、獨逸の識者が認めて中等敎育に實施せる所は、猶一層早く我國の識者が認めて實施せる所也。然るにわれ近時讀書界の趨向を見る

に、徒に奇を趁ひ、新を求め、皮相なる自然主義にかぶれ、危險なる外來思想にかぶれ、よろづ物質的となり、早く生活の安樂を求め、本を忘れて末に趨り、終に淺薄なる人間となり了らむとす。邦家の前途　嗚呼危い哉。余茲に慨する所あり。學生文庫を編み、古典的名著を選び、初學の士の讀誦に充てむとす。益ありて毫も害なきは、余の深く期する所也。前途有爲の士、願くは之に由りて、精神上の好食物を得よ。修養に供せよ。人格の深厚を致せ。餘裕を得よ。清き娯樂を得よ。猶謹んで告ぐ、善く書を讀め。書に讀まるゝこと莫れ。

大町桂月

新訂西遊記下卷目次

五四 法性西來逢女國　心猿定計脫烟火　三〇七
五五 色邪淫戲唐三藏　性命修持不壞身　三一四
五六 神狂誅草寇　道味放心猿　三二一
五七 眞行者落伽山訴苦　假猴王水簾洞謄文　三二七
五八 二心攪亂大乾坤　一體難修眞寂滅　三三三
五九 唐三藏路阻火焰山　孫行者一調芭蕉扇　三四〇
六〇 牛魔王罷戰赴華筵　孫行者二調芭蕉扇　三五三
六一 猪八戒助力敗魔王　孫行者三調芭蕉扇　三五三
六二 滌垢洗心唯掃塔　縛魔歸正乃修身　三六二
六三 二僧蕩怪鬧龍宮　群聖除邪獲寶貝　三七〇
六四 荆棘嶺悟能努力　木仙菴三藏談詩　三七六
六五 妖邪假設小雷音寺　四衆皆遭大災難　三八七
六六 諸神逢毒手　彌勒縛妖魔　三九四
六七 拯救陀羅禪性穩　脫離汚穢道心清　四〇〇
六八 朱紫國唐僧論前世　孫行者施爲三折肱　四〇七
六九 心主夜間修藥物　君王筵上論妖邪　四一四
七〇 妖魔寶放烟沙火　悟空計盜紫金鈴　四一九
七一 行者假名降怪犼　觀音現像伏妖王　四三三
七二 盤絲洞七清迷本　濯垢泉八戒忘形　四四〇
七三 情因舊恨生災毒　心主遭魔幸破光　四四五
七四 長庚傳報魔頭狼　行者施爲變化能　四五一
七五 心猿潛透陰陽體　魔主還歸大道眞　四五七
七六 心猿居舍魔歸性　木母同降聖眞　四六二
七七 群魔欺本性　一體拜眞如　四六九
七八 比丘憐子遭陰神　金殿識魔談道德　四七四
七九 尋洞求妖逢老壽　當朝正主救嬰兒　四七九

八〇 蛇女宵陽求配偶　心猿守主識妖邪　四八五
八一 鎮海寺心猿知怪　黑松林三衆尊師　四八九
八二 蛇女求陽　元神護道　四九四
八三 心猿識得丹頭　蛇女還歸本性　四九九
八四 雞滅加持圓大覺　法王成正體天然　五〇三
八五 心猿妬木母　魔王計吞禪　五一五
八六 木母助威征怪物　金公施法滅妖邪　五一九
八七 鳳仙郡冒天致旱　孫大聖勸善施霖　五二四
八八 禪到玉華施法會　心猿木土授門人　五二九
八九 黃獅精虛設釘鈀會　金木土計鬧豹頭山　五三五
九〇 師獅授受同歸一　盜道纏禪靜九靈　五四一
九一 金平府元夜觀燈　佞英洞唐僧供狀　五四七
九二 三僧大戰青龍山　四星狹捉犀牛怪　五五二
九三 給孤園問古談因　天竺國朝王遇化　五五七
九四 四僧宴樂御花園　一怪空懷憎慾喜　五六六
九五 假合形緣擒玉兎　鍾離錯正會靈元　五七一
九六 寇員外喜待高僧　唐長老不貪富貴　五七六
九七 金酬外難遭魔障　聖顯幽魂救本原　五八〇
九八 猿熟馬馴方脫殼　功成行滿見眞如　五九
九九 九九數完魔刻盡　三三行滿道歸根　六〇一
一〇〇 徑回東土五聖成眞　六〇五

新訂 西遊記下卷目次 終

新訂 西遊記 下卷

五四 法性西來逢二女國一

知說三藏師徒は、老婆が家を立出て三四十里も行き給ふに、忽ち一樹の城地あり。是則ち西梁女國なり。三藏、三個の徒弟を顧みて曰く、此國貴賤老少總て皆婦女なり、偏們情願んで往來に放蕩の事あるべからず。三個、師父の命に遵ひて行く。頓て東門の街に出づるに、衆部の國人四個の者の來るを見て手を拍つて大笑ぎ、人種來れりとて諸方より群り集り、立地路を塞ぎて通さず。四個の者は上前難く、怎麼はせんと停立む處に、八戒曰く、我今道を撥開いて見せ候はんと、頭を擧げ大いなる耳を振りたて、嘴を延ばし唇を翻し、一聲呵と吶喊きければ、何かは以て韡かざらん、兩邊へ發的と散げ躲る。四個の者は打笑ひつゝ正前み行く處に、一人の女官路の一邊に立ちて高聲に嘆はり、個

心猿定レ計脫二烟花一

大町桂月校訂

個漫に城門に入るべからず、驛館に入りて姓名を名宣り籍子に記し、寡人國王に奏し其後に行かしむべし。三藏是を聞いて馬を下りて女官に連れて一箇の官舍に到り看るに、門の上に額を扁けて迎陽館の三字を記せり。三藏、行者に向ひ、昨日婆が云ひし詞果して誠なりとて裡に入りて坐し給へば、女官茶を侑め禮畢つて察しけるは、寡人は迎陽館の驛丞にて候、列位は那里より來り給ひしや。行者答へて曰く、我們は東土大唐より西天に到り經を求むるの僧にして、我が師父は便ち唐帝の尊弟にて三藏と號すなり、又吾們三個は唐御弟の御弟子にて關文を齎ち來れり、願はくは貴嬪、道關文を證見として國王に奏聞ありて、快く吾們を西方に行かしめ給へ。驛丞筆を採りて始終を寫省し、敬恭く三藏を禮拜し、寡人聖僧の來り給ふを知らず、遠く御迎へにも出て候はず、罪を敕させ給へとて、官事的に分付けて齋を侑め、萬般と欵待させ、寡人は國王に奏聞して關文を奔勸め、疾く〳〵西方へ送り候ふべしと云ふ。三藏歡喜びて謝答し、迎陽館に宿し給へば、驛丞は衣冠を整へ城に入り、國王に見え逐一に奏聞す。西梁國の女王是を聞いて大に喜び、文武の女官に向つて曰はく、吾が國中開闢より以來更に男子なし、玆において陰陽の道を失ふ、今日唐王の尊弟我が國に來り給ふは寔に國家の大倖ならずや、我彼御弟聖僧を迎へて國王と做し我は皇后と成つて陰陽配偶して子を生じ、永世帝業を傳へ

ば、豈善からずや、昨宵吾金屏生彩艷、玉鏡展光明と夢見たるは便ち此吉兆ならんと曰へば、衆位の女官們一齊に頭を傾け、主公の命至極せり、寔に是萬代に家を傳ふる尊計なるべしと悉く勇み仲眉びけり。此時驛丞の曰く、當下彼師弟を見るに、唐僧の相貌は堂々として實に國君の體を做せりと雖も、唯三個の徒弟們形相兇惡にして妖魔の如く、更に人に形どらず、彼們は住め置きても快活なし、關文を查勘めて彼三個に遞與し、西方に遣して經を取らせ、唐御弟一個を住め置くべし。衆位の女官曰く、驛丞の詞理に當れり、唯配合の事媒妁無くては協ふべからず。女王曰はく、然らば當駕大師が媒妁と做し、驛丞は主婚と成るべし、趂早迎陽館に到りて唐御弟に此事を說話れよ、愈々諾許する時は我城を出でゝ是を迎ふべし。大師、驛丞勅を受けて急ぎ迎陽館にぞ到りける。此時三藏は、大師の來るを聞きて行者に對ひ、唯今大師爰に來るは何の譯ならん。行者曰く、是必ず婚姻を求むるなるべし。三藏大いに驚き、他若强ひて我に勸住めば怎麼して善からん。行者曰く、老孫能き處置あり、他們只管勸住るならば、且望に任せて婚姻を套上へ給へと、未だ云ひも果らざるに大師、驛丞入り來り、互に禮畢りて大師の曰く、唐御弟に際なき歡喜を告げ候はん。三藏の曰く、我は出家なれば何程の事も然樣に歡喜ばず。大師曰く、抑此國は西梁女國と稱して開闢より孤陰の國なり、今僥倖に御弟

聖僧此國に降臨し給ふ、萬望吾が國一圓の富貴を以て御弟を入贅と做し、南面して孤と稱せしめ、吾が王皇后と成らん事を願ふ、是故に貧道に命じて媒妁と做し、驛丞に婚禮主とす、御弟快く其意に遵ひ給へ。三藏唯頭を低れて一向に答へず。大師又曰く、大丈夫は時に應じて衍たるべからずとかや、豈一國を讓りて女婿と爲る事天下に又有るべけんや、速に御返辭有るべきなり。三藏益々答へず。獃子の如く啞の如く一言の應もなし。大師一向すゝむる時、三藏終に行者に向ひ、汝は此儀怎麼思ふや。行者が曰く、老孫是を考ふるに、師父此處に止り給ひて善からんと存ずるなり。三藏の曰く、我此處に止らば、誰か西天に到り經を把り來る者あらんや。大師の曰く、貧道宜く計ひ候はん、先唐御弟は我が國王と婚禮をなして爰に止り帝王と成らせ給へ、三個の御弟子達は婚姻の宴席濟みなば、關文を查勘め四天に遣して經文を取らせ給ふべし。行者聞いて、大師の辭大いに理なり、我們師父を爰に止め置き、老孫們三個四天に行きて經を把り來り、爺娘に見え盤纏を貰ひ大唐に歸り候はんと云へば、大師、驛丞是を聞いて大いに歡喜び行者を拜謝し、長老多くの恩情に成りぬ、我們早く立歸って國王に奏聞し、城を出でゝ迎へ奉らんと勇み歡喜び歸りけり。三藏は行者に向ひ、此潑猴總て我を弄殺にして此處に捨て置きゝ婚姻を做さしめ、儞們西天に到り佛を拜して經を求めんとす、我假令死すとも

斯る事を做すべけんや。行者が曰く、師父焦慮あるべからず、老孫師父の尊意を能く悟りたれば、實に此事を做すにあらず、唯悲きは此處に來り此人に遙ひぬ、渠が望む處によりて謀計を爲さゞれば、師父爰を遁れ給ふ事協ひ難からん、其仔細は、渠吾が望協はぬ時は、關文をも查勘めず、我們を西方へ送るべからず、儻又惡念を發しなば、多勢を以て師父を害し、尊身の肉を分け採りて香囊と做すべきなり、然もあらば、吾儕手足を搖す事能はず、師父の爲に是を防がば大勢を打ち殺さん、此一國の人總て妖精に有らず、平人を打ち殺さん事、師父原來忍び給はざる處なり。三藏の曰く、儞が言ふ處尤もなりと雖も、唯怕らくは國王我を招いて配合の禮を行ひなば、吾佛家の德業を破り、原の人間に墮落すべし。行者聞いて、是些も煩惱なし、今日渠城を出でゝ、師父を迎へて婚姻をなし、皇帝の禮を行ふべき間、師父管ず辭退せず、龍車に乘りて城に入り、國王を賺して關文を查勘めさせ、我們を招いて遞與し、西天へ遣すと云ひ給へ、儞又吾們三個城を出づる時、國王をはじめ文武の群臣們を立定身に做し置き、師父を馬に乘せて遠く數百里を急ぎ、然して後法を解饒さば、國王も群臣も漸々に歸り去るべし、是渠が命を助け師父も亦恙なく、是を號けて假親脫網（したしきをかりてあみをまぬかるゝ）の計策とす、豈萬全の方便ならずや。

三藏大いに歡喜び、再三行者に謝し給ふ。此時驛丞來り、國王自親ら御迎に出て給ふ、唐御弟早く準備あるべしと告げゝれば、三藏、三個の徒弟と倶に迎陽館を出で迎へ給ふ。國王衆位の女官を引領て輦に駕りて來り、四個の前に進み、那が唐御弟なるぞ。大師指さして、錦繡の衣着たる者便ち是なり。女王熟々伺ひ看るに、果然三藏一表の人物にして、其相貌尋常ならず。女王心中大に讃賞び、三藏の手を拿つて曰はく、御弟龍車に登り金鑾殿に到り、我と配合の禮を做し給へ。三藏は戰々兢々、心中酒に醉ひたるごとく茫然として在坐しけり。行者一迄に是を見て、師父然までに謙退し給ふな、皇后と倶に疾く輦に駕り給へと勸めければ、三藏沒奈何懽喜ばしき面貌を做して、女王と倶に龍車に駕り給ふ。文武の女官是を見て、列位花眼笑形勢にて城中に歸り入る。行者が羅三個は、馬を率き行囊を荷擔つゝ五鳳樓の下に到る。此時殿中曉々わたり、今宵倖ひ良辰なれば女王唐御弟婚姻を做し給ひ、時日黃道吉日なれば、御弟を皇帝の位に即け奉り改元を行ふべしと、先堂中に樂を奏し、左の方は素筵を設け、右の方は葷筵を連れ、文武の女官悉く來りて席に着き、三藏と女王を禮拜す。行者が羅三個なも左の方の筵席にて萬般と欵待しつゝ、君臣伸眉の歡宴は寔に贍はしくぞ見えにける。斯くて酒も闌酣に成りける時、三藏、女王に向ひ、快く關文を查勘め三人の羅を西天に送り給へ。女王是に遲

ひ、關文を拿り來れと命じければ、行者即ち關文を捧ぐ。女王是を排き見るに、上首唐王の寶印あり。其次は寶象國、烏雞國、車遲國の寶印を連れたり。國王、三藏に對ひ、關文の中に怎麼三個の御弟子の姓名は記さゞるや。三藏答へて、渠等原來唐朝の人物にあらず皆是路上弟子にして召連れ來れり、此故に姓名を寫着さゞるなり。女王聞きて、然あらば我三個の姓名を寫着れ候はんと云ふ。三藏曰く、陛下奈何も善く計ひ給はるべし。此時女王筆を採りて悟空、悟能、悟淨と三個の名を記し、華押を寫竟り行者に遞與し給ひければ、行者是を請取りて後女王を拜し、別を告げ奉る。女王金銀若干を賜はり路の盤纏を助けんと爲給へども行者敢て是を受けず、三個とも疾や打扮ければ、三藏、女王に向ひ、萬望は陛下、貧僧と倶に他們を城外まで送り給はんや、貧僧能く〳〵分付けたき仔細あり。女王謀計とは努にも知らず、御弟の詞理なりとて、頓て鳳輦を備へて三藏と倶に打駕り、城の四門を出でゝ遠く送るに、三個の徒弟鳳輦に向ひて曰ひけるは、女王遠く送らせ給ふな、我儕は皆西天に赴くべしと云へば、三藏急に輦を飛下り、鳳輦に打向ひ、陛下は是より還り給へ、我儕は皆西天に赴くべしと云へば、女王聞いて大いに驚き色を失ひ給ひ、唐御弟怎麼異心し給ふぞや、誰かある彼挽き止めよと宣ふ處に、立地一陣の旋風颯と發り、那里よりか一個の女走り出て、唐僧、爾と我と風月の情を樂まんと

云ひも敢ず三藏を爬掴み空中に飛昇り、踪跡もなく失せたりければ、行者は孫ての思惟大いに遑ひ、師父は那里へ行き給ひしやと叫びければ、悟淨が曰く、唯今の女が風を發し攫ひ行きたり。行者聞きも敢ず、儞等早く追趕けよと云ふより疾く雲に打乘り、空中遙に昇りければ、八戒、悟淨も引連いて雲に飛乘り、那里ともなく追ひ行きける。彼女王を上首め綵位の女官等大いに慌き呆驗呆て、天を拜し、此僧等は寔に是白日昇天の羅漢なり、我們眼ありながら尋常の僧徒と思ひ、萬般心を費しけるこそ愚にてありけれとて、空々と城中へ還りけり。

五五　色邪淫三戲唐三藏　性命修持不レ壞レ身

却説行者が輩三個は、虛空に騰り霧を踏んで伺ひけるに、彼旋風西北を指して渦捲きゆく。三個是を追驅けて一座の高山に到りける時、立地風息み塵靜まりて妖怪が行方を知らず。行者們是を見て、此高山必ず妖怪の巢穴ならんと、雲を下りて尋れ見るに、一邊に一個の青石あり。其形屏風のごとく、光明ありて美き事云はん方なし。這後辺に兩扉の石門あり。上に六箇の大字を鐫りて毒敵山琵琶洞と記したり。行者曰く、儞們此處に在りて伺ふべし、我洞の裡に入りて師父を尋ぬべしとて、蜜蜂兒と

變じて門の縫罅より潛り入り、門を越ゆる事二重にして一箇の花亭あり。爰に一個の女怪坐し居て左右には許若の丫鬟ども隨從ふ。行者は花亭の榻子に止り居て是を見るに、亦兩個の蓬頭の女、兩盤の熱騰々と立つ麵食を捧げ來れば、彼女怪、丫鬟を近着けて、快く唐僧を伴ひ來れと分付けゝれば、丫鬟ども後の房に到り三藏を扶け出し來る。彼女怪が曰く、唐御弟心を排鬱げて樂み給へ、我が道里は西梁女國の富貴榮華には及ばずと雖も、其實は清閑の地にして念佛看經には寔によし、我御弟と百紀偕老の夫婦とならば、豈心樂からざらんや。三藏更に答をなさず。彼女怪打笑ひ、我御弟の辭を喰はざるを知るが故に、葷と素との酒肴を準備せり、御弟何れなりとも心に任せて受用し給へ。三藏想ふやう、我今此女怪に接禮もせず物も喰はず居らば必定我を害すべし、其上徒弟們未だ消息無ければ、身を遁るべき道なし、我且忍びて渠が機嫌を伺ふべしと女怪に向ひ、吾今女菩薩の誠心を惡ず、貧僧は素淨の食物を用ふべし。女怪、三藏の詞を聞きて心中大いに懽喜び、一箇の砂糖饅頭を把り二箇に劈破て三藏に與ふ。三藏是を把りて喰し、亦一箇の肉饅頭を取り女怪に與ふ。女怪笑ひて曰く、御弟怎麼ぞ饅頭を割らずして我に與ふるや。三藏合掌して曰く、我原來桑門の身なり、那ぞ葷を破らんや。此時行者梢子の上に在りて窺ひ居たるに、女怪萬般に淫媚の形相を做すにぞ、怕らくは師父

の眞性を亂されんかと躊躇み打忍りかれて本相を現し、鐵棒を擎げて走り蒐り、粱畜無禮を爲す事なかれと大聲喝道すれば、女怪驚き、口より一道の烟を噴き出し、唐僧を原の處に推込みて、一柄三股の戟を把りて跳り出で、憊懶の潑猿、いかんぞ恣に我が家に入りて我が容貌を伺ひしぞ、老娘の一叉を見せんと戟を振つて打つて蒐れば、行者鐵棒を把つて架住め、さん〳〵に戰ひ、竟に洞の外に出づれば、八戒是を見て急に釘鈀を持つて突かんとす。女怪、八戒が來るを見て忽ち身を變かして倒馬毒を使ひいだし、行者が頭を一度突くに、行者、苦阿と响喨て敗陣し立地に逃出す。八戒も亦堪陀れて身後に連いて逃げ失せければ、女怪は其儘洞の裡へ歸りける。行者は遙に逃げ行きて頭を抱へ眉を皺めて云ひけるは、怪いかな渠が兵器一度頭に中ると要準く、其疼む事堪へがたし、抑奈何なる兵器なるや。八戒笑ひて曰く、大聖平日に云ひ給ふは、我が頭は八卦爐中に煉鍛へたる所にして、金鐵といへども疵着くる事能はずと自慢して居給ひしが、今怎麼僅の疵に困苦むや。行者曰く、怎何も我が頭は自ら煉鍛へたる處なれば、刀、斧、槌、劍と雖も傷損ふ事能はず、雷公落槌りたりとも破るべからず、火も亦燒くこと能はず、知らず今日此妖怪、奈何なる兵器有つてか我が頭を破りぬるや。悟淨が曰く、大哥頭疼み日も亦晩に及ぶ、師父の下落計り難し。行者が曰く、苦からず、師父彼洞裡に在り

て性命更に無異なり、我們今宵は爰に寢して天明くるを待ちて再般穿鑿すべしと、遂に三個打連れて其夜は山の脚下に安歇みけり。此時女怪は小的們を呼びて前後の門を緊く關し、又伏房に燭を掌り香を焚き、百種の酒肴を案排けて三藏を領出し、幾句と酒を勸めけれど、三藏は更に口を開かず、眼を塞ぢて心裡に經を念へて惘然と坐し給ふ。女怪は十分に嬌媚の形を顯し三藏を抱きて、倆と交歡して慰めんに、快く閨房に入り給へ。三藏は他が怒に逢はん事を怕れ、沒奈何香房に入りて坐し給ひ、頭を低れて一言も交へず。女怪淫を求めて萬般と雲雨の情を說き出し、半夜に到るまで纏ひ迫れども、三藏漠然として見ることもなく聞く事もなく、一念更に動かざりければ、女怪竟に怒を發し、小的們を呼び繩を拿り來らしめ、三藏を猱猿模樣にして廊下の上に釣揚げおき、燈光を噴滅して其身は園に退きけり。斯くて夜も明方に到り、行者は山の麓に起出で、我頭の疼些少癒去く成りたれば、復八戒と俱に彼處に到り、師父の動靜を伺はん、悟淨は昨日の馬と行裝を拿り來つて爰にて待つべしと、頓て八戒と打連れて彼石屏の下に到り、行者、八戒に向ひ、我且裡に入りて昨夜の次第を師父に訊ぬべしと、身を變じて蜜蜂兒となり、門の縫裡鑽より潛り入り、花亭に到り伺廻しけるに、彼妖精牛夜睡らざりし故未だ起き出でず。行者廊下の邊に飛び行き見れば、爰に師父を吊揚げ置きたり。頓て師父

の頭の上に住りて、師父と一壁呼びければ、三藏是を聞き、悟空疾く我が命を救へ。行者聞いて、師父昨宵は好事の候ひしや、委く說り給へ。三藏牙を咬んで曰く、吾死すとも然樣の事を做さず、彼女怪昨宵吾に纏ひ着き迫る事半夜なりと雖も、我曾て衣帶を解かず身を汚さず、此故に他怒を發し、斯の如く細縛めたり、儞萬望この難儀を救ひて我に經を把らしめよ。此時女怪睡を覺し、經を把らしめよと云ふ聲を聞着け、臥房を轉び出で來り、唐僧我と夫妻の情は做さず、何の經を把らんとて誰と說話するやと曰ふ。行者慌いて急に門外へ飛び出で本相を現し、八戒を招き、師父更に身を汚し給はずと前宵の動靜を語りければ、八戒聞いて、罷了々々個箇の和尙なり我師父を救はんと、彼獸子粗鹵に釘鈀を揭げて石門を突破らんとす。小的們是を見て急に跑進みて斯くと告げしれば、女怪聞いて大に怒り、乍ち戟を把つて躍り出で、潑猿野馳怎麼そ我が門を破りたるぞと罵りければ、八戒大いに怒り、濫淫の賤貨我が師父を困陷れおき、却つて口剛く罵るや、早く師父を送り歸さば儞が一命をも饒すべし。妖怪ます〳〵怒り、忽ち妖法を行ひ、鼻より火を出し口より烟を噴き出し、戟を舉げて八戒を刺さんとす。八戒釘鈀を以て打對ふ。行者も鐵棒を幇げて是を援け、三四合も戰ふ時、妖怪、八戒が唇を倒馬毒を用ひて刺しければ、八戒、阿と叫びて口を喝め、疼を忍びず逃げ跑りければ、行者も俱に

敗陣し、樹より悟淨が待ち居たる處へ逃げ歸る。八戒は大いに嘘び、不能贏仙、此疼み堪へ難しと臥轉びて苦みける。此時一個の老婆忽然と現れ來る。悟淨、行者に向ひ、後邊に來る老媽は何人ぞや。行者頭を回して是を見るに、這老媽の頂の上に祥雲有りて蓋ひ、左右に香靄ありて身を罩みければ、行者急ぎ叫びて、儞們快く來つて觀音菩薩を拜すべし。八戒、悟淨慌得ふためき、合掌して拜を偽す。菩薩、祥雲を踏んで空中に立ち、眞像を現し給ふ。行者、空中に到り拜告して曰く、老孫唐僧を扶け西方へ赴く處に、今爰に妖怪有りて怪しき兵器を用ひ、老孫が頭を破り八戒が唇に傷けたり、寔に是を收めがたし、今饒倖に哪薩を拜す、萬望は這妖怪を收め我が師父を救ひ給へ。菩薩聞き給ひ、他は是蝎子の妖精にて、人を傷損ふものは尾上の鈎子なり、是を倒馬毒といふ、吾も亦他には近遊き難し、今倘唐僧を救はんと思はゞ、快く東天門の裡光明宮に到り、昴日星官に救ひを求めば能く是を降伏せん、仔細は告げ行ふ事難しと曰ひて、乍ち颯と金光を放ち南海に歸らせ給ふ。行者雲を下りて八戒と悟淨に向ひ、吾菩薩の告に任せ、今より光明宮に到り昴日星官を賴むべし、儞們爰に在りて少時待てよと云ひ捨て、忽ち觔斗雲に打駕りて飛ぶが如くに東天門に走り行き、光明宮に到り、昴日星官に見えければ、星官悟空を見て、大聖何幹有りて來り給ふぞと問ひ給ふ。行者曰く、老孫唐僧を保守て西

天に行かんとするに、西梁國にて妖怪に阻礙げられ、觀音菩薩の告に依て慇懃に參り候、萬望くは星官彼妖怪を捉へ我が師父を救ひ給へ。星官是を聞きて、然らば吾行きて助くべしと曰ひ、頓て準備を整へ行者と俱に毒敵山に到り、八戒、悟淨等に見え給ふ。八戒唇を喝め、星官無禮を免し給へ、疾身に有りて禮を行ふ事能はずと云ふ。星官聞きて、何の病有りやと問ふ。八戒答へて、彼妖怪に疼められし事を語りければ、星官聞きて、我是を治癒得させんとて、手を以て唇を撫で、口より仙氣を噴霧け給へば、八戒立地に疼を忘れ、大いに歡喜び幾般か拜謝しける。行者が曰く、老孫昨日妖怪に頭を破られ、上首は感疼み候ひしが、今は却つて痒くして堪へがたし、星官是をも治し給はんや。星官又行者が頭を二度撫で、口より仙氣を噴懸け給へば、乍ち餘毒退きて全快成りけるにぞ、行者只管仰眉びける。夫より星官は、行者と八戒に命じて、爾們兩個彼妖怪を偽引き出せ、我は門外に隱れ居て梁が出づるを待つて降伏すべしと曰ふ。行者、八戒心得たりと、兩個一齊に門裡へ討ち入りければ、彼妖怪是を看て忽ち戟を把つて立對ひ、十合ばかり戰ふ處に、妖怪又倒馬毒を用ひんとす。行者、八戒是を悟りて門外へ逃げ出せば、妖怪續いて鋼を採り追驅け來る。此時星官本相を現して妖怪に立對ふに、是一隻の大公鷄なり。一聲喚ぶと見えけるが、妖怪乍ち本相を顯し、其大いさ琶琵ほどの蝎蟲と

なる。星官又一聲喚ぶと齊く、妖怪總身痲れて倒れ臥す。八戒釘鈀を把つて微塵に突碎き殺しけり。斯くて星官行者に向ひ、今は用なし我は歸るべしと曰ひて、忽ち金光を放ち雲に駕りて別を告げ、東天門に還り給ふ。行者が翌三人は天に向ひて拜謝し畢り、再び洞中に討ち入りければ、衆部の女們跪下いて稟すやう、我們は更に妖怪にあらず、悉く彼妖怪が西梁女國より捉へ來りて婢と做し使ひ候ふなり、萬望くは一命を助け給はるべしとて一齊に歎きける。行者是を見るに、果然妖怪の氣一向に有らざりければ個々命を助け、大家女國へ歸らしめ、頓て師父を救ひ出し、斯くて一把の火を放つて此洞を燒き盡し、終に西に向ひて進發しけり。

五六　神狂誅二草寇一　道味放二心猿一

斯くて三藏師徒は、琵琶洞を出てより只管西に向ひて行くに、若干の日數を經て亦清明の節に逢ふ。一日平地にて更に山なき處に到り、個々腹餓ゑて路不行果、疾く人家有る處に到り齋を喫すべしと、八戒釘鈀を擧つて馬を追へども更に行かず。行者鐵棍を取出して一聲叫ぶと見えけるが、馬は俄に駈出して其疾き事箭の飛ぶがごとし。三藏馬を扯き止むれども更に止らず、沒奈何鞍に口咬つきて

行き給ふに、此馬一息に二十餘里を馳せ行きて漸々に止りける。三人の徒弟未だ追及ざる處に、乍ち一聲の鑼を響かすよと見えけるが、道の一邊より三十人許の剪徑ども、個々鎗刀を把つて躍り出で、三藏を捉圍み、其中より兩人の大漢進み出で三藏に對ひて云ふ、汝は桑門なる故一命をば免すべし、盤纏あらば遞與へて通れ。三藏馬より飛んで下り、蹲跪いて云ひけるやう、貧道は東土大唐より西天に到り經を求むる僧なるが、長安を出でしより星を重れ月を積んで漸々に此處に來る、今は盤纏とては些もなし、願はくは大王貧道を救して西方へ行かしめ給へ。剪徑ども嘲笑ひ、倆仇言を吐く事なかれ、盤纏なくば襁褓を脱ぎ馬をも俱に遞與してゆけ、然なくば汝を殺すべし。三藏今は事急に及んで畢竟なく詭詐りて云ふやう、盤纏有りといへども皆徒弟等に持たせ置きたり、跡より渠們が來るを待つて盤纏を集めて大王に奉らん。偸夫等是を聞きて、然らば夫を待つべしとて繩を以て三藏を綑め、路の一邊にある樹の上に釣上げ置きて、爰彼首に引隱れて待ち居たり。此時行者、師父を追うて來り此體を見て大に詭き駈けよりて、何故に斯く綑縛められ給ふやと問ふに、三藏事の仔細を語り給へば行者聞きて、造化よき賈こそ出來たれとて忽ち身を變じて小和尚となり、肩に包袱をかけ壁を敲つて敲き、師父何ぞ斯く綑縛に逢ひ給ひしやと叫びければ、剪徑とも聞きつけて走り出で、行者を把圍

み、倆疾く盤纏を出して吾們に付與すべし、然なくば此處を通すべからず。行者曰く、何れも呌喝給ふ事なかれ、此包袱の中には若干の盤纏あり、殘りなく進らすべければ疾く師父を助け給へ。偸夫ども大に歡喜び、三藏が綑縛を解きければ、三藏闖しく馬に飛乘り、原來し道へ逃げ歸る。行者詭得て、道が違ひ候ふと呼はりつゝ逃げんとす。剪徑ども扯止め、倆走る事なかれ、疾く盤纏を出せ。行者笑つて曰く、倆等盤纏を求むるならば、是を三つに分けて汝等二人と吾と三人にて是を把らんや。剪徑等聞きも敢ず惡き小禿子が言語かな、若許若の金あらば些は汝にも與ふべし。行者曰く、倘又盤纏の數不足ならば、倆等かれて剪徑して盜み貯めたる金子有るべし、夫を出して吾に與へよ。盜賊ども大いに怒り、此の小禿子不悟死生、却つて吾們が物を拿らんとするや、唯打ち殺せと詈りつゝ、忽ち棒を以て行者が頭を七個八個打ちけれども、行者知らぬ風情にて立ち居たり。剪徑ども大に驚き、此小禿子が頭の堅き事こそ心得れと二三人立ちかゝり一同に打ちけれども、行者些も不管して、個々少し歇み給へ、吾又個々に贈る物ありとて、耳の裡より綉花針を把出し、我們沙門の事なれば盤纏とては持ち來らず、唯此針を進らすべし。剪徑ども怒つて曰く、裁縫の事を知らず、此針何の要にかせん。行者聞きも敢ず手に取つて一度振りければ、强大なる鐵の棍となる。偸夫ども呆々抨々、顏見合

せて居たりけり。行者曰く、汝們功果あしく某に出逢ひたり、我一棍を喫はすべしとて、進み寄りて一人の大漢を唯一撲に打ち殺す。倫夫ども大いに怒り、遁すまじとて闘きけるを、行者物の數ともせず、また一棍に今一人を打ち殺せば、多くの盗人連忙て騒ぎて四方に散つてぞ逃げ失せける。此時八戒、悟淨、三藏に出合ひ事の仔細を聞きて、行者が未だ來らざるをあやぶみ、此處へ尋れ來り、此體を見るより急ぎ三藏の許へ逃げ歸り、行者が人を打ち殺したる事を告げ〻れば、三藏聞きて大に驚き、行者が强惡なるを詈り、口の中に獨言きながら馬を進めて來り給ひ、此死人を見れば淋漓として血流れ倒れ臥したる有さま、心に忍び兼れ給ひ、八戒に分付けて路の一邊に埋めさせ、怒を含んて行き給ふに、向ひの方に一樓の房衙あり。三藏鞭を持つて指して曰く、吾們今宵は彼處に至り宿を借りて安歇むべしとて、頓て門前に到り馬より下り給へば、一人の老人走り出で、三藏を見て、那里より來り給ふ人ぞと問ふ。三藏の曰く、貧道は東土大唐より西天に到り經を求めんとするの僧なるが、今烏既に天暮に及ぶ、願はくは一宿を恩惠み給へ。老人、行者が躍三人を見て大いに驚き、偖は妖精來れりとて頻忙く逃げ入らんとす。三藏是を扯きとめて曰く、施主驚き給ふ事なかれ、彼三人は吾が徒弟にて形は醜陋と雖も亦更に妖精にあらず、管ず心を安んじ給ひ一宿を免させ給へ。此言を聞きて老人

漸々に落着き、然らば此方へ入り給へとて四人を裡に請じ入れ、互に禮了りて齋を侑め百般と接待しける。三藏、老人に對ひ姓名を問ひ給ふ。老人答へて、某が姓は楊氏なり。三藏又、令郎ありやと問ひければ、老人が曰く、一人の愚息あり、二人は孫にて今尚幼なく候。三藏、令郎に見えたきよしを日へば、老人が曰く、渠に逢ひ給ふとも禮を知りさふらはず、小姓命苦くして善からぬ子を持ち、嗟平日に家にあらず。三藏の曰く、那方に行きて活計を爲給ふや。老人太息を繼ぎて曰く、過業の爲外に在る正道の子なりせば、那て歎き候はんや、專ら家を打ち人を殺し、火を放ち財を偸むを常の業とす、尤も交る友多しといへども、悉く人倫の道を知らず、個々狐狗黨の類なり、五日向に家を出て今に歸り候はずと云ふ。三藏心裡に思ふやう、怎的悟空に殺されしは渠が息男には有らざるかと密に悲み給ひけり。斯くて楊老は、家の後邊なる園の内に草堂の有りける處へ四人の者を伴ひて此裡に安歇せけり。斯かる處に楊老が一男、大勢の兇性どもを引領れ四更の頃に到り家に歸り、吾們甚だ飢ゑ勞れたりとて、亂嗔炒鬧ぎて妻を起し飯を焚かせ、自ら柴を取り來らんとて後園に到り、三藏の白馬を見付け出し妻に向ひ問ひけるは、今後園に有る白馬は那里より來りしぞ。妻が曰く、是は東土大唐より西天に到り經を取る和尚の白馬なり、黄昏のころ爰に來り宿を求め給ふを、公婆草堂の裡に伴ひて

安歇せおき給ひぬと語るを聞きて、頓て大勢の群黨に向ひ掌を拍つて大に笑ひ、鬱今我が家に在り。群黨是を聞きて、鬱とは何者ぞや。楊老が男の曰く、今日我が頭兒を打ち殺せし和尚我が家に宿を借り、草堂の裡に在りて熟睡れたり、我儕個々飯を喫し畢らば、一同に手を下して頭兒の仇を報ずべし。群黨の者大いに歡喜び、各自に準備をするなりけり。楊老は物呟喝きに眼を覺し、密に此動靜を聞きて驚き、頓て後園に到り四人の者を動起し、密に此事を告げて背門の扉を排き、長老早く遁れ給へと云ふ。三藏は是を聞いて大いに驚き、三人の徒弟と俱に楊老に拜謝して後門より遁れ出で、道ふ急ぎて落ち給ふ。然るに撒潑ものどもは飯を喫し畢りて後、一同に拔き列れて草堂の裡に伐つて入り見れば人影更になし。其首よ爰よと尋ぬる間、後門の開きたるを見つけ、偖は爰より逃げ出でけん、夫遠すなと言ふより早く鬨を揚げてぞ追蒐けたる。三藏は遙に落ち延び給ひしが、乍ち後より二三十人の者どもが鎗刀を把つて追ひ來るを見て、怎麼はせんと怕れ給へば、行者曰く、師父我心し給ふな、老孫行きて追ひ歸し候はん。三藏聞いて、儞管ず人の命を破すべからず、只渠們を愕眙て追ひ返すべし。行者急ぎ鐵棍を把つて回頭し、偸夫どもを悉く打倒す。此間に三藏は八戒、悟淨と諸俱に遙に逃延び給ひけり。行者は大勢を打ち伏せて疵負の偸夫に向ひ、楊老が男は何れぞと問へば、黃なる衣服を着

たるは則ち楊老が一男なりと答ふ。行者渠が刀を奪ひ取り、忽ち首を伐り落し、手に提げて三藏に追及き、是こそ楊老が男の不孝的が首にて候へとて見せければ、三藏大いに驚き、行者に向ひ大いに叱つて曰く、儞此潑猿、昨日も兩人を打ち殺しぬ、我汝が不仁なるを心中に恨むる處に、今宵楊老が房に到り、渠が齋を受け舍を借り、後門を排きて我が一命を救ひたり、假令渠が一男奈何許の不肖ありとも我に管る事に有らず、那ぞ漫に恩を忘れ渠が首を斬りたるや、汝が如き者弟子とする事協ふべからず、趁早に歸るべし、唯今儞に罪をあたふべしとて緊箍兒を唱へ給へば、行者頭疼みて堪へがたく、地頭に倒轉びて、師父念ずる事なかれ、說言ありと曉びけれども三藏更に聞き容れず、儞許多の人を殺し天地の和氣を破る、那ぞ今免さんやと口も止めず唱へ給へば、行者は面色赫く眼腫れて恨苦堪へがたく、念ずる事なかれ、我今歸り去るべしとて、乍ち觔斗雲に打乘つて去方知らず成りにけり。斯くて三藏は、八戒に命じて楊老が男の屍を尋ね出し首を繼がせ、路の一邊に埋めさせ給ひけり。

五七　眞行者落伽山訴苦　假猴王水簾洞謄文

却說孫行者は、三藏に追ひ歸され、空中に立つて沈吟するに、我今花果山に歸らば眷屬們に笑はる

べし、亦師父の方に行かば緊箍兒を唱へられん事兢しく、怎麼はせんと立煩ひ多時考へしが、先南海菩薩の方に赴き此事を訴ふべしと、夫より急ぎ南海に到り、紫竹林中に赴き寶蓮座の邊りに寄りて、菩薩を拜し身を倒し、聲を發つて大いに歎く。菩薩、善財童子に命じて是を援け起させ給ひ、悟空何の勞き事有りて斯のごとく歎くや、備に仔細を語れ、我儞が爲に恨苦を救ひ孽を消滅すべし。行者、三藏に迫はれたる事を語り、老孫唐僧を助け西天に赴くの路上、身を捨てゝ妖魔を除き、正果に歸せん事を求むる處、彼長老恩に背き義を忘れ老孫を追ひ出し、更に黑白分ちがたし。菩薩曰ひけるは、儞神通廣大なる身として何事に恨苦みて倫夫を殺せしぞや、彼唐僧一道に善心を取り、決して人命を輕ぜず、我今公道に論ずるに、總て儞が不善なり。行者が曰く、假令老孫些許りの不善事ありとも、功を以て罪を折き免じ給ふべき事なるを、斯のごとく追ひ放たれたり、萬望は菩薩慈憫を垂れ給ひ、緊箍兒を唱へ緊箍を拔かせ給ひ、老孫を水簾洞に歸し性命を養はしめ給へ。菩薩笑つて、昔日如來我に緊箍兒を授け給ふ、未だ曾て緊箍兒を知らず、等て、儞が爲に唐僧の行末如何なるや、是を伺ひ見るべしとて、蓮臺の上に端坐し給ひ、三界に心を運び惠眼をのべて遙に宇宙の廻りを見給ひ、少時して宣ふやう、師父早晩身を破るの難爲あり、遠からず儞み捨ぬべし、儞多時此處に在つて待つべし、

我唐僧に自說して汝を歸し、諸俱に經を把らせ正果に到らしめん。行者是を聞いて沒奈何菩薩の御傍に止まりて居たりける。却說三藏は行者を追ひ返し、八戒、悟淨と俱に五十里許り西に進み給ひしが、三藏の曰く、吾今腹中甚だ飢ゑたり、儞們何處へなりとも行きて齋を求め來ちんや。八戒が曰く、此邊り齋を求むる處候はず。三藏聞きて、倘齋を求むる處なくば水にても取り來れ。八戒が曰く、師父且馬より下りて待ち給へ、某尋れ來るべしとて雲に乘つて出行きけり。斯くて多時待てども歸らざりければ、三藏は飢渴に迫り、悟淨を呼んで曰ふは、八戒食を求めんとて出で行き未だ歸り來らず、我飢渴に忍びがたし。悟淨聞きて、貧道尋れ來るべしと、同く雲に打乘りて出で行きけり。三藏は唯獨となり、愴惶として待ち居給ふ處に、行者水を持ちて出で來り、師父此水涼しくて赤濁なし、先是を喫み給ひて飢を止め給へ、我再度行きて齋を求め來るべし。三藏大いに叱つて曰く、假令渴して死すとも汝が水を喫むべきや、趁早に持ち歸るべし。行者曰く、師父倘我をめし領れ給はずば、決して西天に到り給ふ事協ひ難からん。三藏の曰く、西天に行かれざるは儞が管る事にあらず、疾く〳〵歸りされ。行者面色變りて三藏を罵詈つて曰く、汝狼心の潑禿子、十分に我を差辱むる、思ひ知れよと云ひも敢ず、鐵棍を抑把りのべて三藏の背上を强大に打ちければ、三藏は眼昏み地上に倒れ死生半死の

動靜なり。行者歡喜び、二箇の包袱を奪ひ取り、觔斗雲に打乘つて去方知らず失せにげり。斯くて八戒は山の凹かなる處に人家あるを見つけ出し、偖は上首此山に遮られて人家見えざりしと覺えたり、饒倖なるかな、彼處に到りて齋を乞ひ來らんと行脚の僧に身を變じて一軒の家に到り乞ひければ、裡より一人の老婆出て來り、一鉢の齋を與ふ。八戒歡喜び、やがて本相を顯し原の道に立歸る途中にて悟淨に行逢ひ、又水を汲み持ちて二人一同に立歸り、師父を見れば、三藏は塵埃の中に倒れふし、白馬長く嘶き、邊に行裝は見えざりけり。八戒驚き、是は必定楊老が男子の餘黨爰に來りて、師父を打ち殺し行裝を奪ひ去りしならん。悟淨聲を發つて、師父々々疾く氣を蘇け給へと叫び歎く。八戒も涙般と介抱したりければ、三藏漸く甦りて苦氣なる聲にて曰ひけるは、今の程行者歸り來りて我に纏ふ、吾堅執に道ひ出したるに、渠怒つて我を一棍に打ち倒し、行裝を把つて逃げ去りたり。八戒聞いて大いに罵つて曰く、此潑猿、怎麼ぞ斯のごとく无禮なるや、我今渠が尋れ出し包袱を奪返さん。悟淨が曰く、倘怒ることを止めて且人家を求めて師父を安歇せ、宜く介抱いたし、其後渠が尋ぬるとも遲からぬ事ならずや。八戒是に遵ひ、樹に齋を乞ひし彼老婆が家に賴むべしとて、夫より師父を馬に乘せ進らせ、かの人家に到り、懇に賴みければ、老婆信やかに粥を煮きて三藏に俏む。兩人も飯を喫し

たる時、三藏、悟淨を呼んで、汝疾く行者を尋れ出し行裝を把り返し來れ、方知返し與へずば南海菩薩に是を訴へ、菩薩を請し奉りて是を求め歸るべし、管ず〳〵渠と爭ふ事なかれ。悟淨命を受けて雲にうち乘り、三日三夜にして東洋大海を過ぎ、彼花果山水簾洞に到る。此時行者は高き石の上に坐し、衆部の猿ども前後左右に群り居たり。行者手に一道の文か持ち、高らかに讀み上ぐるを、悟淨何事やらんと聞き居れば、唐の太宗皇帝より三藏に賜はりし關文を讀むなりけり。悟淨堪へかねて近く進み師兄、汝師父の關文を讀んで何にかするや。行者頭を擧げて是を見て、汝何者なれば爰に來れるやと喚びけれは、衆部の猴ども駈せ集りて竟に悟淨を捉へて行者が前に扯居えたり。行者大いに喝つて、汝何者なれば漫に此處へ來りしぞ。悟淨心中に、渠故意と見知らぬ風をするならんと思ひ、孝悌しく禮をなし、我が師父誤つて師兄の性暴々しきを恨み、終に追ひ放ち給ふ、師兄是を怒りて師父を打ち倒して擔兒を把り給ふ、今より疾く歸りて、再度師父を扶けて俱に西天に赴き經を把り給ふべし、倘又俱に行く事協ふべからずば、萬望行裝を我に賜はるべし、師兄今名山に在りて快く樂みを極め給ふ、怎的又外に求むる事あらんや。行者嘲笑つて曰く、汝行裝を求むる事は關文を望しき故ならん、我唐僧を扶けずば何爲西天に到り經を求むる事を得んや、我今汝排手當をなし置きたれば、明日爰を打立

つて、立地に西天に到り經を取つて歸るなり、汝倘疑はしく思はゞ我が準備を見すべきぞと、小的們に分付けて、疾く師父を請じ來れと云ひければ、小猿ども走り入りて一隻の白馬が牽き出せば、一人の三藏、一人の悟淨、又一人の八戒、行囊を擔ひて出で來る。悟淨是を見て驚き、大いに怒り、寶杖を廻して飛蒐り、彼假悟淨を唯一討に打ち殺せば、一隻の猿の妖精なり。行者是を見て大いに怒り、鐵棍を廻して打つてかゝる。衆部の小猿ども悟淨を捉へんと駈け來る。悟淨は急ぎ走り退き、雲に打乘り逃げたりける。彼行者更に是を追はず、又別に變化に驅れたる小猿に命じて悟淨が形に變ぜしめ、尙西方に赴くべき準備をこそは爲しにけれ。斯くて悟淨は、東洋大海を放れ南海落伽山に到り、木叉に逐ひて禮を施し、菩薩に見えたき由を告ぐ。木叉則ち悟淨に伴引ひて菩薩に見得しむ。菩薩曰ひけるは、爾唯今何幹有りて此處に來れるや。悟淨身を平臥して拜し畢り、頭を擧げて彼事を告げんとする處に、菩薩の身邊に行者が居り在るを見て悟淨大いに憤り、乍ち寶杖を把つて打たんとす。行者更に手を動さず、身を外して菩薩の御後邊に隱れける。菩薩是を見給ひて、悟淨漫に手を揮すことなかれ、爾何の故を以て行者を打たんとするや、且備に仔細を語れ。悟淨喘氣哼々的、行者が唐僧を打ち倒したる事より、水簾洞にて假三藏を裝構へし事ども一遍し、貧道此事を告げ奉らんとて參りし處に、

行者疾くも觔斗雲に乘つて我より擲に先に來る、極めて辭を乖巧にして執飾り、其身の善樣にのみ訟へ告し候はん。菩薩聞しめして、爾人を恨むる事を止めよ、悟空此處に來りて四日に及ぶ、一時も我が身邊を去らず、いかんぞ假を構へ經を拿らんとする事有らんや。悟淨が曰く、既に今水簾洞に一人の孫行者あり、爲何猥に菩薩を欺き奉りて胡說の事を告し上げんや。菩薩亦れて曰はく、既に斯の如くならば、悟空と俱に彼處に到らば自ら分明ならん。行者是を聞いて急ぎ悟淨と打列立ち、菩薩に暇時辭し別れ奉り、雲に打乘り花果山水簾洞にぞ赴きける。

五八　二心攪亂大乾坤　一體難修眞寂滅

孫行者は悟淨と打列れて雲頭を走り、頓て花果山に到り、雲より下り見るに、忽ち一人の行者、石臺の上に坐して群猴と俱に筵宴をなす。其容、衣帶より鐵棒に至るまで亦更に分毫も差はず。行者是を見て大いに怒り、鐵棍を把つて進みより、罵つて曰く、爾奈何なる妖精なれば我が姿に變化して我が兒孫們を奪ひたるや。彼行者聞きも敢ず鐵棒を振つて打つて懸る。眞の行者も同く鐵棒を閃して、兩人頓て九霄の雲內に打昇つて百餘合ぞ戰ひける。悟淨は洞の中に駈せ入りて小群妖を追ひ散し、行

裳を拿ぬれども更に見えず、唯一條の白布籙ありて洞の門を遮掛ひたり。悟淨不分利害、また雲に乘つて空中に到り、悟空が戰を援けんとするに、那個を實の行者とも分ち難ければ漫に手を下す事能はず。二人の行者悟淨に向ひ、倆力を助くるに及ばず、蚤く歸りて師父に此山を告すべし、我今より南海菩薩の前に到り、眞と假とを分つべし。悟淨是を聞きて、沒奈何又雲に打乘りて三藏の居給ふ方へぞ立歸る。兩人の行者は戰ひながら南海落伽山に到りけるに、護法諸天大に驚き、斯くと菩薩に注進しければ、菩薩立出て給ひ二人を叱つて曰はく、倆等爭ふ事を止めて何事有りや稟すべし。行者答へて告しけるは、此妖怪老孫が姿に變じ、眞も假も分ちがたし、願はくは菩薩慈眼を延べて能く是を分たせ給へ。一人の行者も云ふ處また斯の如し。菩薩是を見給ふに、實に眞假さらに分ちがたし。爰を以て且善財童子と木叉とに命じて二人を引分けさせ給ひ、密に諸天に曰ひけるは、吾今緊箍咒を唱へて頭の疼むを眞の行者とし、疼まざるを假とせん。衆位然るべしと答へ奉れば、菩薩頓て緊箍咒を唱へ給ふに、二人の行者一齊、頭疼し頭疼し、念ずる事勿れ念ずる事なかれと叫びける。菩薩口を止め給へば、二人の行者は又上首の如く一齊に成つて相戰ふ。菩薩今は詮方なく、二人に向ひて曰はく、倆往昔大いに天宮を騒したれば、天上に到りて事を分つべし。二人の悟空是を聞きて、まだ戰ひながら半空を走りて南天門に到る。爰にも又諸神達出て給ひ、二人同じ悟空が打扮を見て呆驗呆て丶立ち給ふ。行者曰く、此妖怪老孫が容に變じ、眞假更に分ちがたし、願はくは諸神是を分ち給へ。又一人の行者も同じ事を訴ふ。諸神も爲詮なく引列れて玉帝に見えしめ、備に是を奏問すれば、玉帝仔細聞しめし給ひ、托塔天王に命じ、照魔鏡を取り來りて渠們を照し本相を顯すべしと曰ふ。天王命に應じ照魔鏡を把り來り是を照し見給ふに、則ち悟空が姿二人一容に寫りて、衣帶鐵枠に至るまで分毫も違はず。玉帝又是を分つ事能はず、殿外に追ひ出し給ふ。二人の行者一齊いふやう、吾們今より師父三藏の許に行きて此虛實を分つべしと云ひつゝ、亦空中を戰ひながら三藏の居給ふ方へと走り行く。此時悟淨は三藏の許に回りて、花果山にての動靜を具に語り、師徒三人疑ひ怕れ居る處に、忽ち空中に吶喊響聲明えて二人の行者戰ひながら三藏の前に來る。三藏是を見て、八戒と悟淨に命じて、倆們兩人の行者を捉へて引分けよ、我緊箍咒を唱へて頭の疼むを眞の行者とし疼まざるを假として端的に是を分つべし。八戒、悟淨、尤もと同じ、二人の行者を捉へ、倆等爭ふ事を止めて師父の計ひを待ち給へ。三藏口の中に緊箍咒を唱へ給へば、二人の行者一齊に臥轉び、頭疼む頭疼む、念ずる事なかれ念ずることなかれ。三藏口を止め給へば、二人の行者が曰く、吾們又閻王の廳に到りて其發放を待つ

べきなりと、上首の如く鐵棍を把つて相戰ふよと見えたりしが、竟に姿を見失ふ。此時八戒、悟淨に向ひ、傭水簾洞に到りながら行囊を拿り來らざるは如何なる故ぞ。悟淨が曰く、吾も是を尋ねたれども唯一條の瀑布のみ在りて外には眼に遮る物もなし。八戒が曰く、汝知らずや、白瀑布の後に洞あり、其飛泉を潜りて洞に入るなり、原來我能く路開を知つたれば、今より行きて行囊を把り來らんとて、頓て、雲に打乘りて花果山さして急ぎけり。却說二人の行者は、戰ひながら終に陰山の後に到る。山中の鬼ども驚き怕れ、急ぎ十殿大王へ報ず。大王、地藏王菩薩に告げ、地藏王菩薩より森羅殿上に奏し送る。大王出で給へば、衆位の陰兵多く伺候して是を見るに、狂風滾々として、二人の行者戰ひながら森羅殿の許に到る。閻王進み出でゝ曰く、大聖何事ありて我が幽冥を騷すや。行者が曰く、此妖怪吾が姿に變じ假と眞を分ちがたし、此故に今閻王の査看を願ふ、疾く此妖怪が魂魄を奪ひ、二星混亂する事を脫れしめ給へ。一人の行者も又斯の如く告ぐ。閻王大いに驚き、頓て管簿判官を召して件一に點化あるに、假より行者が名字なし。抑地藏王の乘り給ふ獸は、些時の間に四大部洲の怪異を悟る物なれば、是に命じて二人の行者を覘はせ給ふ。此獸森羅殿上に匍匐して、姑く有りて頭を擧げ地藏王に向ひて告しけるは、妖怪が名悟れりと雖も、今眼前にては說ひがたし、倘是を除かんと欲せば、

暫ず如來に見えしめ給へ。地藏王是を悟り給ひ、行者に向ひて命せけるは、傭等兩人形一樣にして更に二個なし、倘是を分たんと欲せば雷音寺如來の前に到り、其黑白を明めよ。二人の行者是を聞きて一齊に吆喝きて、行くとも〳〵吾們趁早西天に到り如來に見え候はんと、又躍りあがつて戰ひながら走つて寬に西天に到る。此時如來衆位の御弟子を會め說法なし給ふ。如來の妙音腕長舌、列位耳を傾け心を淸し、孝恭しく聽聞す。既に御說法終る頃、天華繽紛として普く降り、音樂半空に響き渡る。如來大衆を顧みて曰はく、傭們總て一心且看よ、二心爭ひ來る。大衆眼を擧げて是を見るに、二人の行者天に叫び地に喚きて雷音寺に戰ひ來る。個々の金剛止むる事能はず、二人の行者俱に亂嚷きて壇下に到り、如來の御前に蹲踞き土首よりの事ども備細に訴へ奉り、願はくは佛祖憐憫を垂れ給ひて、我們が爲に邪正を辨じ給へ。如來二人の悟空が姿、音聲まで一容にして無二なるを御覽あり、疾く是を分曉り給ひ、其謂を說かんとし給ふ處に、忽ち觀音菩薩雲に乘りて來り、如來を拜し見え給ふ。如來曰はく、觀音尊者、傭看よ彼二人の行者は那個か是眞ならん。菩薩答へ給ひけるは、向日我が山中にも來り候へども、委く是を辨へがたく、是に依て如來に告げ奉らんとて參りぬ、茨叢渠を分たせ給へ。如來笑つて曰はく、傭法力廣大なりと雖も、たゞ周天の物を知つて周天の種類を知らず。菩薩

是を聞き給ひて、願はくは周天の種類を仔細示し給はんやと曰ふ。此時如來說いて曰はく、周天の種類を十類五仙といふ、所謂天、地、神、人、鬼五虫あり、五虫は便ち麟（うろこあるもの）毛（けあるもの）羽（はあるもの）昆（はだかむし）是なり、彼一人の妖怪の行者は、天、地、神、人、鬼にも非ず、亦五虫にも有らず、別種にして號けて四猴混世菩薩と云ふ、其四猴の第一を靈明石猴と云ふ、能く變化に通じ、天の時を知り地の理を察す、第二は是赤尻馬猴、これ陰陽を悟り人事を知り出入をよくなす、第三は是通臂猿猴、日月を把り千山を縮め休咎を辨ふ、第四は是六耳獼猴、よく音を聞き理を察し前後の事を知る、此四猴、十類に入らず、兩間の名を列れたり、吾今此假悟空を見るに、眞の悟空と形同く聲音も一容たるは、則ち是六耳獼猴ならんと曰ふ。悟空に化けたる彼獼猴は、如來の本相を說き出し給ふを聞きて大いに驚き、膽慄き急に逃げんとする處に、如來大衆に命じて捉へさせ給ふ。大衆一同に捉圍み給へば、彼獼猴忽ち變じて蜜蜂兒となり空中へ飛び昇るを、如來鉢盂を把つて投げ給へば、蜜蜂兒は此裡に獲れ地上に撥と落ちたりける。大衆獼猴を見失ひ、此彼處と尋れ、只管騷ぎければ、如來笑つて曰はく、妖怪那ぞ逃ぐる事を得んや、吾が鉢盂の裡にあり、看よ〳〵大衆と曰ひつゝ、鉢盂を把り除くれば、六耳獼猴は本相を顯し、再度逃げんとする處を、大聖

行者鐵棍を廻して竟に是を打ち殺しけり。此故に四猴の中今一種絕えしとかや。如來、行者に命せけるは、倆疾く行きて唐僧を助けて爰に來り、經を把つて正果を得べし。行者頭を叩いて曰く、我が師父今既に吾を追ひ放ち給ふ、願はくは如來緊箍兒を唱へて吾が緊箍を拔かしめ給へ、俗に戻りて眷屬們と俱に生を養ふべし。如來曰はく、倆怠慢の心を發すべからず、我今觀音に命じて倆を送り返さん、唐僧の承諾かざる事を怕るゝ事なかれと曰へば、行者合掌して恩を謝し奉る。觀音菩薩は如來の命を受けて、行者と俱に雲に乘り給ひ、三藏の舍り居らるゝ老婆が家にぞ到り給ふ。此時悟淨は、觀音菩薩の來給ふを見て、急ぎ師父に斯くと告ぐ。三藏驚き立出でゝ是を拜す。菩薩曰ひけるは、唐僧、向日倆を打ちたるは六耳獼猴なり、如來是を悟り給ひ、悟空に命じて殺させ給へり、今又悟空を送り歸し、倆を援けて西天に到り經を把らしめん事を示し給ふ、倆再度怒り恨むる事を止めて行者を伴ふべし。三藏頭を叩いて恩を謝し、情願んで尊命に遵ひ侍はんと答へ奉る。此時東の方より狂風滾々として、八戒行囊を把り歸り來り、雲を降り菩薩を見て拜をなし、某花果山に到りし處に、果して唐僧、八戒、悟淨を見る、是を件一に打ち殺し候へば、總て皆猴の妖精なり、然して行囊は把りきたり候、亦二個の行者は如何なり候や。菩薩則ち如來の假行者が本相を見顯し給ひ、行者に打ち殺させ給ひし

事を仔細に語り給ふ。八戒歡喜び師徒諸俱に只管謝し奉る。菩薩又雲に乘つて別を告げて歸り去り給へば、三藏師徒は天に向ひて禮拜し、老婆にも深く謝し禮を施し、此處を立出で只管に路を急ぎ西に向ひて進み給ふ。

五九　唐三藏路阻二火焰山一　孫行者一調二芭蕉扇一

斯くて三藏は復行者を得て心歡喜び、四人愈々西方へ進み、夏月の炎天を過ぎて又三秋の霜景に逢ふ。師徒路を急ぐ處に、忽ち熱氣人を蒸すが如し。三藏の曰く、時今秋の冷氣に向ひ、怎生ぞ斯樣に熱氣あるならん。此時路邊に一構の房舍あり。三藏馬より下りて門內に入れば、一人の老人出て來りて曰く、長老は那里より來り給ふや。三藏の曰く、貧道は東土大唐より西天に到り經を求むるの僧なり、一行四人此處まで來り候。老人聞きて、頓て三藏を家の裡に請じ入れ茶飯を侑めて款待しける。三藏問うて曰く、此處秋に逢うて那ぞ却つて炎熱の氣あるや。老人が曰く、此處火焰山と唱す山あり、眷となく秋となく、四季ともに皆暑し。三藏又問ふ、其火焰山は何方に有りや。老人が曰く、彼山は爰を去る事六十里にして、西天に到る大路なり、此山八百里が間四方盡般火焰にて、一寸も草生ずる

事なし、若此山を越えんとすれば、假令鐵の軀なりとも忽ち化盡て水となるべし。三藏、老人が詞を聞いて大いに心驚き色を失ひ坐し給ふ。行者、老人に對ひて曰く、倘此處に寸草も生ぜずといふ、怎に生して五穀を植ゑて一命を繫ぐや。老人が曰く、倘五穀を植ゑんと欲する時は、鐵扇仙人の寶貝芭蕉扇と云ふものを借り用ふ、彼芭蕉扇をもて一度煽げば火を鎭め、再度煽げば風を生じ、三度煽げば雨を降らす、我輩五穀を植ゑんとする時は渠が芭蕉扇を借ることなり、然れども酬謝を備へざる時は渠決して扇を貸さず、爰をもて每年美しき紙に書を認め、猪羊鵝酒を備へて仙山に到りて、拜して是を借り、然して五穀を植ゑろ、穀實りて後は又火を生じ、原のごとく火焰山となるなり。行者が曰く、其仙人の巢穴は何といふ處にて、此處より幾句の行程あるや。老人答へて、是より南に當りて翠雲山と號けし山あり、山中に芭蕉洞とよべる巖窟あり、彼仙人爰に住す、行程凡そ千五百里なり。行者笑を含んで曰く、氣得々々、我則ち其扇を借り來りて火を煽ぎ消して此山を越ゆべきなりと、忽ち雲に打乘つて南をさして出で去りけり。老人大いに驚き、此長老雲に跨り霧に登る、寔に是神人なりとて彌唐僧を恭敬ひける。斯くて行者は少時の間に翠雲山に到り、雲を下りて見るに、忽ち一人の樵夫に逢ふ。行者問うて曰く、此山翠雲山なりや。樵夫答へて曰く、則ち翠雲山にて候。行者又問ふ、鐵扇

仙人の芭蕉洞は何地に有りや。樵夫又答へて曰く、芭蕉洞はありと雖も鐵扇仙人といふものなし、但し鐵扇公主といふものあり、羅刹女とも名づく、則ち牛魔王が妻なり。行者是を聞いて大いに驚き、心裡に思ふやう、是亦我が敵なり、向年我羅刹女が養子紅孩兒を降伏したり、既に獨の日破兒洞にて渠が伯父に逢ひし時も、其恨を以て水を遮與じと爭ひたり、今又紅孩兒が母親に逢ひ彼寶貝を借らんといふとも怎生ぞ貸すべき道有らんや、今此期に臨んで不分利害、然りと雖も是を借らでは西方に行く事能はず、且試みに是を借らんと云ひて倘肯ぜざる時は亦別に思惟も有るべしと、頓て洞の前に到り、牛大哥門を排けと呼はりければ、裡より一人の女怪門を開きて、何者ぞと問ふ。行者曰く、我は東土大唐より西天に到り經を求むるの沙門孫悟空といふ者なり、當今火焰山を越えんとして、爰に來つて芭蕉扇を借らんと欲す、倆早く公主に告げよ。女怪是を聞いて裡に入り公主に報ず。羅刹女は孫悟空の三字を聞くより忽ち大に怒り、三口の寶劍を引提げて、孫悟空何に在りや、首を渡せと呼はつて洞門の外に出で來る。行者禮を施して曰く、嫂々、老孫爰に在りて禮を行ふに那ぞ敦圉き給ふや。羅刹女が曰く、倆吾をして嫂々とよぶ、怎的倆が嫂々ならんや。行者が曰く、尊府牛魔王と吾と往昔義を結んで兄弟と成り、公主は牛大哥の令正なれば怎麼ぞ嫂々と稱せざらん。羅刹女が曰く、倆潑猴、

夫等の親み有りながら猥に紅孩兒を害し、今又爰に來つて擅に扇を借らんと云ふ　吾怎生貸すべけんや。行者曰く、嫂々元來の仔細を知らず、誤つて吾を恨み給ふ事なかれ、令郎紅孩兒吾が師父を捉へて蒸し喰はんとす、饒倖に觀音菩薩、紅孩兒を弟子となし給ひ當今正果を得て善財童子となり、天地と壽を同うす、嫂々吾に謝禮をこそ云ひ給はめ、却つて吾を恨むるや。羅刹女が曰く、此潑猴舌に誇る事を止めて我が一劍を喫うて見よと、一道に伐つて蒐る。行者鐵棒を以て架止め、天晩に到るまで戰ひけるに、羅刹女些戰ひ勞れ、密に芭蕉扇を取り出し、行者に向ひ一度颯と煽ぎければ、忽ち大風吹き發つて行者が軀を空に吹きあげ影沈るゝ形もなし。羅刹女是に勝を得て洞中に歸り入る。行者は芭蕉扇に煽がれて空宙高く舞ひ昇り、飄々蕩々として風に落葉の負くるが如く流に花の散り浮くさまに漂ふ事一夜にして、漸々天曉近き頃ひ一座の山の巔に落着きたり。行者多時ありて心を定めて此山を見るに、是則ち須彌山なり。行者嘆息つき、偖も嚴しき芭蕉扇の奇特かな、此山より火焰山までは行程何許有るやらん、昔日我此處にて靈吉菩薩に求めて黄風怪を降伏せしが、且菩薩に對面して行程を問ふべしと、山を下りて禪院に到り、靈吉菩薩に見えて拜しければ、菩薩出迎へて禮を施し、大聖經を把るの功終りしや、恭喜々々と宣へば、行者頭を打振りて、未だ曾て功終らず。靈吉菩薩曰

はく、然らば何幹ありて我が山には來り給ふぞ。行者、火焰山に阻てられし事より、羅刹女が芭蕉扇に煽がれて計らず爰に來りし由を談りければ、菩薩笑つて宣はく、渠が芭蕉扇は崑崙山混沌開くる時天地と俱に生ぜし處の一種の寶貝にして、大陰の精葉なり、此故に能く火を亡す、倘人を煽ぐ時は一息に八萬四千里を漂はす、火焰山より爰までは只五萬餘里の行程なり、往昔如來吾に一粒の定風丹と一柄の飛龍杖を授け給ふ、飛龍杖は既に黄風怪を降伏せし時是を用ひて妙を顯したり、吾今彼定風丹を倆に授けん、是を帶ぶる時は、彼が扇に煽ぐとも一寸も動く事有るべからずとて、彼定風丹を授け給へば、行者大いに歡喜び拜謝して是を受け、糸針を借りて衣の襟に縫ひいれ、菩薩に別を告げ、觔斗雲に跨り、暫時の間に翠雲山に駈せ歸り、鐵棒を以て門を打破りければ、羅刹女駭き、此猴實に奇術あり、吾扇を以て人を煽ぐ時は、忽ち八萬四千里を漂はす、渠爲何して早く廻り來りしや、吾今兩三扇煽ぎなば再度歸り來る事有るべからずと、劍を扯提げ門外へ跳り出で、此潑猴又來つて死を求むるや。行者笑つて曰く、嫂々吝き事を止めて扇を吾に貸し給へ。羅刹女罵つて曰く、潑猴、倆わが子を陷し入れ、其讐をさへ未だ報いず、爲何ぞ今扇を貸さんや、疾く劍下の鬼となれよと兩刀を廻して切つて蒐る。行者鐵棒を振つて相迎へ、五七合戰ふ處に、羅刹女密に芭蕉扇を取出し、行者に向ひて

煽ぎけるに、行者身に定風丹を帶びたれば、端然として更に搖かず。又列れて煽ぎけれども、毫動く光景もなし。羅刹女慌得て扇を收め、洞の中に走り入りて門ハ嚴く關しけり。行者身を變じて蟭螟蟲となり、門の縫裏鏡より潛り入り、裡の容子を伺ひけるに、羅刹女小的を呼んで、吾今口乾きて堪へがたし、疾く茗湯を拿り來れと云ふ。小妖的急ぎ茗湯を汲み來る。行者是を覗き見るに、茗の泡多く有りけるにぞ、行者忽ち一箇の謀計を思ひつき、飛び來つて茗の泡の間に潛り入りしを羅刹女は是を知らず、兩三度に喫み乾しける。行者は既に羅刹女が腹の中に入りて、頓て聲を出して呼ばつて曰く嫂々吾に扇を借さんや。羅刹女大いに驚き、倆が處に在りて言をいふや。行者が曰く、我嫂々の腹の中に在り、吾今倆に辛き目を見すべきなりと、腹の中にて本相を顯し舞ひ跳りいるにぞ、羅刹女疼に堪へず、地の上に倒轉びて苦み、孫叔吉が一命を免せよ、命を助けよと叫びける。行者是を聞きて吾大哥の面に愛でゝ倆が一命を許すべし、疾く扇を吾に貸さんや、倘不肯と云はゞ此通りと、再度腹の中にて騰跳り騷ぎけるにぞ、羅刹女聲を發ちて苦み叫び、扇は速に貸すべきなり、倆跳る事を止めよ。行者是を聞きて跳を止りければ、羅刹女は急ぎ小的に命じて芭蕉扇を把り來らせ、孫叔吉扇を借すべし、疾く出でよと歎きける。行者咽の處まで出でゝ、口の中より、扇を持ち來るを見届け盛さ

て、傍口を開けと呼はりける。此聲を聞いて羅刹女口を張りひらく。行者、蟭蟟虫となり口より飛び出で、芭蕉扇の上に止り、忽ち本相を顯して扇を受取り、嫂々感激と云ひすてゝ、忽ち雲に打乘りて三藏の居給ふ方へぞ回りける。三藏は行者が扇を持ちて歸りしを見て大に歡び給へば、行者は始終の光景を仔細く談話りつゝ、頓て師徒四人此家の老人に別を告げて立出でゝ西に行く事四十里許、漸々に熱氣甚し。行者が曰く、師父且馬より下りて、我が此火を煽ぎ消し、風雨の發るを待つて、然して山を越え給へと、頓て彼扇を持つて火焔山に登り到り、力に任せて一度煽げば、山上火光烘々として盛になり、再度煽げば更に百倍となり、又煽げば火千丈許りになり、行者兩股の毛を焦し、慌忙てふためき三藏の方へ駈せ歸り、師父疾く逃げ給へ、火が燃え來り候と高聲に叫びければ、三藏驚き、急ぎ馬に打乘りて、師徒四人逃げ歸る事二十里許り、漸々にして些き山の蔭に憩みける。行者扇を投げ捨て三藏に向ひて云ひけるやう、不濟事々々、彼孽畜われを欺きて僞物を貸したるや、此扇をもて火を煽げば、煽ぐに列れていよ〳〵火盛になる、倘疾く逃げずんば總身殘らず燒き盛すべかりしをと、大息ついてぞ怒りける。

六〇　牛魔王罷レ戰赴二華筵一　孫行者二調二芭蕉扇一

此時一人の老人獨の小的に齋を齎せ來り、身を屈めて禮をなし、寡人は火焔山の土地神にて候、聊僧師徒に齋を献らんとて持ち來れり、願はくは是を受け給へ。行者、土地神に問うて曰く、此火焔山の火は那の時にか消ゆべきぞ。土地神が曰く、此火を滅さんとするには羅刹女が芭蕉扇に非ずんば協ひがたし。行者が曰く、我既に其芭蕉扇を借り來りて煽ぎたるに火勢增々盛なり。土地神笑つて曰く、此扇は眞の芭蕉扇にあらず。行者又曰く、奈何して眞の芭蕉扇を求めんや。土地神が曰く、眞の芭蕉扇を借らんと思はゞ、且牛魔王に求め給へ。行者が曰く、然らば此火焔山の火は牛魔王が放つ處なるや。土地神が曰く、僧て然にあらず、此火は孫大聖自ら放ち給ふ處なり。行者大いに怒つて曰く、倘漫言を吐くべからず、我何ぞ此火を放たんや。土地神が曰く、大聖未だ此火の謂を知り給はず、原此處に斯樣の山は無かりしなり、五百年前の年、大聖天宮を騷せし時、太上老君の八卦爐中にて燒き殺さんとし給ひし時、大聖丹爐を踏み破り火の中を逃げ出でたり、其時に丹爐落ち碎けて降り、此山となれり、此故に内に火氣を包み、終に一座の火焔山となる、吾則ち彼丹爐を司どる處の道人なりしが、

老君我が懈怠にて儞に丹爐を破らしたるを怒り給ひ、此處に追ひ下し火焔山の土地神となし給へり。行者が曰く、儞眞の芭蕉扇を牛魔王に借れよといふ、然れども牛魔王今翠雲山に在らず。土地神が曰く、牛魔王は羅刹女が夫なれども、今は彼處に在らず、今積雷山魔雲洞に一個の狐王あり、渠富貴にして百萬の家私あり、近き頃狐王死して跡を繼ぐべき子なし、獨の女兒ありて玉面公主と號く、家富みさかふと雖も是を炤管する人なく、牛魔王が神通廣大なるを聞いて玉面公主親自招いて夫となす、亦牛魔王も玉面公主の美色に愛でゝ、今は羅刹女を捨てゝ魔雲洞に居住す、然れば大聖彼處に到り、牛魔王に逢ひて眞の芭蕉扇を得給ひ、是を以て火を鎭め給はゞ、一つには師父を扶けて彼山を越え給はん、二つには永く火を除きて此處の饒倖なるべし、三つには吾又天に歸り老君の教を聞く事を得べし。行者が曰く、積雷山は何れの處にありや。土地神が曰く、是より南方に當り行程およそ三千里にして彼山に到るべし。行者聞いて八戒と悟淨を呼んで曰く、吾今より積雷山に到り扇を借り來るべし、儞們能く師父を護れ、且土地神を歸すべからずと云ひ捨て、雲に打のり南を指してぞ駈せ行きける。半時許りにして忽ち彼山に到りつき、雲より降りて松陰の細道を過ぎ行くに、一箇の石門有りて積雷山魔雲洞と云ふ六個の大字を鏘り付けたり。行者門外に在りて動靜を伺ふ處に、裡より一人の佳人出

で來るを見るに、實に是沈魚落雁の粧閉月羞花の容貌あり。忽ち行者を見て大いに驚き、急に逃げ入りて門を關し、奥に逃げ入りて牛魔王に向ひ、吾今日偶々門を出で花を捻まんと思ふ處に、一人の和尚門外に停立み我を伺ふ、其模樣面髭臉にして恰も雷公の如し、我既に驚死せんと致しゝなり。牛魔王是を聞いて、賢妻怕るゝ事なかれ、吾其禿子を見て來るべしと混鐵棍を扯提げて門外に走り出で、儞那厮なれば我が門外に來り、伺ひ覗きて无禮をなすや、趁く立去れと呼はりければ、行者進み寄りて禮を施し、長兄貧道を忘記れ給ふや。牛魔王行者を熟々と打視て、儞は聖天大聖孫悟空ならずや。行者聞いて、老孫則ち孫悟空なり、別れてより久しく音信も爲ざりし故、今日故意々々來りて訪れ候なり。牛魔王叱りて曰く、儞謊詰の不腆口をいふ事なかれ、向年我が紅孩兒を害し、今何の向顏ありて吾に見ゆるや。行者曰く、長兄誤つて吾を恨むる事なかれ、令郎神通廣大にして吾渠に近く事能はず、何ぞ渠を害せんや、唯其時令郎我が師父を捉へて其肉を蒸し喰はんとせし故に、觀音菩薩是を勸めて歸伏なさしめ、當今善財童子となりて菩薩の身邊に侍ふる事を得たり、然るに今何を以て吾を恨み給ふや。牛魔王が曰く、既に斯の如くならば儞が一命を免すべし、趁早に歸りされ。行者が曰く、吾が師父今火焔山にて火氣に蒸されて行く事能はず、長兄の芭蕉扇を借りて用ひん事を思ひ、嫂々の

許に到り懇に求めたれども、堅執にて貸し給はず、此故に長兄を拜して彼扇を借り用ひんと思ひ是まで參りたり、長兄慈悲を垂れ給ひ、嫂々の許に告げて芭蕉扇を貸し給へ、用ひ畢らば疾早に返し奉らん。牛魔王大いに怒り、偖は我が寶貝を借らんが爲に來りしよな、不容々々、且我が一棍を喫へよとて劈心に打つて蒐る。行者も鐵棒を振かざして七八十合戰ひける。此時山の上に人聲有りて、牛爺々吾が大王筵宴を設けて貴王を待ち給ふ事久し、疾早に來り給へ。牛魔王是を聞いて行者に向ひ、吾今朋友の方へ筵席に呼ばれ行かんとす、此故に倆を助くるぞと云ひ捨てゝ走り行き、門に入りて堅く關し、玉面公主に謂つて曰く、今來りし髭臉和尚は孫悟空といふ者なり、吾遠く追ひ退けたれば今は來るべからず、我今朋友の許へ筵席に呼ばれ行くなり、倆寂しくとも酒を喫んで心を慰め、我が歸るを待ち給へと云ひ置きて、璧水金睛獸に打乘りて雲霧を發して出で去りけり。行者は山頭に躍れ居て、牛魔王が西北を指して出で行くを見て、彼が行向を伺ひ見んと思ひ、一陣の風と化して牛魔王が迹を慕ひ追ひ行く處に、乍ち一座の高山に到る。爰にて牛魔王を失視ひけるにぞ、行者本相を顯し路を求めて尋ね行けば、山中に一箇の深淵あり。一邊に大いなる石碣を建て亂石山碧波潭と云ふ六個の大字を彫り付けたり。行者心に思ふやう、牛魔王必定此水中に行きたりと覺ゆ、渠が友とする者管ず蛟龍

龍鼉の類ならん、怎生ぞして我水中に潛り行きて、尋れ見ばやと思惟して、寛に一個の蟹と變じ、水底に潛り入りて見れば、忽ち一箇の宮殿あり。廊下に璧水金睛獸を繫ぎおき、牛魔王は殿の正中に坐し、老龍王と對坐ひ、若干の水怪蛟龍ども皆輪座に列居びて觴の指控してぞ在りにける。行者忽ち一箇の謀計を思ひ付き、身を變じて牛魔王となり、廊下の金睛獸を解き放ち、是に打乘りて原の淵に走り出で、頓ち翠雲山に駈せ行き芭蕉洞に到りければ、羅刹女が小妖的ども是を見付け、急に奥に走り入りて、爺々尊還と呼はりければ、羅刹女撞び出で對ふ。行者金睛獸を下りて一邊に拴在ぎ、裡に入りて坐す。羅刹女は眞の牛魔王と思ひ、恨み泣いて曰く、大王何とて新なる妻を寵愛し、斯く吾を捨て給ふや、今日又怎麼なる風吹いてか此處へは回!給ひしや。行者笑つて曰く、倆を捨つるには有らざれども、彼玉面公主吾を迎へて後、種々の幹菆繁く鬧しさの餘りに久しく彼處に止まりたり、近頃彼孫行者といふ者、火焔山を越えんと欲して吾が寶貝芭蕉扇を求むると聞く、倘來りなば道斯を提へ徵塵になし、我が兒の讐を報いんと思ひ、此故に歸り來れり。羅刹女が曰く、大王いまだ知り給はずや、吾既に彼猿めに命を失はんとせしなり。行者故意と驚きたる氣色にて、彼潑猴いつの程にか此處に來りつるぞ。羅刹女昨日戰ひし趣、また我が腹の中に入りて惱し、扇を貸したる事ども仔細と語り

ければ、行者の牛魔王眴を叩いて嘆息し、傭誤つて吾が寶貝を渠に貸したり、爲何して把返すべき。羅刹女聞いて、管ず痛心し給ふな、我渠に貸したるは僞物の扇なり。行者聞いて、然らば眞の扇は那處に置きたるや。羅刹女が曰く、扇は深く藏め置きたれば更に罣慮有るべからず、且悠々と坐して酒なりと喫み給へと、夫より小的に分付けて宴を開き、酒肴を多く拿り出させ、羅刹女が曰く、大王新なる色に心を移し、我が結髮の情を忘れ給ふ事なかれ。行者杯を把つてわれ久しく外に在りて傭に家中の幹を治めさせ、多く焦慮を致させたり、且傭に一觴を侑めんとて酒を汲んで與へければ、羅刹女歡喜んで是を喫し、又行者に侑めしかば、行者も數杯を傾けて指しつ押へつ汲交し、興酣闌に及びけるに、羅刹女は既に春情十分に發り、只管淫戯れかゝるを見て行者が曰く、傭寶貝を何處に藏め置きたるや、彼悟空は神通廣大なる故、渠倘形を變じ來り奪ひ去る事も有らんかと吾甚だ安堵かず。羅刹女打笑ひ、頓て口の中より扇を吐き出しけるに、其大いさ杏葉の若し。行者手に拿りて打視り、斯の如く小なる扇、爲何ぞよく八百里の火を消さんや。羅刹女驚いて言しけるは、大王此程玉面公主に魂を奪はれ、吾家の寶貝の妙ある事を忘れ給ふ、倘是を大きくせんと思ふ時は、左の手の大指にて扇の柄を堅く押へ、呵嘘呵吸噓吹呼と唱ふる時は其丈一丈にも二丈にもなる、那ぞ八百里の火を怕れんや。

行者聞いて大いに懽喜び、忽ち扇を口に含み、感激と云ひ捨てゝ本相を顯し門外へとび出てければ、羅刹女は是行者なる事を知つて大いに怒り、多時言をも發ふ事能はず、彼方を睜んで嘆息す。行者は頓て山上に登り、口より扇を把出し、羅刹女が教へし如く、呵嘘呵吸噓吹呼と唱へければ、果然此扇二丈許の大いさとなりにけり。行者心中大いに懽び勇みける。然りといへども是を原の如く縮むるの法を知らざれば、詮方なくて其儘にて肩に扯擔ぎ、三藏の居給ふ方へぞ急ぎける。

六一　猪八戒助レ力敗二魔王一　孫行者三調二芭蕉扇一

却説牛魔王は碧波潭に在りて龍王と筵宴をなし、宴席終に果てければ、暇を告げて歸らんとす。龍王則ち送りて出づ。牛魔王嚮に廊下に拴ぎ置きし金睛獸在らざりければ、爰彼處と尋れ搜す。龍王是を見て、牛爺の金睛獸何處へか失せたり、誰も知らずや、嚴く查看せよと呼はりける。衆位の水怪跪踞いて、我們尊宴の初めより場處に有りて酒肴を献じ、或は樂を奏す、此故に一人も外に出ず、原來別人の來りしをも見ず、唯一隻の怪氣なる蟹の來りしが、更に見知らぬ厮なり、彼蟹何時の間にか失せけん、金睛獸も其頃より見え候はず。牛魔王是を聞きて忽ち分り、偖は彼孫悟空蟹と變じて此處に

來り、吾が金睛獸を盜み、又吾が形に變じて此獸に打乘り翠雲山に到り、羅刹女を欺きて芭蕉扇を奪はんとするの計略に疑なしと思ひければ、頓て老龍王にも莊增此事を物語り、別を告げて碧波潭を走り出で、雲を發して飛ぶがごとくに翠雲山に走り行き、芭蕉洞に到りければ、羅刹女は臥轉び胸を打つてぞ叫び居る。又一邊に金睛獸の繫ぎ在るを見て、牛魔王高壁に呼はつて、夫人悟空は來らざりしやと問ふ。羅刹女は牛魔王と見るよりも走りよりて摑みつき、我が爺の罰あたり、怎麼恩を忘れ金睛獸を猴めに奪はれ、渠倆が容と變じ爰に來りて寶貝を尋ぬ、我那ぞ渠が變化なる事を知らんや、定に倆の來れるぞと思ひ、寶貝を出したれば、那厮奪ひ取つて逃げ失せたり、實に吾悔くて死なんとす。牛魔王が曰く、倆且過くことなかれ、我彼猴めを追かけて忽ちに打殺し、皮を剝ぎ骨を割みて倆が爲に斷念すべしと、羅刹女が帶びたりし寶劍を把つて走り出で、火焰山の方へ追ひ行きける。不多時行者に追ひ付きけるが、行者は更に是を知らず、芭蕉扇を肩にかけて、怡顏悅色にて三藏の据給ふ方へ急ぎ行く。牛魔王是を見て、今渠と戰ひたりともなか〳〵容易くは返すべからず、倘却つて那厮我を煽ぐことあらば、八萬四千里を吹き飛ばされて愈々難儀に及ぶべし、今先謀計を以て取返さん、唐僧の徒弟に八戒といふ者あり、是猪の妖精にて、昔日我出會ひてよく知れり、今渠が容と變じ此驢

を欺くべしと、忽ち身を變じて八戒が模樣となり、前へ回りて行者に向ひ聲をかけて、師兄奈何して遲かりしぞ、師父倆が歸りの久しき故に、怕らくは妖怪が手列大きにして寶貝を奪ひ難く、倘難儀に や及ぶらん、倆行きて力を助けよと宣ひて、故意々々吾を遣はし給ふ。行者笑つて曰く、管ず費心ふことなかれ、我已に扇を奪ひ來れり。牛魔王わざと嬉しき風情にて、師兄怎麼して容易く奪ひ給ひしぞ。行者原よりの容子を件一に語りければ、牛魔王が曰く、然らば師兄さぞかし勞れ給ひたらん、我今師兄に代りて扇を擔ひ候はん。行者怎生ぞ假物なる事を知らんや、頓て扇を八戒に付與しければ、牛魔王何かは知らず口に呪文を唱へけるに、彼芭蕉扇にはかに縮み、杏葉のごとくなりにけり。此時牛魔王本相を現し、潑猿我を認得りたるや。行者驚きて是を見るに、是則ち牛魔王なりければ、亂跳踏んで大いに怒り、雷の若くに操爆吼え、鐵棒を揚げて打つてかゝる。牛魔王敢て戰を交へず、芭蕉扇を出して行者を煽ぐ。行者倆より身に定風丹を帶びたれば、一すも搖かず、仁王立に成つて渠が煽ぐに任せけり。牛魔王も又驚き慌了まどひ、寶貝を口に入れて呑み、二個の寶劍を回して行者に伐つてかゝる。行者も鐵棒を閃して相戰ひ、互に半空中に在りて精心を抖擻し惡戰する事三百餘合、更に卻く心もなく、命を限と鬪ひけり。却て既く、三藏は路の一邊に坐し給ひ火氣に蒸されて口渴き、心

焦らて忍びがたく、土地神に對ひ、我尊神に問ふ、彼牛魔王が法力と行者とは何れか勝らん。土地神の曰く、彼牛魔王、神通廣大にして法力無邊、正に是孫大聖とは平手的の敵手ならん。三藏聞きて、行者は道を行く事になれて、三千里を往來する事暫時の間に有りと雖も、今日行きて一日に及び未だ歸らず、必定牛魔王と戰ひ勝つ事を得ざると覺えたり、八戒偏行きて師兄を迎へ、倘敵と戰ひ在らば力を扶けて扇を把り來れ。八戒領掌つて、貧道行く事安しと雖も、此處の行路を知らず、願はくは土地神と俱に行くべし、捲簾將軍は師父の身邊に在りて是を守護し給へ、吾は今土地神を路開として大聖を尋ぬべし。三藏大に喜んで是に隨ひ給ふ。土地神は八戒を伴ひ、南をさして急ぎ行く。斯かる處に忽ち空中に喚き叫ぶこゑ聞えければ、八戒驚き、雲頭に立つて是を見れば、行者と牛魔王と爰に在りて攻戰ひ、雲霧を發し、風を出し、火焔を散らし秘術を盡して爭ひたり。八戒高く叫び、師兄我來つて戰を援くるなりと呼はりければ、行者、八戒を見て戰ひながらに嘲はつて曰く、吾一旦彼扇を奪ひ奪りしを、此妖精八戒に化け來つて把返したりと語りければ、八戒聞いて大いに怒り、此潑牛、怎麼ぞ我が模樣に變じ師兄を欺きたるぞとて、釘鈀を把つて飛かゝり、沒頭沒臉的に亂れ突く。牛魔王は行者と戰ふ事既に一日、力勞れ弱りたる處に、今又八戒が釘鈀の兇猛を見て竟に敗陣して積雷山處

雲洞にぞ逃げ歸る。行者八戒跡に續きて追蒐け來り、洞の口にて追ひ迫る。牛魔王取つて返し、二人を相手にわたり合ひ、又散々に戰ひけり。玉面公主此物音に驚きて、許多の小的に命じて戰を援けしむ。小妖的ども命を受けて個々鎗刀を同して打つて懸る。牛魔王大いに喜び、聲を發つて指揮すれば、一同に把圍み、餘さじとこそ責めたりけれ。行者は手足闊く、竟に戰ひ普からず、八戒も釘鈀を奪ずり、圍を破りて逃げ出でければ、行者も觔斗雲に打乘つて空中に逃げ昇り、土地神等と一處に集まり、怎麼はせんと商量す。土地神が曰く、大聖、天逢、怠慢する事勿れ、師父途に在りて待ち煩れ給ふ、個々再度洞門を破り他と戰ひを交へ給へ、我又引領れし處の陰兵を以て力を援け候はん。行者、八戒、尤もなりと云ひて陰兵と一齊に再度洞の門前に到り、行者鐵棒を揚げて門を微塵に打碎く。牛魔王は玉面公主に始終の光景を戲話り、少時足を休むる處に、忽ち行者門を破りたりと告げ來る。牛魔王驚き、又混鐵棍を把つて走り出で、行者、八戒を相敵になして相戰ふ事百餘合、竟に力盡き敗北し洞の中へ逃げ入らんとするを、土地神陰兵を率ゐて洞の口を遮り止め、打入れじと防ぎければ、牛魔王又翠雲山へと逃げ行くを、行者、八戒、寸間もなく追迫くれば、牛魔王身を遁れがたく、忽ち一隻の天鷲となり、虛空を差して飛び昇る。八戒、土地神等是を知らず、專ら彼是と尋ね廻る。行者笑つて曰

く、儞們空中を飛ぶ者を見よ。八戒是を見て曰く、是一隻の天鷲なり。行者曰く、彼天鷲則ち牛魔王が變ぜしなり、我追蒐けて捉ふべし、儞們洞の裡に入りて小妖的を伐り盡せ。八戒、土地神是を聞きて急ぎ洞中に伐つて入る。行者は忽ち身を變じて一隻の海東青となり、空中遙に飛び昇り、雲眼より逆様に落し來り天鷲を捉へんと劈ひければ、牛魔王、行者が變じたるを悟り、大鷹となりて飛び秋り海東青を捉へんとす。行者是を見て又鳳凰と變じて大鷹を捉まんとす。鳳凰は禽中の王たる者ゆゑ牛魔王再度變ずる事能はず、頓て山の岸に飛下り、一疋の香獐と變じて悠然として草を喰ひ居たり。行者是を悟り、虎に變じ馳せ來り香獐を喰はんとす。牛魔王猥狽へ騒ぎ、急に大豹と化して虎を討たんと飛かゝる。行者是を見て又狻猊となり、大豹を目がけて駈せ來る。牛魔王かなはじと思ひ、忽ち黄獅と變じ、勃誇聲は霹靂の如くにして狻猊を引裂き喰はんとす。此時行者地上に倒轉ぶと見えしが竟に一疋の大象となる。鼻は長蛇のごとく牙は笋に似たり。牛魔王堪へかねて吃々と喰出し、終に本相を顕し、忽ち一疋の大白牛となり、頭は高き峰の如く、眼の光は雷光の如く、兩隻の角は兩座の鐵塔の如く、牙は排利刄に似たり、頭より尾に至りて長き事千餘丈、蹄より背上に至り高き事八百丈。高聲に呼はつて曰く、儞潑猿今我を怎麼とするや。行者是を見て同じく本相を顕し、大喝一聲するよと

見えしが、身の高さ一萬丈、頭は泰山に似て眼は日月の如く、口は恰も血池に等く、牙は門の扉のごとし。鐵棒を執つて牛魔王を打つ。牛魔王角を以て是を架止め、兩個牛山の裡に在りて散々に戰ひければ、寔に山も崩れ海も迸返り、天地も是が爲に反覆するかと驚し。此物音に驚き、常に空中に在りて唐僧を守護する處の諸神、金剛揭諦、六甲六丁、一十八位の護法伽藍來りて牛魔王を取圍む。牛魔王不當とや思ひけん、再度眞の本相を顕し翠雲山に逃げ歸り、芭蕉洞に入り、門を堅く閉し敢て出づる事なし。此時列位の天神、行者と俱に追ひ來り、翠雲山を取圍み、洞の中に攻め入らんと爲る處に、乍ち又一群來る者あり。是八戒と土地神們陰兵を扯領れ此處に押寄せ來る。行者曰く、魔雲洞の光景怎麼なるや。八戒答へて曰く、吾彼小妖的を伐り盡し、玉面公主を殺し見れば面白き狐なり、火を放つて洞中を鼎般燒き捨てたり、此處にも又牛魔王が巣穴ありと聞きつるゆゑ、是をも尚打破り捨てんと思ひ、土地神と諸俱に故意々々爰まで來りしなり。行者曰く、此處羅刹女が巣穴にして芭蕉洞と云ふなり、牛魔王今此裡に逃げ入つたり、吾們早く伐り入らんと云へば、八戒も、心得たりと、兩個一齊に鐵棒、釘鈀を扯展べて洞門を打ち破る。牛魔王は羅刹女に逐うて行者と戰の光景を說話り居る處に、行者、八戒、亦門を打ち破りしと聞いて大いに怒り、寶貝を口より出し羅刹女に付與し、二口の

劍を扯提げ門外に跳り出で、再度行者と八戒を相敵に做し、五十餘合ぞ戰ひける。列位の神兵們、牛魔王を取圍み漸々に攻め寄する。牛魔王、四面八方總て敵にして、逃るべき道なきを怕れ、雲に乘つて天に昇る。爰に又托塔天王、哪吒太子、照魔鏡を把つて空中に立ち、牛魔王靜に來れ、我們如來の佛勅を受けて爰に來つて儞を待つ事久し。牛魔王照魔鏡に照されて、又忽ち大白牛と成りて角を將て尖的かゝる。李天王劍を振つて少時戰ひ居給ふ處に、行者、八戒、雲を分けて趕上け到る。哪吒太子二個に向ひ、吾們來つて大聖等を援けて牛魔王を退治す、當今其功を見すべしと云ふより疾く、彼白牛の背に閃と飛乘り、火輪兒を把つて牛魔王が角の上に打蒐け、口より眞火を噴き下け給へば、忽ち火焰烘々と燃昇り、牛魔王が身を燒きければ、牛魔王苦困み叫び、頭を振り尾を搖し、又變化して身を逃れんと狂ひけれども、李天王の照魔鏡に照されて再度變ずる事能はず。今は近るゝ計策盡きて、天王我が一命を助け給へ、我佛道に歸依すべしと叫びければ、哪吒太子宣はく、儞命惜くば快く芭蕉扇を遞與すべし。牛魔王が曰く、芭蕉扇は我が渾家羅刹女に預け置きたり。哪吒太子是を聞いて、急ぎ縛妖索を以て牛魔王が鼻穴へ串住し、悟空們と諸俱に翠雲山に到り芭蕉洞に押寄する。牛魔王聲を發げて、夫人早く扇を持ち來りて我が命を助けよと呼はりければ、羅刹女は驚き、急に扇を把つて門

外へ走り出で、頭を地に當て拜伏し、天神吾們夫婦が罪を恐免し給へ、當今扇を孫叔に借して其功を助くべしとて芭蕉扇を差出しければ、行者懽惜び受收りて、列位の神兵佛兵と諸俱に三藏の居給ふ處へ急ぎ行く。却說三藏と悟淨は、行者が音信を待ち居る處に、看る〳〵祥雲虛空に滿ち渡り、瑞光忽ち滿地を照す。三藏是を見て怕れ戰ひ、悟淨儞彼を見よ、那里より許多の神兵來れるなり。悟淨是を能く認得りて、師父怕れ給ふ事なかれ、是は如來の勅によりて常に師父を守護し給ふ處の四大金剛、金頭揭諦、六甲六丁の護法伽藍、牛を率きたるは哪吒太子、鏡を把りしは托塔李天王にて、大師兄は扇を持ち、二師兄は土地神の後に遶ひ、其餘は總て護衛の神兵なり。三藏聞きも敢ず、毘盧帽子を項き金襴の袈裟を帶け地上に拜す。此時諸神降り、四大金剛、三藏に向ひ宣はく、我們佛勅を受け來り汝が難を救ふなり、儞力を盡して大願を成就せよ、管ず忌慢る事なかれ。三藏頭を地に著けて、弟子何の德か有つて尊聖の降臨を惠み給はる事太も畏く侍ひぬと幾度か拜謝し給ふ。斯くて行者は芭蕉扇を把つて火焰山に近着き、力を極めて一度煽げば平々として火焰やみ、再度煽げば蕭々として清風を發す。三度煽げば黑雲四方に起り、霏々として細雨を降らす。三藏炎熱の氣を忘れ、頓ち心清々たり。此時四大金剛、托塔天王父子、其外諸位の神兵、三藏に別れ、牛魔王を率立てゝ天上に還り給ふ。土

地神は羅刹女を引居ゑて一邊に伺候すれば、羅刹女拜伏して曰く、大聖功終りての上は、扇を我に給はりて、身を治め性を養はせ給へ。行者が曰く、我聞く、此山火治まると雖も、五穀植うる後亦火焔發るとかや、今怎麼せば火の根を除き、此處の生靈をして安く性命を養はしめんや。羅刹女が曰く、火根を除かんと欲せば列ぼて四十九扇煽ぐ時は、永世火發る事有るべからず。是を聞いて行者扇を把つて列れて煽ぐこと四十九扇、年ち淙々として大雨降り、終に火根消滅して永く火焔發ることなく、地方の生靈安穩なる事を得たり。行者扇を羅刹女に返せば、羅刹女は拜謝して洞に歸り、靜に身を修行して、後竟に正果を得しとかや。斯くて行者が黨們三個は、三藏を馬に乘せ進らせ、土地神に謝を施し別を告げ、身體涼々として足下滋潤たりければ、些少の煩もなく、終に八百里の火焔山を越え、尙西方に向ひて急ぎける。

六二

滌垢洗心唯掃塔　縛魔歸正乃修身

さる程に三藏師徒は火焔山を越えて猶西方に急ぎ給へば、早秋も暮れ冬の首に推移り、忽ち一座の城地有る處に到る。三藏の曰く、是管ず一國の王城ならん、吾們城に入りて關文を換ふべしとて、再

を前めて行き給ふ。六街三市寶を列れ財を積み、人は衣冠を正うして光景甚だ爽なり。爰に十餘人の和尙有りて、家々の門に立ち、經を讀み齋を乞ふ。三藏此和尙們を見るに、怪しむべし總て皆首枷、手鎖を入れたり。三藏嘆息して曰く、兎死する時は狐悲むと云へり、獸すら尙其類を思ふ、我も同じ沙門の身にて、怎生ぞ彼を見て悲まざらんやと、行者に命じて其謂を問はしめ給ふ。悟空彼和尙們に向ひ、儞們何方の沙門にて、又何等の罪有つて斯のごとく首枷を蒙りたるや。彼和尙們跪下いて曰く、此處に金光寺と號す寺あり、吾們は其寺に居住する處の沙門にて候が、今屈寃の難に遇ひて斯のごとく苦み候ふ。行者又其仔細を訊ぬれば、和尙們が曰く、此處は談話すべき處にあらず、列位吾が荒山に來り給へ、一個には一夜の御宿をも勤むべし、二個には我們が困苦をも談話り侍はん。三藏師徒是に遵ひ、和尙們と打連れて山門に到り給へば、門に一扁の額あり。勅建護國金光寺と云へる七個の金字を鏤り付けたり。三藏門を入りて正殿に到り佛を拜し、方丈に入り給へば、柱の下に六七個の和尙を縛めて、首枷、手鎖を入れ置きたり。三藏深く疑ひ怪み、且悲みに堪へず、嘆息して居給ふ處に、衆部の沙門、三藏の前に拜伏して曰く、尊師徒に問ひ奉る事あり、列位の尊相貌此國の人に非ず、倘や東土大唐より來らせ給ふ聖僧には御座ずや。三藏の曰く、儞は儞等德廣大にして先知の法あり、能

く吾們が本國を悟り知りたるや。衆僧の曰く、我們先知の法なしと雖も、屈寃の理を受けてより以來、是を清むべきの方便なく、只管天地に歎き訴へ祈りしに、昨夜不思議の夢を見たり、那里よりとも知らず聲有りて、東土大唐の聖僧を頼まば爾等が屈寃を分明め得て、性命恙なかるべしと告ぐる者あり、今朝夢覺めて個々此事を語り合ひ樂く思ひ、何日か唐朝の聖僧に逢ひ參らする事有らんと、益々心に祈る時節、今老師父來りて吾們が身を仔細に問ひ給ふ、昨夜の夢と符合せり、此故に唐朝の聖僧と悟り候なり。三藏曰く、則ち我們東土大唐より西天に到り、佛を拜し經を求むる玄奘三藏と云ふ沙門なり、抑々此國は怎麼なる處にして、爾們何の故に屈寃を蒙りたるや、仔細に說話りさふらへ。衆部の僧拜伏して告しけるは、此國は祭賽國と號して西天へ行く大路なり、我が金光寺は原來一箇の金塔あり、國王の先祖一個の寶貝の佛舍利を塔の頂に納め給ふ、此故に金塔の頂上より祥雲常に靄靄き、瑞靄高く昇る、夜は金光を放ちて十方を照らし、壁は彩霞を噴いて遠近是を仰がざるなし、于玆於て四方の諸國より此國を天府神京と唱へて、個々貢物を捧げ臣と稱し來り伏す、其故に繁昌年々に增り行く處に、思はざりき三年以前八月朔日の夜、天より血を降らし、彼黃金寶塔を汚し、夫より後會て祥雲瑞靄發る事なく、外國是を見て國政衰へたりと云ひて朝貢を捧げず、來朝する者もなし、列位の大

臣是を見て、此寺の沙門塔中の寶貝を盜み外國へ賣り渡したる故、斯の若く祥雲發ちざるなりと奏問す、國王は昏君にして更に理非をも辨へ給はず、忽ち吾們を召捉り給ひ、百般と拷問し、或は鞭打ち攻呵責み、寶貝の有る處を訊れ給ふと雖も、我們更に知らぬ事なれば自首すべき謂なし、故に帝王怒り給ひ、斯のごとく首枷を入れられ手鎖を蒙りて苦しむ事三年に及び、死する者過半なり、萬望くは聖僧願く慈悲を述べ法力を施して、我們が性命を救ひ給へ。三藏聞いて、然樣の暗の如くなる事は、吾も又怎麼とも做し難し、然りと雖も我長安を出でし時一箇の誓を起し、寺に遇はゞ佛を拜し、塔に遇はゞ是を掃はんと言ひたり、今日此處に到り屈寃の僧に逢ふ、原是寶塔より發りたる事なれば、我今沐浴して新なる箒を求め、塔に登りて是を掃ひ、倘方便的になる事あらば、國王に奏して爾們が屈寃を明め、關文を換へて西天に赴くべし。衆部の僧大いに喜恰び拜伏して、夫より茶飯などを獻らせて三藏師徒を欵待しけり。既に天晚に及びければ、三藏急に沐浴して、新なる箒を把り、短き衣を着て準備あれば、行者、師父を扯止め、彼の塔上血を降らして汚せりと聞く、何ぞ怪氣なからんや、老孫、師父と俱に行かば怎麼。三藏大いに喜び、行者と打連れて塔を開き、箒を把つて一層々々に是を掃ひ、第七層に到る時、既に二更の頃に及び、三藏身體大いに勞れ、行者に向ひて問ひけるは、此寶

塔高さ何程あるや。行者が曰く、十三層の高さあり。三藏の曰く、長安を出でしより以來未だ斯かる數層の寶塔を見ず、我今身心勞れぬと雖も、勤めて是を攀ぢ竟り本願を果すべしと、又三層を攀ぢ給ひ、終に十層に到りて伏倒れ、腰痿え股痺れ進退極まりて動く事能はず。悟空を呼んで曰く、只今より我に代りて殘る三層を掃ふべし。行者命を受けて箒を請取り、暫時に二層を掃ひ終り、第十三層に到れば、爰に何個か在りて談話の聲す。行者怪しく思ひ、斯る塔の頂上に人の登るべき謂なし、必定妖怪の所爲ならんと、終に箒を捨て、塔の窓より潛り出て、雲を踏んで伺ひ見るに、第十三層の塔中に二個の妖怪對坐ひて、拳を打ち酒を喫み居たり。行者鐵棒を把つて塔門を進り、大いに叱つて曰く、儞奈何なる妖怪なれば塔中の寶貝を奪ひたるや。彼妖怪是を聞いて慌忙て驚き駈け出でんとする處を行者塔門に立つて敢て逃さず、飛入りて捉へんとすれば、妖怪は塔の壁に扯着いて動き得ず、只管叫んで曰く、吾が命を助け給へ、我們が知りたる事には非ずと云ふ。行者件一件攫み、第十層まで扯下し、三藏の前に引居ゑ、師父彼寶貝を偸みたる妖怪を捉へたりと呼はりければ、三藏此時坐睡して居給ひしが、此聲に眼を開きて曰く、儞何處より捉へきたりしぞ。行者曰く、我師父に代りて塔を攀ぢ、十三層に到る處に、此妖怪拳を打ち酒を飲ひ居たりし故、則ち捉へ來りしなり。三藏喜んで妖怪に向

ひ、儞は那里より來りし妖怪にて、寶貝を盜み何處へ隱し置きたるぞ、具に自首いたすべし。妖怪ども戰々兢々、我們は亂石山碧波潭の萬聖龍王が遣はす處の塔を護るの官人なり、一個は奔波兒霸と云ひて鮎魚の妖精なり、一個は霸波兒奔と號けて黑魚精なり、我が萬聖龍王御の娘を持ち、名を萬聖公主と云ふ、頗る花月の容貌あり、向年九頭駙馬を聘となす、龍王喜びに堪へず、彼の夫婦を慰めんと世に稀なる寶貝を需むる處に、此金光寺の佛舍利の事を聞き出だし、三年前の秋の頃爰に來り、塔の上に血を降らし金塔を汚し、終に佛舍利を奪ひ取り、又大羅天上に到り靈虛殿に忍び入り、王母娘々の九葉の靈芝草を盜み公主に與へ、宮中に深く隱し置きぬ、此故に二品の寶貝は金光彩霞を放ち、實に妙なる光景なり、然るに近頃三藏といふ者ありて、西天に到り經を取らんとす、渠が徒弟に悟空といふ者あり、專ら人の惡事を糺し、正を扶け邪を罰ずと聞く、渠倘爰に來り寶貝を穿索する事も有らんか、倘然る事有らば趂早に告げ知らせよとて、吾們兩個を遣はし給ひしなり。行者打笑ひ、彼輩者歩向日牛魔王を呼んで筵宴をなしつるが、遺厮も又箇樣の惡事をなすや、我件一件に詮議をすべし。此時八戒、二三人の和尚に燈燭を照らさせ塔上に登り來り、師父塔を攀ぢ畢らば疾く降り安歇み給へ、爰に在りて何を說話し給ふや。行者聞きて、能き處へ到りたり、彼寶貝を盜みたるは萬聖龍王なるよ

し、當今此妖怪が自首に及びたりと首尾を說りければ、八戒聞いて、妖怪を捉へたらば那ぞ早く殺さざるや。行者曰く、少時渠們を生かしおき、國王の前に引出し其照驗と做して後、渠們を路開として偸個を捉へ寶貝を把返さん。八戒、尤もなりとて行者と俱に個々妖怪を搔掴み、和尙們を連れて三藏を助け、塔を下りて寺中に歸れば、衆部の僧出迎へて此事を聞きて大いに喜び勇みける。行者、餓索を以て彼妖怪を縛め、琵琶骨を穿つて再び變化する事を免さず、衆部の沙門に命じて護らしむ。沙門等妖怪を一室の裡に推籠め嚴しく保守りて夜明に及ぶ。斯くて三藏は行者を伴ひ金光寺を立出でゝ王城に到り、黃門官に見え禮を正しうして曰く、我們は東土大唐より西天に到り經を求むるの僧なるが、今日大國に來り、國君に見えて關文を換へん事を願ひ侍ふ、大人宜く是を傳奏し給へ。黃門官斯くと國王に奏聞す。國王是を聞いて三藏師徒を召入れ給へば、三藏は行者と俱に階前に到り、山呼の禮終りければ、國王、三藏を殿上に召して座を給ふ。三藏は關文を捧げゝれば、國王是を採つて讀み終り、三藏を顧みて曰く、倆が大唐王、よく高僧を選み路の遙なるをも厭はず、佛を拜し經を求めしむ、我が國の沙門は專ら盜道をなし、國を傾け君を廢す。三藏其故を問へば、國王の曰く、金光寺の僧金塔の寶貝を偸得しより以來、諸國更に來朝せず、吾深く之を恨とす。三藏是を聞いて曰く、陛下誤つて

罪なき金光寺の僧們を苦困め給ふ、彼の寶貝は亂石山碧波潭の萬聖龍王が盜みし處なり、昨夜貧道塔上にて二個の妖怪を捉へ候。國王驚いて其故を問ふ。三藏篇んで首尾の動靜を仔細く語り給へば、國王大いに懼び、然らば今より武官に命じて妖怪を捉へ來らすべし。三藏の曰く、武官を用ひ給ふに及ばず、貧道が大徒弟に孫悟空と云ふ者、よく妖怪を伏し候、萬般渠に命じ給はゞ、決して過失無かるべし。國王聞いて、其大徒弟今那里に在るや。三藏、行者を呼び給へば、行者進み出でゝ國王に見ゆ。國王行者が姿を見て是凡體ならずと思ひ、頓て彼妖怪を捉へ來るべきよしを命じたまふ。行者領掌つて階前を退き、金光寺に到り、八戒、悟淨に命じて妖怪を一個づゝ扯出ださせ、三個打連れて城中に到り、二個の妖怪を階前に扯き居ゑければ、國王首め文武の百官、彼の妖精を見るに、一個は尖りたる嘴、荒れたる牙嚴利して甲黑く、是則ち黑魚の怪精なり。一個は皮滑にして腹大きく、口黑くして髭長く、是則ち鮎魚の妖精なり。足ありて能く歩行き、大體は人の形に變化したり。國王始終のことを訊れ給へば二個の妖怪仔細に是を自首す。國王頓て金光寺の僧を殘りなく敵されけり。然して殿上に筵宴を設け、三藏師徒を厚く接待し、國王又謂つて曰く、何の御徒弟なりとも夾み、彼龍王を亡し寶貝を把返したく思ふなり、願はくは師父是を免さんや。三藏の曰く、悟空と八戒兩個に命じ候はん。

行者、八戒進み出て、國王に向ひ、吾們二個駈せ向ひ、彼妖怪を亡し寶貝を把返し來るべし。國王宜はく、傭們何程の人馬を用ひて妖怪を捉ふるや。八戒が曰く、那ぞ人馬を用ふるに到らんや、我酒を喫み飯を食ひ、師兄と俱に駈せ向はゞ、手の下に彼の龍王を捉ふべし。國王大いに喜び、擒に捉へし二個の妖怪をして路開做せ給へば、行者八戒乍ち雲に打乘りて那里ともなく飛び去りけり。國王を初め衆位の官人ども大いに驚き、天に向ひて拜をなし、三藏を老佛と唱へ、悟淨を菩薩と稱し、只管恭敬ひかしづきけり。

六三　二僧蕩レ怪鬧二龍宮一　群聖除レ邪獲二寶貝一

行者、八戒の二人は亂石山碧波潭に到り、彼二個の妖怪に謂つて曰く、傭等先へ行きて龍王に告すべきには、我は是聖天大聖孫悟空なり、金光寺の寶貝を拿返さん爲に來れり、疾早に返さば龍王の命を助くべし、倘些少にても遲くならば、水中に打入りて悉く齏に做すべきなり、疾く此由を龍王に告げて寶貝を返せよ、北代に傭們によき餞別を取らすべしと、鐵棒を把出して口より仙氣を噴きかけ一箇の戒刀となし、二個の耳と鼻をそぎ落し水中に投げ入れければ、二個の妖怪不思議に命を助かり、

疼を忍んで宮中へ馳せ返り、龍王の前に走り出で、大王、大事あり大事ありと呼はりける。老一王と九頭駙馬と筵宴を催し在りけるが、是を聞きて、何事なるぞと訊ぬるに兩個の妖怪首尾を仔細に話り、當今かの孫悟空金光寺の寶貝を拿返さんとて、殿しく吾們を攻呵責み候ふなりと告げゝれば、龍王一度孫悟空の三字を聞くより大いに驚き、戰々兢々驚ぎければ、九頭駙馬是を見て大いに笑ひ、大王煩惱し給ふな、我幼き時より武藝を學び四海の豪傑と交を結ぶ、那ぞ彼弱馬溫を怕れんや、我今彼悟空を掴み來るべしと、一口の月牙鏟を把つて水面に跳り出で、大いに呼はつて曰く、彼弱馬溫は何に在りや、我金光寺の寶貝を盜みたりとも汝が管る事にあらず、怎生ぞ吾が小的に疵付けたるや、趁く來りて我が手列を見よ、但し傭等吾が威勢に怕れて腰が拔けて來らぬかと大音に罵りける。行者大いに怒を發し、汝寶貝を盜んで金光寺の僧們を苦困ましむ、我們同じ沙門なり、那ぞ餘處に見捨てんや、且又今の惡言聞き捨てがたし、死を知らぬ獸子よと鐵棒を水車に回して打つてかゝる。九頭駙馬も戟を振つて跳り蒐り、兩個亂石山の中に在つて三十餘合相戰ふ。八戒釘鈀を打振つて行者を助けて戰ひければ、九頭駙馬當ひがたく、空中に飛び昇り本相を顯しければ、九箇の頭有りて、其形の兇惡なるを見て、八戒怕れて逃げんと做るを、駙馬の妖怪翅を伸べて飛蒐り、八戒が戟を引掴み水中へ扯き入

れたり。斯くて妖怪、原の姿に變化して龍王の前に到り八戒を地上に投着け、夫搦めよと呼はりければ、衆部の小妖的走り倚つて八戒を細縛めける。老龍王大いに喜び、駙馬どの功績々々と稱揚し、酒を勧めて勞を歇ましむ。此時行者は八戒が生擒られたるを見て、急に復蟹と變じて水中に潜り入る。原來此處は牛魔王と戰ひし時來りて路開はよく知りたれば、立地に宮中に遁ひ登り、彼是と伺ふ處に、許多の小妖的集りて遊び居る處あり。行者近く遁ひよりて、向に駙馬大人の捉へ來り給ひし嘴の長き和尚は未だ死なずして在りやと問ひければ、小妖的が曰く、未だ死なず、則ち廊下に在り。行者聞いて、頓て廊下に遁ひ到り見れば、八戒は柱に細縛められて在り。四方に人語なきを伺ひ、終に細縛を咬ひ斷りける。八戒繩を拔け出て大いに喜び、師兄我が釘鈀を遺棄に取られたり、怎麼して拿返さん。行者是を聞いて、傍一邊に隱れて少時待つべし、我穿索れて取り來らんとて、隱身の法を行ひ、宮中に入りて伺ひ見るに、彼方に釘鈀を立てかけ置きたり。行者密に奪ひとり、入戒が繩れ在る處へ歸り來り釘鈀を遞與しければ、八戒大いに喜び、師兄且水面に出て待ち給へ、我彼妖怪を偽引き出さん、其時師兄彼を打ち殺せ。行者點頭き、心得たりと竟に水面に走り出て待ち窺ふ。入戒は釘鈀を把つて宮中に跳り入り、卓椅傢伙の類禁毅打ち碎く。老龍王と九頭駙馬は事の急なるに驚狼へ廻り、何

の差別なく唯逃げ昏亂うて騒動す。八戒は手をも止めず四面八方に打つて廻る。恰も無人境に入るが若し。龍王と駙馬は漸々に心を楚め、手に手に利鋒を擎げて、衆部の水怪、龍子、龍孫を從へて八戒獨を取圍む。入戒よき程に戰ひて時分を見合せ逃げ出づる。妖怪どもは遁さじと水面まで追ひ來る。待ち設けたる行者が鐵棒、些少も猶豫はず、跳りかゝつて老龍王が頭を打てば、熟柿の若くに打ち破られ、腦漿滾々て死したりける。九頭駙馬は勢ひの善からざるを見て敢て戰はず、龍王の死骸を取りて水中に歸りける。行者、入戒も又是を追はず、岸の一邊に蹙して少時歇み居たりける。斯る處に東の方より狂風滾々と發り、南を指して行くものあり。行者頭を擧げて伺ひ見れば、二郎顯聖、領梅山六兄弟と鷹を居る犬を率き雲霧に隨ひ行き給ふ。悟空、八戒に向ひ、傍彼を看よ、彼七聖兄弟なり、僥倖に當今央みて我們が力を助けしめん。入戒聞いて、是然るべしと急に雲に打乘り空中に追到り、眞君少時車馬を止め給へ、我們兄弟爰に在りて見た奉りたき幹あり。二郎眞君是を聞いて、八戒と打連れ、庚、張、姚、李、鄧、直の六兄弟を引率して降り來りて行者に見ゆ。行者禮を行ひて首尾の動靜を語り、萬望は眞君力を助け給へ。二郎眞君是を聞いて、我們今日獵に出て此處を過り、僥倖にして大聖兄弟に見え戰を助けよと央まるゝ、懽喜那ぞ是に過ぎん、今より力を添へて妖怪を退治すべし。

八戒が曰く、我且水裡に討入りて妖怪を偽引き出し來らんとて、釘鈀を擊つて又水裡に潛り入り、宮中に飛込みければ、龍婆、龍子、龍孫等は龍王の死骸に取着き、歎き臥して前後を覺えず。九頭駙馬一邊に立りて棺材を取納れて、爰に八戒が來るを知らず。八戒忽ち龍子を捉へて唯一突に突き殺す。龍婆大いに驚き、彼和尚又來つて我が子を殺せりと叫びければ、九頭駙馬戟を拿つて龍孫と倶に八戒に打つてかゝる。八戒又戰ひ負けて水面に逃出づる。妖怪どもは遁さじと潭の邊まで追ひかけ來る。一邊に隱れ在りし二郎七星、大聖と倶に跳りいで、刀鎗を廻して電光の若く伐立てけるにぞ、龍孫は五體微塵に切碎かれ立地に死したりける。九頭駙馬是を見て本相を顯し、九箇の頭を伸べて翅を發き飛び廻り、件一に喰ひ殺さんと働きける。二郎眞君金弓に銀彈を挿み妖怪を劈ひ、切つて放てば過たず、右の翅を射串きたり。妖怪翼を射破られて山の半腹に落ちけるが、忽ち又頭を伸べて二郎眞君を喰はんとす。眞君の犬と鷹飛び蒐つて是を嚙み碎く。妖怪益々大疵を負ひたれば、今は力も弱り果て、命一個を助からんと去方知らず逃げ失せける。八戒是を追はんと爲るを行者扯住め、窮寇は追ふ事なかれと云へり、寶貝さへ取返さば道厮を殺すに及ぶべからず、我今謀計を以て寶貝を拿返し來るべしと、忽ち九頭駙馬が容と變じ、八戒を引領れ水裡に潛り入り、宮中に駈入りければ、萬聖公主出迎へ

て眞の夫と思ひ、吾君怎生慌忙てゝ歸り給ふや。行者曰く、彼八戒今爰に來るなり、倆早く寶貝を拿ち來れ、我深く藏し置くべし。公主事の急なるに狼狽へ行者が化けたりとも悟らず、頓て一箇の金匣子を取出し、是はこれ佛舍利なり、又一箇の白玉匣を取出し、是は則ち靈芝艸なり、君よく收めたまへ。行者二品の寶貝を受取り本相を現し、倆吾を認得りたるや。公主、行者を見て大いに驚き、奥へ逃れんとする處を、八戒釘鈀か擊つて跳り出て、唯一打に打ち殺す。行者は奥に駈け入つて龍婆を生捉り、竟に二品の寶貝を捧げ、八戒と打連れて水面に立返り、二郎眞君に見え水裡の動靜を語り、禮をのべ拜謝すれば、眞君も別を告げて潯江口に歸り給ふ。行者と八戒は、寶貝を携へ龍婆を擊立て、祭賽國へ立歸り、國王の階前に到り此由を奏しければ、國王はじめ金光寺の僧衆も、三藏師徒四倆を拜し懽喜ぶ事限りなし。行者、國王に對ひ、早く寶貝を塔中に納め、龍婆を塔上に捉へおき、永く寶貝を保守しめ給へ。國王、然るべしと懽喜び給ひ、文武の官人許多從へ、三藏師徒四人を伴ひ金光寺に急ぎける。此時行者、悟淨を呼びて、倆今より大羅天上に到り、王母娘々の寶貝九葉靈芝艸を靈虛殿に納め來るべしと命じければ、悟淨心得、雲に駕りて空中遙に去行きけり。斯くて國王と三藏師徒は金光寺に到り、行者に命じて寶貝を納めしむ。行者命を受けて佛舍利を捧げ塔に登り、第十三層の上

に登り、瓶中に是を納め、鐵索を以て龍婆を塔中に搦め着け、琵琶骨を穿つて逃ぐる事を許さず、眞言を念へて國の土地神を呼び出し、又本寺の伽藍神を呼びて、爾們三日に一度づゝ飲食を贈りて此龍婆を養ふべし。列位の神、命を受け領掌つて退きける。行者寶貝を安置して塔頭を下りければ、忽然に原の如く塔の頂上赫然として、霊光萬道に發り瑞氣千條に現る。國王塔上を望んで拜し伸眉び、金光寺を改めて伏龍寺と號し、駕を還して宮裡に還行り給ふ。此時悟淨も糜芝艸を盤盛殿に納め、大羅天上より迴りければ、國王益々懽喜に堪へず、大いに筵宴を開きて三藏師徒を接待し給ふ。斯くて三藏は早く西方に進まん事を願ひ給へば、國王頓て關文を倒換め、若干の黄金を三藏們に贈り給へども、三藏師徒一毫も受けず。國王詮方なく、四個に衣帶、鞋襪、乾粮のたぐひを贈り給ふ。三藏師徒厚く拜謝して是を受け、別を告げて立出でければ、文武の官人伏龍寺の僧衆、遙々と二十里の道を送り行き、竟に別れて城中に歸り入る。伏龍寺の僧達は大恩を感じ別るゝに忍びず、又六十里を送り行き、涙を流して別れけり。三藏四個の者どもは、祭賽國を後になし西方に向ひて急ぎけり。

六四　荆棘嶺悟能努力　木仙菴三藏談詩

此時冬盡き春も半に推移り、三藏師徒道を急ぎて進む處に、忽ち長く續きたる嶺あり。荊棘蓼莪と生茂り、薜羅牽繞と遺纏はる。其下に些少の小の形は殘れりと雖も、左右總て刺針の棘なれば一歩も前む事能はず。行者是を見て、老孫此山の光景を見て來るべしとて、頓て空中に飛昇り四方を伺ひ、少時有りて下り來り、此山の行程千里許も有るべし、皆斯くの如き荊棘なり。三藏大に驚き、然らば怎麼して此山を越ゆべきや。八戒曰く、師父管ず痛心し給ふな、老豬よく道を開くべしとて、頓て伸を結び眞言を唱ふれば、其丈二十丈許の姿となる。又釘鈀を取つて打振れば三十丈の長さとなる。八戒、師父を呼んで曰く、吾に續きて前み給へと、兩手にて釘鈀を把り、荊棘を拔き除くれば、一釘鈀に二十間三十間程づゝ掻き除くるにぞ、三藏大に歡喜び、跡に着いて前み給ふ。悟淨は行囊を荷ひ、行者は鐵棒を擊つて道を開くの助をなす。行く〳〵百餘里を進む處に、既に天晩におよんで忽ち一箇の石碣を見る。上に荊棘嶺の三字を刻み、其下に二十四字の小字あり。荊棘蓬蓽八百里、古來有レ道少二人　行一と有りければ、八戒打笑ひ、吾是に兩句を添へて後の照驗と做すべしとて、筆を出して書寫し、釘鈀の刃を以て彫り着けたり。其二句に曰く、自今八戒能開破、直透二西　方一路　盡　平と。三藏欣然として歡喜び、馬より下りて八戒を謝し給ひ、今宵は此處にて夜を明し翌又疾く往くべしと

云ひければ、八戒が曰く、師父斯る深山に住り給ふ事なかれ、今宵は月も明かなれば連夜に進み給ふべしと、釘鈀を把つて荊を拂ひ道を開く。三藏是に抖擻されて、又夫より道を跑り、師徒更に手をも住めず道をも休めず。馬は蹄を鳴しつゝ竟に一晝夜を駈せ給ひ、又此日も暮に及びて、看る〳〵一座の古廟あり。乍ち一陣の陰風發り、廟の後邊より一個の老人、青臉、紅鬚、赤身、僚牙なる一個の鬼使に一盤の麵餅を齎たせ出で來り、三藏の前に跪下きて言ひけるは、某人は此荊棘嶺の土地神にて候、師徒遠を駈せて飢を給ふを悟り、麵餅を捧げて飢渴を助け奉らんと。八戒是を聞いて喜び、既に取らんと爲る處を、行者叱つて、倘漫に近づく事なかれ、此老者曾て善人に非ずと。又老者に向ひ習つて曰く、汝何者なれば我が師父を誑惑さんとするや、且我が一棒を喫うて見よと鐵棒を把出す。彼妖怪、行者に見顯され、忽ち一陣の妖風と成つて三藏を拖攫び、去方知れず成りにけり。行者們三個の者俱は慌忙て騷げども詮方なく、指方も無しに尋れ搜す。三藏は彼老者に攫ひ去かれ一個の石崖の下に到り、三藏を下して老者が曰く、我は曾て人を害する者に非ず、此荊棘嶺に年を經て住居する十八公と呼ぶ者なり、今宵月清くして風靜なれば、聖僧を迎へて友を會し詩を吟じて歡娛をせんと爲るのみなり。三藏更に人心地もなく打戰々でぞ居たりける。老人が曰く、且吾が菴へ入り給へとて手を

拿つて勞册るにぞ、三藏は恐怖立上り石屋に向ひ給へば、門の上に文字あり、木仙菴と寫着したり。裡に入りて坐し給ふ時、乍ち外面に聲有つて、十八公、聖僧を請ひ來りしやと云ひて入り來る者あり。三藏是を見給へば是三個の老者にて、其容貌尋常ならず、一齊に入りて禮を施す。三藏も禮を返して曰く、貧道何の德かあつて仙翁の下愛を蒙るや。十八公笑つて曰く、某人們聖僧の道ある事を聞き及びて爰に待つ事年久し、僥倖に今日爰に見ゆる事を得たり、歡喜何ぞ是に過ぎんや。三藏の曰く、萬望は仙翁の大號を示し給へ。十八公が曰く、一個は孤直公、一個は凌空子、一個は拂雲叟と號す、家人が號を勁節と號し候。三藏聞いて又問うて曰く、列位老壽幾旬ぞや。此時孤直公が云ふ。

我壽今經二千歲古一　撐レ天葉茂四時春
香枝鬱々龍蛇狀　碎影重々霜雪身
自レ幼堅剛能壯レ老　從レ今正直喜二修眞一
烏棲鳳宿非二凡輩一　落々森々遠二俗塵一

凌空子笑つて道ふ。

吾年千歲傲二風霜一　高幹經枝力自剛

夜靜有レ聲如二雨滴一
盤根已得二長生訣一
留レ鶴化レ龍非二俗塵一

拂雲東笑つて道ふ。

歳寒虛度有二千秋一
不雜二暮塵一終冷淡
七賢作レ伴同談詠
戛玉敲金非二瑣々一

勁節十八公笑つて道ふ。

我亦千年約有餘
堪レ憐雨露生成力
萬壑風烟惟我盛
一枝飛翠影留二仙客一

秋晴陰影似二雲張一
受命尤宜不老方
蒼々爽々近二仙鄉一

老景瀟然清更幽
飽經二霜雪一自風流
六逸爲レ朋共唱酬
天然情性與レ仙遊
蒼然貞秀白如々
借得乾坤造化機
四時酒落讒二吾號一
博奕調琴謂二道書一

三藏是を聞いて賞讃して曰く、列位容形清くして亦奇なり、且道を得て高年に到る、若や商山の四皓には有らざるか。四個の老者答へて曰く、過ぎたる尊言唯疼み入るのみなり、我們商山の四皓にあらず、深山の四操なり、豫て聖僧の詩才神妙なるを承はり、今宵謂ひ來つて吟哦みなし、些少心力慰めんと思ふなり。此時一箇の赤鬼、一盤の茯苓膏と、五壺の香茶を奉る。三藏怕れ疑ひ慢に呑まず。四個の老者一齊に是を喫して更に餘念なきを見て、三藏漸々に落着き、二箇の茯苓膏を喫し香茶を飲み密に座中を見給ふに、滿堂清麗にして雅致あり、些少も塵埃を知らず。十八公が曰く、聖僧原來有道の詩人なり、萬望は一律を賦し給へ。三藏今は止む事を得ず、一律を吟じて曰く、

杖錫西來拜二法王一
金芝三秀詩壇瑞
百尺竿頭須レ進レ壽
修二成玉像莊嚴體一
願求二妙典一遠傳揚
寶樹千花遍蕊香
十方世界立二行藏一
極樂門前是道場

四老聞き畢つて大に是を賞讃す。十八公が曰く、寡人無能なりと雖も大膽に今一首を和せんと、

勁節孤高笑二木王一
靈椿不レ似二我名揚一

山空百丈龍蛇影
解與二乾坤一生二氣樂一
衰殘自愧無二仙骨一

孤直公も又和して曰く、

霜姿常喜宿二禽王一
露重珠纓蒙二翠蓋一
長廊夜靜吟聲細
元日迎春會獻レ壽

泉泌千年琥珀香
喜因二風雨化二行藏一
惟有蒼齊結二壽場一

四絕堂前大器揚
風輕石齒碎寒香一
古殿秋陰淡彩藏
老來寄傲在二山場一

凌空子同く和して曰く、

梁棟之才近二帝王一
晴軒恍花來二青氣一
肚節凜然千古秀
凌雲世蓋婆娑影

大聖宮外有二聲揚一
晴壁等常度二翠香一
深根結矣九泉藏
不レ在二群芳鬪麗場一

拂雲叟並んで和して曰く、

洪澳園中樂二聖王一
翠筠不レ染湘娥淚
露葉年々顏不レ改
子猷去レ世知音少

渭川千畝任二分揚一
斑籜堆レ傳漢史香一
霜柯代々節難レ藏
巨古留レ名翰墨場

三藏聞いて、仙翁の詩個々玉を吐き錦を列ぬ、吾賞に歡喜に堪へたり、今夜既に更たけぬ、三個い徒弟們那里にか在りて我を待つべし、萬望は仙翁吾に道を教へて歸る事を免し給へ。四老笑つて曰く、聖僧心を勞め給ふな、夜明けなば自ら御弟子羅に逢ひ給ふべし。三藏尙も脚を告げんとし給ふ處に、忽ち外面の方より入り來る者あり。三藏是を看給ふに、絕奇なる衣裝を着繞たる一個の仙女、兩個の女童に絳紗の燈籠を捧げさせ、濟然として入り來る。四老出迎へて曰く、杳仙怎麼して來れるや。仙女笑喜を含んで曰く、今宵佳客の來臨ありと聞き、故意々々來りて相見え奉るなり。十八公、三藏を指して、佳客則ち是にあり。三藏身を屈めて仙女に禮をなし、敢て言を交へ給はず。仙女、十八公に向ひて、今宵の盛會極めて佳吟多かるべし、其一二句を示し給へ。拂雲叟が曰く、我們詞理ぐて又更

に赤面す、唯聖僧の妙句實に盛唐の風調にして、是を誦して個々羨むのみ。仙女が曰く、萬衆は其妙句を敎へ給へ。四老同口に三藏の詩を述べて聞かせければ、仙女滿面に笑を含み、三藏に向ひて曰く、自ら不才にして聖僧の妙句に答へ參らせんは怕ありと雖も、斯る佳作を聞きつるからに唯に止むべきも无禮に似たれば、鄙くも一句を述べて是を和し奉らんと、乍ち一律を吟じて曰く、

上苑名高衆芹王　泗濱壇坫共稱揚
董仙偏愛春林陰　孫楚曾吟寒食香
雨潤紅姿嬌且艷　煙蒸翠色鬱還藏
自憐過熟微酸意　落處年々伴二麥場一

四老此詩を聞きて是清雅にして佳吟なり、且句の中に春意を含めり。仙女答へて、恐有りと云ひつつ三藏の傍に進み倚り、聲を低うして耳語きて曰く、佳客斯る良夜に到り、何を待つて靦々として居給ふぞ、人生の一世は幾旬ぞや、唯何事も捨て給ひて吾と快く樂み給へ。十八公が曰く、杏仙、今聖僧に就いて仰高の心あり、聖僧又俯就の心なからんや、倘是を憐まざるは知趣の人にあらず。孤直公が曰く、聖僧は有道の師なり、管ず苟且の事にては此春意協ひがたし、我宜く是を計はん、拂雲叟と

十八公は媒妁となり給へ、凌空子と吾とは婚姻を司り候はん。三藏聞きも敢ず色を變じ立揚り、傭們總て同穴の妖怪、怎麼ぞ婦人を扯き寄れて我を誑惑さんとするや。四老、三藏の怒を發したるを見て個々言を住め、少時默して居る處に、彼赤鬼大に怒り、雷の如くに勃發りて曰く、此和尚何ぞ斯のごとく不興なるや、我が姐々顏色の艶美なるに斯の若き詩才あり、傭が爲には相應の佳交なるに、那ぞ忌み嫌ひて我が主を羞むるや、倘此事に隨はずんば、我傭を擄ゝ行きて再度入界には歸すべからずと、既に擄み羅らんとす。三藏は驚き怕れ、只管に泣き叫び淚雨のごとくなり。仙女は彼鬼を扯住め、三藏の傍に居倚り、萬般と賺し頑要め、袖の裡より汗布を把り出して三藏の泪を押拭ひ、佳客然樣に氣を悶み給ふな、我今汝と與に玉に倚り香に依て慰みなん、遣邊へ來り給へとて手を拿りて扛立つる。三藏益々泣き喚き駈け出さんと爲る處を、座中の者ども皆宜かゝり扯住めて放じとす。三藏は身を遁れんと扯きつ控かれつ爭ひけり。行者が猿三個は師父の去方を尋ね煩ひ一夜足をも住めずして走り步きけるが、荊棘嶺を打越えて、天曉近き頃に到り、何處ともなく三藏の呼ぶ聲す。三個の者聞き著けて聲を齊く、師父々々と高聲に呼はりければ、此聲三藏の耳に入りて應と一聲答ふると齊く、一座に在りあふ妖怪ども、忽ち形骸は消え失せて寂として文物もなし。三藏は木仙菴を跳りいて傾に走ると思

ひしが、乍ち三個に行き遇ひけり。四個一齊に歡喜ぶ事限なし。行者が曰く、師父今まで那里に在して奈何なる難爲に遇ひ給ひしぞ。三藏有りし事ども仔細語り、彼十八公、孤直公、排雲叟、淺空子、杏仙、女童、赤鬼等が事まで落もなく談話り、吾夢の如くにて一向に土地を辨へずと雖も、唯詩を談じたる處を思ふに、此處より遠からず。三個是を聞きて然らば試みに尋れ見るべしとて、是彼と索したるに、一邊の石崖に木仙菴の三字あり。行者、是こそ妖怪の巣穴なちめと心を住めて伺ひ見るに、一株の大檜樹、老たる柏、古き松あり。又一むらの老き竹、一株の丹楓あり。崖の上に古き杏の樹有りて、臘梅と丹桂と其一邊に生立出でたり。行者笑つて、汝等妖怪を見着けたるや。八戒、悟淨、曾て見ずと答ふ。行者、彼老いたる樹毎に指して曰く、是則ち妖怪なり。兩人尙其故を問へば、行者語つて曰く、彼十八公は松樹なり、孤直公は柏樹なり、淺空子は檜樹なり、排雲叟は竹なり、又赤鬼は楓樹なり、杏仙は杏樹、二人の女童は臘梅と丹桂なり。八戒聞くより釘鈀を把つて彼木竹を根と倶に突倒せば、果然下際より鮮血淋漓として流れ出でたり。三藏師徒駭き呆るゝ許なり。斯くて三藏は悲なく又馬に乘りて、三個の徒弟を從へ西方に進み給ふ。

六五 妖邪假設小雷音寺　四衆皆遭大厄難

さる程に三藏は、若干の日數を經て一座の高山を越え平地の處にいて、遙に向を眺むれば、祥雲彩霧靄々として殿閣高樓あり。三藏、行者に向ひ、彼處は是何にか有らん。行者頭を擧げて遙に眺め答へて曰く、是一樓の寺院なり、彩雲祥霧靄々たりと雖も、然れども亦凶氣あり、彼處に到り給ふとも慢に門裡に入りたまふべからず。三藏馬に鞭を加へて山門の前に到り見れば、雷音寺の三字有り。三藏馬より飛んで下り、悟空を叱つて曰く、潑猴今日既に雷音寺に行着きたるに、那ぞ凶氣有りと云ひて我を欺きたるや。行者笑つて曰く、師父過つて我を恨み給ふな、山門の上に四箇の文字あり、師父其三字を讀みて一字を洩らし給ふは何事ぞや。三藏是を聞きて再度能く〳〵打見れば、是小雷音寺と寫着したり。三藏點頭き、此處小雷音寺と云ふならば必定一個の佛祖あらん、我們入りて拜ずべし。行者曰く、此寺に入り給ふは極めて凶多くして吉少し、倘生災に遭ひ給ふとも、返すがゝも老孫を恨み給ふな。三藏の曰く、吾東土を出る時一箇の誓を立てたり、寺に過はゞ佛を拜し塔に過はゞ是を掃はんと云へり、當今寺に過うて佛を拜す、那ぞ倆を恨まんやと、毘盧帽子を冠り金襴の袈裟をかけ、

山門の裡に入り給ふ。門の一邊に人在りて大音に呼はつて曰く、唐僧東土より來つて如來を拜せんとしながら、那ぞ箇樣に无禮なるや。三藏是を聞いて急に軀を屈めて拜を做し前み給へば、八戒、悟淨も同く拜し通る。第二の門に到れば、則ち如來の大殿に到る。殿門の邊には五百羅漢、三千揭諦、四大金剛、八大菩薩、比丘尼、優婆塞等並み居たり。三藏、八戒、悟淨等一歩々々に拜をなし、如來の座前に到りける。行者は更に拜をも做さず立蹤つて居たりしが、亦入在つて呼はつて曰く、孫悟空、傭如來の尊前に立ちて那ぞ拜を爲さゞるや。行者大いに叱つて曰く、傭們膽太き孽畜生、怎生ぞ佛の姿名を誕り、如來の尊體に化けて、佛の淸德を破りぬるや、傭們目にもの見すべきなりと鐵棒を以て打たんとする時、忽ち揑と物音響いて空中より一箇の金鐃落ち下りて行者が上に罩ひ冠着り、行者を此裡に閉籠めて一寸も動かせず。八戒、悟淨、これを見て慌忙て働かんとする處を、彼五百羅漢、三千揭諦們の妖怪とも拿圍み搖かせず。三藏をも扯捉へて竟に三個俱に綑縛めたり。彼如來に扮けたるは妖怪の大將にて、羅漢、揭諦等は皆小的の妖怪なり。三藏を扯居えて個々本相を顯し、妖王、小的に云つて曰く、這三個を嚴く推籠めおけよ、彼行者は神通廣大の厮なれば、彼厮が亡びざる間は慢に唐僧を喰ひがたし、此故に我今行者を金鐃の裡に封じ籠め置きたり、三日三夜過ぎなば管ず化盡て水と

成るべし、而して後彼三藏を請用せんと云ひければ、小妖的ども歡喜び勇み、白馬は殿の後に繫ぎ彼毘盧帽子と金襴の袈裟は行囊の中へ疊入れ、奥深く藏し置き、個々裡に入りて歇みけり。行者は那金鐃の中に在りて、右に推し左に抑せども些少も搖かす事能はず、身を如何にも長大になして突き破らんとすれば、偖も此金鐃妙不思議の寶貝にて、行者が身長大になる時は金鐃も又長大くなり、行者身を些小くする時は金鐃もまた縮みければ、行者五六根の毛を扯拔き、變じて鐵鍊と做して是彼二三百度突きけれども、些の透間も見えざりけり。行者大に心を焦ち、印を結び眞言を唱へ、護法揭諦、六丁六甲の諸神を呼びければ、列位の諸神降り來り、金鐃の外に繞り居て、大聖今何の幹有りて我們を呼び給ふや。行者曰く、我今妖怪の爲に此金鐃の裡に裝り入れられ、種々法を盡せども出づる事能はず、傭們力を盡して我を救ひ出すべし。諸神是を聞きて力を合せて金鐃を排かんと僞らに、分毫も動かす事能はず。護法揭諦が曰く、大聖、此金鐃は奈何なる寶貝にや、當今上下一箇に合して一塊となり、推せども扯けども排き難く、我們が力に及ばざれば、今より玉帝に奏聞して其上方便を廻らすべし、大聖少時待ち給へと、六丁の神に唐僧を護らしめ、六甲の神に金鐃を守らしめ、祥雲を燒して南天門に昇り到り、靈霄殿に前み登り玉帝に謁ず奏して曰く、臣は是唐僧を守る處の護法揭諦なり

當今小雷音寺の妖怪、唐僧們四個を陷れ、行者を捉へて金鐃の裡に裝り込み、三霄夜にして化機させ水と爲さんとす。行者が一命風前の燈の如し、主上宜く聖斷有りて渠が大難を救はせ給へ、玉帝聞宣して頓ちに二十八宿を宣され、倆們揭諦と俱に行きて小雷音寺に到り、妖怪を治め唐僧を助けよと命じ給ふ。星宿列位勅を受けて揭諦と俱に靈霄殿を退き下りて、二更の時節小雷音寺に到る。此時衆部の妖怪どもよく熟睡りて音もせず。星宿、金鐃の迴に到り謂つて曰く、大聖我們は是二十八宿なり、玉帝の勅を請けて爰に來りて汝を救ふなり。行者聞きて、倆們疾く兵器を以て此金鐃を打破れ。星宿の曰く、是はこれ金にて鑄たるものなり、打破らば管ず大に響きて妖怪ども眼を覺ますべし、我們密かに兵器を以て金鐃を撞げ揭ぐべし、些少にても明き光を見れば倆身を變じて潛り出よ。行者、理なりと歡喜びければ、諸位の星宿兵器を把出して、金鐃の絲にさし込み是を揭げんと欲れども、揭ぐる事は少時留きて兵器を挿むべき透間もなし。彼是と立騷ぐうち早三更の頃になりぬ。行者は金鐃の裡に在りて今や光明の見ゆるかと、東を臨み四を顧み待ちけれども些少の透間も見えず。星宿の列れたる尤金龍が曰く、我今角の尖を以て金鐃を突き串くべし、大聖裡に在りて些少にても透間あるを見れば疾く身を變じて潛り出よ。行者聞きて、心得たりと相待つところに、彼金龍鐵の如き角を以て千斤の力

を極め金鐃を突串はば、怪しや此金鐃恰も人の肉の如く、金龍が角に纏ひ些少も透間あらず。行者裡に在て、金龍亦角にて突串きたるは知ると雖も、些の透間も見えざりければ、手を同りて角の迴を索り見るに、實に毛程の透もなし。行者呆抑果て、不濟串々々、風の漏るべき隙も見えずと少時沈吟したりしが、風と一個の手計を思寄き、行者又謂つて曰く、金龍爾些少の疵を堪へよ、我今些少手計ありと、耳の裡より金箍棒を取出し變じて一個の鋼鑽と做し、金龍が角の上に雖採なし孔を穿け、身を芥粒ほどに變じて錐の穴に潛り入りて、金龍快く角を拔くべしと呼はりければ、金龍亦許多の力を極めて漸々角を扯拔きたり。行者、角の中より跳り出で本相を顯し、鐵棒を推把つて彼金鐃を打ち破れば、寔に是銅山の崩れ倒るゝ若き響勃然と響き渡り、微塵に碎けて飛び散つたり。此物音に驚きて妖怪ども睡を覺し、驚破異こそ發起れとて、忽ち鎧を取つて投着け太鼓を鳴し妖兵を集め、倆々利鉾を扯提げて大殿の前に跑け集る。妖怪の大將は、彼金鐃微塵に碎摧散り、行者と廿八宿們の空中に立ち居たるを見て大に怒り、小妖的に命じて金鐃を取集めさせ、一根の狼牙棒を打振つて宙空に跳り登り行者們に向ひ、汝們逃ぐるとて遁さんや、且吾と三合を戰ひ得ば大丈夫と稱すべし。星宿大に叱つて曰く、汝は是何の妖怪にて、今佛祖に變化し唐僧を誑惑すや。妖怪笑つて曰く、我は便ち黃眉

老佛なり、人我を尊敬びて黄眉大王と崇む、汝們孫行者些少許の法術あるに誇り、西方の道手に障る者なしと恣に振舞ふよし聚て聞きぬ、今且我と戰ひて怎的勝つ事を得ば唐僧を返し汝をも助くべし萬知勝つ事能はずば唐僧と俱に打殺し、飯の菜に爲すべきなり。行者吃々と噴出し、汝且分に過ぎたる海口を吐いて後悔なせそ、快く來つて我が棒を喫ふべし。妖怪狠牙棒を打振つて打つて覓れば、行者も鐵棒を指翳して五六十合戰ひける。諸位の星宿是を助けんと一齊に進みければ、妖怪一箇手に棒を使ひ腰より白布搭包兒を拿出し、空に向ひて投ぐると見えしが、怪しや忽ち悟空をはじめ二十八宿護法揭諦等皆一同に彼嚢に包まれけり。妖怪は歡喜びつゝ肩に擔ぎて寺内に歸り、小妖的們を呼び出し、四五十筋の麻繩を把來らせ、嚢の裡より一個々々把出し盡般綑縛めさせ、一邊に推籠めおき、筵宴を設けて歡喜を做し裡に入りて歇みけり。天曉刻に到りて、行者身を變じて豆粒ほどになり竟に綁索を拔け出で三藏を首め八戒、悟淨、二十八宿、護法揭諦等殘りなく綑縛を脱き解き、傭們師父を伴ひて快く逃げよ、我は擔兒を拿りて後より行かん。個々歡喜び、頓て白馬を牽れ出し、三藏を打乘せ門を出で、列位の星神一陣の狂風を發し、大路を指して駈去りけり。行者は行囊を把返さんと裡に入らんと爲たりけれども、門々嚴く關して敢て進み入る事能はず。行者一隻の蝙蝠と變じて窗の透間より

飛び入り、門を越ゆる事三層にして、忽ち二階の窓より光明輝き出でたる處あり。怪しく思ひて指視き見れば、是三藏の行囊にて、金襴の袈裟光を放つにぞ有りける。行者心中大いに慌び、悉く奪ひ拿り肩に搭けて出でんとする時、不期も一品の擔兒を把落し、板壁に當りて響きければ、妖怪驚き起き出で來り、燋光を照し伺ひ見るに、此時行者は行囊を擔ひ、窓の透間より飛び出でける。妖怪是に心着きて綑縛め置いたる者どもを見るに一個も在らざりけるにぞ、妖怪大いに怒を發し、那里までも追すべきかと狼牙棒を推取つて、個々來れと云ひ捨て、宙を飛んでぞ追跑けたる。衆部の小妖的、個々利鋒を扯提げて、我後れじと續きけり。妖怪漸々三藏に追及き、大音に嘯はつて曰く、禿子俱、個們那里まで逃げ行くぞ、速に縛を請けよと罵りければ、星宿、天將是を見て、皆一齊に轉回し、八戒、悟淨も取つて歸し、入亂れて攻戰ふ。行者も不多時駈着け來り、鐵棒を閃して妖怪どもを打散らす。此時は一場の大戰にて、寔に是、天も昏み地も動き、神哭して鬼叫ぶ。且より夕に到るまで息をも繼がず戰ひしが、既に其日も西山に傾き、月また東海に浮み出づる。此時妖怪腰より彼搭包兒を把り出だす。行者快くも是を見着け、個々心を着けよと呼はりけれども、八戒、悟淨を首として、衆位の天將羅も其故を分曉り得ず只管に戰ひける時、妖怪忽ち彼搭包兒を投げ揚げゝる。行者は急に觔斗雲に

打乘り、空中遙に飛び去つたり。其外の天將輩、三藏、八戒、悟淨も俱に、盡般彼搭包の中に裝り入れらる。妖怪は凱歌を發げて寺中に歸り、小妖的に命じて一個々々に綱縛めさせ、原の如くに押籠めおきけり。行者は漸々搭包兒を遁れ、雲を下りて山の上に停立み、今は思惟に盡き果てゝ淚を流して獨言きけるは、彼妖怪が搭包兒は、抑何等の寶貝なれば斯く大勢の人を裝り入るゝや、我今那里に行きて救を需めんと少時沈吟したりけるが、忽然思ひ着きたる事あり、這般は北方の眞武君蕩煙天尊を央みて此妖怪を退治なし、人々を救ふべしと、頓て觔斗雲に打乘つて南贍部洲武當山を指して飛ぶがごとくに駈せ去きけり。

六六　諸神逢二毒手一　彌勒縛二妖魔一

斯くて行者は、觔斗雲に打乘りて南贍部洲にいたり、武當山に駈せ着き、雲を下りて三天門を過ぎて太和宮に向ふ處に、一人の靈官立出て、何者ぞと問ふ。行者答へて、老孫は孫悟空といへる者なり、天尊に見え奉りたき事ありて、萬千の道を厭はず故意々々此處に參りたりと稟しければ、彼靈官裡に入りて天尊に斯くと奏じければ、蕩魔天尊是を聞き給ひ、宮を出でゝ行者を迎へて殿中に伴ひ給ひ、

互に禮終りて後、行者、小雷音寺の妖怪が動靜を說くこと一遍し、彼妖怪奇術ありて退治しがたし、願はくば天尊力を助け給ひて彼妖怪を亡し給はゞ、深く是を感謝し奉らん。天尊聞き給ひて、大聖の賴、われ那ぞ是を救はざらんや、然りと雖も帝王の尊慮を伺はざる間は、我恣に干戈は動かしがたし、思ふに西方の小妖的奈何程の事か有らん、我自ら向ふにも及ぶべからず、某が麾下に龜蛇二將軍五大龍神といふ有り、是に數千の精兵を添へて大聖を助けしめん。行者歡喜んで拜謝すれば、天尊則ち龜蛇、龍神等の精兵を呼んで、儞們是より大聖に隨ひて小雷音寺に向ひ、彼妖怪を治むべしと命じ給へば、衆位の神たち命を受けて、行者と俱に打連れて雲に打乘り、急ぎ小雷音寺にいたり鬨の聲を揚げたりしかば、彼妖怪門外に跳り出で、衆位の神兵を見て喝々と打笑ひ、儞們那里の毛神どもにて潑猴が助太刀をなすや。多くの神達皆一同に叱つて曰く、我は是南贍部洲武當山の混元教主蕩魔天尊駕前の大將五位龍神、龜蛇二將軍なり、唯今大聖の賴によりて爰に來りて儞們を捉へんとす、疾く唐僧をはじめ衆位の星宿、天將們を助け出せ、然らば儞が一命を助けん、倘然らずんば忽ち微塵に切り碎き、冥途の妖怪となすべきなりと呼はりければ、妖怪大いに憤怒り、狼牙棒を閃して打つてかゝれば、衆部の小妖的皆一同に切つてかゝる。神將等も利鋒々々を差かざして、行者も俱に入亂れて半

時ばかり戰ひしに、彼妖怪また腰より搭包兒を把出だすを見て、行者は急に聲を發げて、衆位心を付けられよと未だ言ひも果らざるに、妖怪彼搭包兒を投げかけゝり。神將等は戰に心をとられ何の意樽もせざりし故、又悉く搭包の中に裝り將れらる。行者は雲に打乘り空中に逃げ去りたり。妖怪は勝を得て、搭包をかたげ寺中に歸り、小妖的に命じ麻繩を取り來らせ、五大龍神、龜蛇二將軍をはじめ一人ひとり綱縛めて、又空室の裡に打籠めおきけり。此時行者は雲を下り山の上に止り、今は奈何とも詮方なく、只管泪を流し惘然として立つたりけり。斯る處に西南の方より祥雲一群地に降り、滿山に繽紛と靈香薫じ諸々の花を降らし、光明四方に輝きわたる。行者驚き、是は奈何と遙に是を見てあれば、是則ち彌勒菩薩なり。行者聞はしく跪下いて拜をなし、菩薩當今那里へか去き給ふや。彌勒曰ふやう、我爰に來る事、小雷音寺の妖怪を治めんが爲なり、彼妖怪は實は我が身邊に在りて磬を司どらしむる處の黃眉童子なり、我三月三日元始天尊の方へ赴きし時、彼童子に空宮を看守せ置きたりしに、思ひきや我が後天袋子を偸みとり、爰に來りて妖怪をなす、彼搭包は後天袋子たり、凡俗是を喚んで人種袋と名く、他が持つ所の狼牙棒は則ち我が磬を敲つ槌なり、爾等師徒、他が爲に惱さる、而も衆位の星宿、天將、諸神等までも捉へられしと聞きつる故に、我爰に來つて退治せんとす。行者拜

伏して謝して曰く、佛祖、當今奈何して他を降伏し給ふや。彌勒笑ひて曰ひけるは、我今法力を以て此山の巓に一個の草菴を顯し、又一個の瓜畑を構へ許若の瓜を作り置かん、爾は去きて妖怪と戰ひ、勝つ事を求めずして只他を此處まで偽引き來れ、他口乾き瓜を見て管ず喰はんとすべし、我變て皆青瓜を見し置かん、爾早く逃げ來りて一個の熟瓜となり畑の中に轉び在らば、妖怪必定是を把つて喰ふべし、其時爾他が腹の中に飛び入りて强く苦めなば、我先彼寶貝を取返し、其後唐僧をはじめ衆位の天將等も總て皆救ひ出さんと曰ひければ、行者歡喜び、此謀計極めて妙なり、然れども妖怪もし遠く追來らざる時は怎麼かせん。彌勒聞き給ひ、苦しからず、我一個の法ありとて、行者が左の手を出させ菩薩、右の奏指に日中の神水をつけて、行者が掌裡に一個の禁の字を書き給ひ、汝よく是を握りて行き、妖怪と戰ふ時此手を開きて他に見せなば、妖怪前後を顧ずして只管に追ひ來らん。行者歡んで命を受け、左の手を堅く握り、右の手に鐵棒を取つて山門に驅け向ひ、妖怪早く出で、勝負をせよと大音に曾りければ、彼妖怪くだんの搭包を腰につけ、狼牙棒を打振つて走り出て、汝當今謀計極り力盡きて助を求むる處なく、獨來りて死を極むる、木より落ちたる猿猿かなと大いに嘲り笑ひければ行者怒心頭に發り、返答もなく打つてかゝれば、妖怪、狼牙棒を廻して十餘合戰ふ時、行者左の手を

開き妖怪に見せければ、抑奈何なる仔細にか在りけん、妖怪是を見て大いに焦燥げ、只管逃んで更に止らず。行者はよき程戯ひて逃走りけるを、妖怪は搭包兒を投ぐべき暇なく、只管走つて追ひ來る。行者は彼瓜畑の邊まで逃げ來り、忽ち身を轉じ跡を暗し見えずなりぬ。妖怪、行者を見失ひ、爰彼處と尋ぬる間に、行者は早く瓜畑に飛び入つて一個の熟したる瓜と變じて轉び居たり。妖怪は行者を尋ぬれども知れざりければ、頓て彼草庵の邊に來り、急に呼はつて、此瓜は誰が作りたるや。彌勒一人の老翁と變じ、菴の裡より立出で給ひ、此瓜は我が作りおきしなりとありければ、妖怪曰く、珠の外口渇きて堪へがたし、熟したる瓜あらば我に與へて渇をすくへ。彌勒則ち行者が變じたる瓜を取つて妖怪に與へ給ふ。妖怪、此瓜をとりて口を開き食はんとする時、行者忽ち身を小くなして他が喉に飛び入り、腹の中へ走り下り、逆樣に立ち或は蜻蛉返りをなし、色々種々に舞ひ跳りければ、妖怪疼み堪へかねて、地頭に臥轉びて、老父々々我を助けよと叫びける時、彌勒忽ち本像を現し給ひ、打笑ひて曰く、汝我を認得りたるや。彼妖怪頭を擧げて菩薩を見て大いに驚き、身を振はし地に平臥し、吾が主公萬望慈みを垂れ給ひ、我を救ひたび給へと詫び悲む。彌勒立倚り、かの搭包兒と聲を敲つ杖を擦ひ把り給ひ、唐空、汝が命を助けて疾く出よと命ありけれども、行者は腹の中に在りて騒も恨み

嘯れがたしとて、鐵棒を拿つて振廻し突廻しなしける程に、妖怪は總身碎くる許に疼み堪へがたく、只管に轉び廻りて手足を踏き苦みけるにぞ、彌勒曰はく、悟空、最早宜しかるべし、我に愛くし藥が命を助けよと呼はり給へば、行者聞いて、然らば今出づべし、妖怪口を開けと喚はりける。妖怪聞くより早く口を張り開く。行者乍ち跳り出でゝ本相を現す。彌勒、妖怪を捕へて彼搭包の内に裝り將れ給ひ、汝金鐃を怎麼なしつるや。妖怪袋の中に在りて答へて曰く、金鐃は行者に打碎れ、當今取集めて寺中に有り。彌勒是を聞いて搭包を肩に打かけ、行者と打連れて寺内に到らせ給ふ。衆部の小妖的大王が捉へられしを悟り、四方に散つて逃げ迷ふを、行者走り廻りて悉く打殺しぬ。斯くて彌勒は碎けたる金鐃を一個に集め、眞言を唱へ、口より仙氣を噴きかけ給へば、彼金鐃一個に固りて元の如くに形全うす。斯くて彌勒は行者に別を告げ給ひ、祥雲に乘じて踏り去り給ひければ、行者は天に向ひて恩を拜謝し、地簪を開いて、三藏師徒を首め二十八宿、護法揭諦、龜蛇二將、五大龍神等皆悉く綱縛を解きて救ひ出す。左右して列位の天將、星宿たち別を告げて、皆夫々の本郷に歸り去り給ふ。三藏師徒四人は此寺に半日を休足し、飯を作りて食し終り、頓て一把の火を放つて伽藍を悉く燒き盡し倚西方に向ひて急がれけり。

六七

拯救陀羅禪性穩　脫離汚穢道心清

三藏師徒は小雷音寺を離れてより、一月餘を經て一個の高山の麓に到り、日も西に傾きしかば、三藏馬より下りて宿を借らんと見渡し給へば、一邊に一個の民家有りて柴の扃を關したり。三藏立倚りて門を敲き給へば、裡より答をなして門を開き、一人の老人手に藜の杖を突きて出迎へ、何人なるぞと問ふ。三藏合掌して、貧僧は東土大唐より西天に赴き、佛を拜し經を求むるの僧なり、今貴地に到り天晩に及ぶ、萬望は老人慈悲を垂れ給ひて一宿を惠み給へ。老人聞いて、偖は遙々の道を越えて能くこそ來らせ給ひたれ、此地方は小西天の內にして陀羅莊と唱す處なり、某今宵は尊宿を勸むべし、且此方へ入り給へとて師徒四人を堂上に請じ、互に禮終りて後、老人三藏に向ひ、唐長老遠く爰まで來給へども、此先決して進みがたし。三藏驚いて其仔細を問へば、老人が曰く、此地方に一個の山あり、號けて七絕山といふ、山中悉く柿木にして餘木一株もなし、彼山直に行く事八百里にして、此處より三十里の道程あり、抑も柿に七絕あり、第一其木壽長し、第二に陰多し、第三に鳥の巢を喰ふ事なし、第四に蟲なし、第五霜葉「翫」ぶべし、第六に其實を嘉じ、第七落葉肥大にして宇を蓋くべし、

彼山餘木一根もなく、八百里が間皆柿の木ばかりなれば七絕山とは號けしなり、此山過ぎがたしといふは、毎年に滿山の柿其實を落す、山中に積りて又別に山をなす、雨露霜雪に叩れ朽ち腐れて穢はしきものと成れり、俗唱んで柿屎衙と云ひまた淘東園とも云ふなり、時今三月、其臭氣惡しきには及ぶべからずと雖も、然れども八百里が間總て斯の如くなり、其故に往昔より彼山を越えたる人なし、長老西天に行き給ふには外に行くべき道なし、我是を以て其進み難きを察すなり、爰迄來り給ひし辛苦仇事となるは殘多しと雖も、疾く東土へ歸らせ給ふべし。是を聞いて三藏煩悶として不育、只管涙を流し給ふ。忍べかねて行者、老人に向ひ高く叫んで曰く、汝宿を借さば貸すまでの事にて止むべし、那ぞ種々の慢言を吐き出して、我が師父を驚かすや。老人、行者が容の兇惡なるを見て心中頗る驚くと雖も、態と胴を居ゑて叱つて曰く、此癆病鬼、怎生ぞ老人に對ひて無禮の言を吐き出すや。行者笑つて曰く、老人眼有れども珠なく、我が相貌の醜きを侮りて癆病鬼と嘲る、我形は斯の如くなりと雖も、法力廣大にして常に惡魔を降伏して妖怪を拿ふる事を得たり。老人是を聞いて急に怒を返して情び、家僮を呼んで茶を捧げ齋を獻じ萬般と接待し、行者に向ひ、當下長老よく妖怪を捉ふる事を得たりと曰ふ、我が此地方に一個の妖精あり、若是を退治し給はゞ管ず重く禮謝すべし。行者曰く、此地

邊清平にして又人家も立籠めたり、那の妖怪有つて祟をなすや。老人が曰く、此地方久く安穩なりしに、三年前六月の初忽然一陣の狂風發れり、那時人家甚だ忙しき時候にて、麥を打つ的は場上に有り、秧を挿る的は田裡に在り、忙しきに紛れ心も付かず、唯天變とのみ思ひし處に、豈計らんや彼狂風過ぎる處一個の妖精在りて、人家に牧ふところの牛、馬、猪、羊、鷄、鵝の類を拿り喰ひ、男女の嫌ひなく活呑にす、自從後は常に來りて害をなすなり。行者聞いて、此地方の人志意分散にして齊はざると見えたり、若然らずば那ぞ家毎に銀を集めて數百金となし、法力有る僧を頼みて、銀を謝物として妖怪を捉へざるぞ。老人が曰く、汝の云へる如く我が此莊に家數五百家有り、家毎に三五兩づゝの銀を集め、一年山の南より一人の和尚を請ひ來り、銀を與へて妖怪を捉へさせんとせしに、彼和尚些少も法力なく、禿頭上を妖怪に打たれて西瓜の爛れたる如く終に命を失ひたり、我們又厚を奥ひ、他が爲に棺を買ひ葬禮を營み、又他が弟子達にも銀を與へたりしに、彼弟子ども何も欲念歇まずして又告狀に及ばんと於于今乾淨と不濟、然るに舊年又一個の道士を請ひ來り銀子を與へ、妖怪を拿へんと爲る處に、彼道士令牌を響かして法術を遣ひ、妖怪と相持鬪じに、天明に到り我們ども行きて見れば、計ずも彼同士溪水の中に浸し殺されたり、偖今此妖怪を退治し給はゞ、我が此莊中の長者を請ひ

來り倘と我們文書を交易し、若妖怪を退治せば、汝の要むるに憑ひ多少の銀子にても贈るべし、倘又倘妖怪に負けて命を失ひたりとも、外の徒弟等跡にて圖賴る事なかれ、互に天命に任すべし。行者嘲笑ひて曰く、倘無能の人を賴み剩へ圖賴りゆすられ、夫に怕氣付きて文書を求むるや、我は左樣の者に非ず、早く彼長者を呼び來れ。彼老人大に歡喜び、家僕に命じて八九位の長者を請び來る。個々三藏師徒に見え妖怪を拿ふる事を聞き、衆老歡喜ぶ事限なし。偖何れの師徒か妖怪を拿へ給ふぞ。行者進み出で、老孫にて候といふ。衆位の長者是を見て、不濟々々、彼妖怪神通廣大にして身體狼狐なり、汝斯くの如く丈低く然も疲せたり、妖怪が齒の間に挾むにも不足ならん。行者曰く、我生質疲せて小分といへども秀氣自ら中に有り、那ぞ妖精を怕れんや。長者の曰く、然らば倘妖怪を退治するに怎麼の謝銀を要むるや。行者聞いて、我們は德を積む和尚なり、怎生ぞ謝銀を要めんや、唯是一器の茶、一鉢の飯、則ち禮謝とするに足れり。衆位の長者是を聞いて俄に拜謝して歡喜ぶところに、忽然として一陣の狂風吹き來る。彼長者們大いに驚き、偖は妖怪來れりと戰々兢々、天を地へと顫動す。主の老人急に腰門を開き、家内の男女早く來れと三藏まで呼集め、妖怪既に來れりと叫び立つ。八戒悟淨も慌得て驚き逃げ入らんと爲る處を、行者急ぎ扯住め、汝等逃ぐる道理なし、我們沙門の身とし

て怎麼ぞ内外を分たざる、爰に在りて俱に奈何様の妖精やらん伺ふべし。八戒、悟淨、沒奈何、怕る怕る住り居たり。斯くて彼陣風過ぐる處隱々として半空に兩盞の燈光顯れたり。八戒是を見て大に笑つて、能慰々々、此妖怪管ず有行正きものならん。悟淨聞いて其故を問へば、八戒が曰く、汝聞かずや、古より云へる事あり、夜行以レ燭、無レ燭則止と、那看よ一對の燈籠を以て先達て來る、必定惡き者にはあらじ。悟淨が曰く、汝過れり、那は是燈籠には非ず、妖精が兩隻の眼の光なり。八戒三寸許縮み上り、怕怖や、眼斯の如くならば口の大いさ計り知るべからず。行者が曰く、好し〳〵、汝は師父を大切に守護すべし、我空中に到り得と見屆け來らんとて、鐵棒を推把つて空中に飛び升り、汝那斯なれば爰に來り人家に災害をなすや、其名を名のれと呼はりけれども、妖怪更に答をなさず、長き槍を振廻し行者に向ひて戰はんとす。行者は兩三度擊をかくれども、妖怪さらに一言も答へず、只管鎗を閃かせば、行者笑つて、汝は醜なるか啞なるか、好し〳〵我が鐵棒を喫へとて、兩個空中に在りて戰ふ事半時ばかり。八戒家に在りて空中を伺ひ見るに、彼妖怪遮架になる許にて行者を攻め討つことをせず。八戒、悟淨に向ひ、汝は爰に在りて師父を守れ、我戰を助けて妖怪を打ち殺さん、怎麼ぞ手を空くして候めに獨高名させんやと、雲を發し飛び升り、釘鈀を以て突いてかゝれば、妖怪

又一條の鎗をつかひ、兩手に二條の槍を以て行者と八戒に戰合ふ。八戒是を見て、此妖怪定に槍の妙手なりと云へば、行者が曰く、他更に言いはず、未だ人道に返らずして陰氣遲きものと見えたり、怕くは天明に到り陽氣增る時に到らば管ず逃げ走る事あらん、其時管ず逐ずべからず。八戒、心得たりと云ひて又多時戰ひけり。既に東方發白の頃にいたり、妖怪頭廻して逃げ出しけるを、行者、八戒、迹に續いて追ひ行きしに、忽ち惡臭人を襲ふ。是則ち七絕山稀柿樹なり。八戒は堪へかねて、是奈何に臭き事や、是は那里の淘毛厠なるや。行者聞いて、汝亂話を云ふことなかれ、鼻を塞ぎ只早く追駈けよと、終に山を馳せ過ぐる頃、妖怪忽ち本相を現したり。行者、八戒是を見るに、是一條の紅鱗の大蟒なり。巨口を開き兩個を呑まんと躍ひよる。行者進んで近づくと見えしが、唯一口に呑まれたり。八戒驚き逃げ走り、大に叫びて泣き悲む。行者、妖怪が肚の裡に在りて大音に呼はつて曰く、八戒々々管ず驚く事なかれ、我今道斯を船にして見すべしとて、肚の裡に在りて鐵棒を把り出し、骨に押當て力に任せて推付くれば、彼大蟒甚しく疼み苦み、頭を尾先を空になし、怡も一艘の船の形に似たり。八戒是を見て大いに安堵し、大哥々々能く船に似たりと雖も、槍篙なくては風を使ふに好しからず。行者是を聞きて、等て〳〵、我今帆柱を造り風を使はんとて、鐵棒を推取のべ、脊骨に押當

て突き上ぐれば、皮肉の間を差貫き、高く登る事五七丈なり。寔の船の桅杆の如く、大に疼み苦み、又原の道へ攔り廻りて下りけるは、唯風帆の船を走らしむるが如く、漸々に山を下る事廿五六里、終に嗚呼きて死したりける。行者鐵棒にて一方を突き破り、此穴より潜り出で、八戒と兩個にて尾先を取りて扯拏り歸る。却說駝羅莊の長者たちは、彼老人が家に集り、此兩人の和尚達も、又妖怪の爲に殺されたらんと案じ煩ひ居るところに、次の朝に到りて行者と八戒、大いなる蟒を扯拏りて歸り來りければ、衆位の老人たちを初めとして、一莊中の男女老少總て皆集り來り、彼大蟒を見て跪下いて行者を拜し、當下長老此妖怪を除きて我們が翌生を安んずる事を得たり、何を以てか此大恩を報いんとて、夫より只管に管待しつゝ五七日留めけれども、三藏師徒堅く辭して竟に別れて立出でける。衆位の老者たち金銀を贈れども、更に受けざれば沒奈何、只乾糧、菓品の類を贈りて餞別とし、個々遠く送り來る。七絕山に近づきければ、其惡臭鼻を穿ちて堪ふべからず。路徑も皆埋れて通り難し。三藏、行者を招き、此山怎麼して越ゆべけんや。行者鼻を覆ひて曰く、許多氣力を費しなば通ふ事を得べけれども、唯食を營むべき人あらず。衆個の老者是を聞き、我們既に大恩を蒙る、奈何程の日數を問どり給ふとも我們食を辨ずべし、何ぞ食を營む人なしと曰ふや。行者が曰く、然あらば汝等許多

の乾飯又は餅饅頭の類を備へ來れ、彼嘴長き和尚は足早し、彼に與へて大きなる猪となし此道を開かしめん。八戒笑つて、我猪となる事容易しと雖も、腹肥大きにして食を費さん、若ものを喰ひて滿ち飽きなば管ず事を辱へん。衆個の老人最易き事なりとて、追々人を走らせ、個々談合せて許多の食を贈り來りければ、八戒大いに歡喜びて、身を變じて巨大なる猪となる。頭より其尾に到りては長き事百餘丈、蹄より背に到りては高き事千尺餘。一莊許多の人々食を送り來る事其數を計りがたく、恰も山の如くに積み上げゝるを、八戒是を殘なく喰ひ盡し、上に進んで路を開く。一息に五丁八丁づゝの土を掘きのくる。許多の人夫は走り駈りて食を送る事絕間なし。八戒爾力を盡し、終夜道を開く。行者は師父を助け、沙僧は行囊を擔ひ、迹に續いて進みゆく。終に三晝夜にして七絕山を通り越え、師徒四人老者どもに別を告げ、急いて西方へ進み給ふ。

六八　朱紫國唐僧論二前世一　孫行者施二爲三折肱一

月往き日來りて、又夏の炎天に到り、三藏師徒四人一構の城下に到る。城の上に黃なる旗を建てゝ朱紫國と記したり。三藏の曰く、此處極めて一國の王城ならん、城に入りて關文を換ふべしとて、城

門に進み街を過ぎて會同館に到る。館を預る大使出迎へ仔細を問ふ。三藏合掌して、貧僧は東土大唐より西天に赴き、佛祖を拜し經を求むるの僧なり、今大國に來りて關文を換へん事を願ふ、大人よろしく國王に奏し給はるべし。大使禮を施し、且先爰にて歇み給へと四人を館中に招じ入れ、許多の官人に命じ齋を調へて種々と接待し、其後大使、三藏を伴ひ、國王の宮中に到り始終を仔細奏しければ、國王歡喜んで、朕今身に病あるに依て久く朝に臨まざる處、當下遠く唐僧の來る事誠に我が歡喜なりと、直に三藏を殿上に召して座を給ふ。三藏、國王に禮拜し關文を捧げゝれば、國王是を披き見終りて曰く、汝が大唐は今幾許の世を受け、君臣正しく明なるや、唐王何によつて死して又蘇生り、此大願を起し、汝に命じ、佛を拜し經を求めしむるぞ。三藏曰く、我が本國は往昔三皇世を治む、いはゆる大昊、炎帝、黃帝、是なり、又五帝嗣いで世を治む、少昊、顓頊、帝嚳、堯、舜、次に三王なり、禹、湯、武、此三皇五帝三王何れも聖明にして天下泰平なりしを、終に七雄朔を爭ふに到り、六國案の爲に併呑せられ、久しからずして天下漢の高祖に歸す、其後晉の司馬氏國家を保ち、宋、齊、梁、陳、隋の五代を經て四海皆我が唐朝に歸伏し、萬國靜謐四民安樂なり、我が太宗皇帝大德寬仁にして堯舜の風あり、今貧僧に命じて佛を拜し經を求めしむる謂れは、斯樣かやうの仔細なりとて、龍

神雨を過ちて天の罰を受け唐王に救を求めしか、魏徵夢に龍を斬る、彼龍祟をなして唐王冥土に赴く處、崔玨判官に魏徵書を贈り、再び蘇生りて陽門に返り給ひ、水陸大會をなして幽冥に謝し給ひし時觀音菩薩出現ありて大乘の妙經西方に有る事を示し給ふ、此故に貧道勅命を蒙りて四方に來れるなりと、仔細に是を語り給ふ。國王聞きて贊歎し、寔に天朝大國の風、君正しく臣賢なり、我今久しく疾有りと雖も、是を救ひ助けんと思ふ臣下一人も有る事なし。三藏是を聞きて國王の相貌を見奉るに、形容衰へ心神脫れたり、其病根を尋れ參らせんと思ふ處に、光祿寺の官人、唐僧に齋を侑めんと東しけるにぞ、國王、三藏を請じて相伴し、山海の珍羞を備へ心を盡して接待しけり。却つて說く、行者が輩三個は、會同館に在りて歇み居けるが、悟淨は飯を調へて菜を煮んとして鹽、醬油、酢なき事をつゝ。行者、八戒に向ひ、傭街に行きて買ひ來れと云へども、八戒躺椅にて動かず。行者菜な歇がんと思ひ謂つて曰く、彼街には燒餅饅頭、羊羹、砂糖餅、油食、蜜食、其外美味き物許多ありしを見ざるや、然らば吾行きて是を買ひといのへ、思ふ儘に貧用すべしと器を取つて立上れば、八戒口に涎をながし、哥々我も傭と俱に行きて彼品々を賞用せんと、兩個打連れ立ちて出で行きたるが、程なく鼓樓の下に到る。爰に限なき人群集して押合ひ揉合ひわめきけるにぞ、八戒是を見て、我們行く

事能はず、彼群集の輩我々が醜しき形を見ば、極めて怕れて逃げ走り、或は倒轉び又は踏殺しなど爲る事有らば、却つて我們を捉へて償命とせんと云ふべし、不可行々々と云ひて動かざれば、行者笑ひて、然あらば汝は爰に止まりて待つべし、我行きて物を買ひ來らんと云ひ捨てゝ走り行き、群集の中に分け入り何事にやと是を見るに、此處に一張の皇榜を張りかけて有り。一遍に十一人の大監、校尉札を守りて並み居たり。行者近倚りて是を讀む。其文に曰く、

朱紫國王諭。自レ立二朕業一以來、四方平服。近頃國事不祥、沈レ病伏レ枕、淹延日久難レ痊、本國大醫院未レ能二調治一。今此出二榜文一普招二天下賢士一。若有二精レ醫者一、請登二寶殿一療理。既躬稍得二疾痊一願將二社稷一穩平分。決不二虛示一爲レ此出給掛レ張須二至レ榜者一。

行者覽畢つて滿心歡喜び、我今醫生となつて慰むべしと思ひ、巽の方に向ひて一口の氣を噴き出しければ、乍ち一陣の旋風と起り、石を走らせ砂を飛しける程に、群集の人々驚き騷ぎ四方に散亂して逃げ去りけり。行者は隱身の法を遣ひ、彼榜文を引揭して立歸り、八戒が站ちし處に到りけるに、只見る、那獸子面を垣根に押當て睡り居たり。行者密にかの榜文をたゝみ、八戒が懷裡に押入れ、其後に捨置きて獨會同館に歸りけり。斯くて皇榜を守る處の大監、校尉、少時眼を塞ぎて有りけるが、昇

靜りて後頭を擧げて見る處に、彼皇榜を失ひたり。官人ども大に驚き、偖は當下の旋風に吹き去られしと覺えたり、疾く尋ねよと爰彼處搜し求むる處に、八戒が懷中より彼榜文半ば出でゝ有りけるを見付け、官人ども立かゝり、能く〳〵伺ひ看るに彼皇榜文に疑ひなし。頓て八戒を喚び覺し、汝皇榜を揭し持つからは定めて醫術に秀でたる者ならん、赴早萬歲へ奏聞せん、此方へ來るべしと引立つる。八戒は官人どもを見て大いに驚き怕れ、地上に跪下き倒れ、我那ぞ醫術を知らんや、且皇榜を揭じたる覺なし。官人の曰く、汝懷中する處の者皇榜にあらざるや。八戒頭を低れて懷中を見れば、誠に一枚の紙有り。押開き是を讀み、乍ち牙を咬んで詈り、偖は彼潑猴我を害する事斯の如し、我此榜を取りて怎麼とすべきやと扯破らんと爲る處を、官人們架住め、是は之當今國王の出し給ふ處の皇榜なり誰か扯破る事をなすべきや、汝既に是を懷中するからは、管ず能く療治するならん、疾く來つて皇帝の病を看よ。八戒が曰く、我が揭り來る處に非ず、我が師兄孫悟空と云へる者取り來る處なり。官人聞いて、倆亂話事を云ふものかな、既に皇榜倆が懷裡に有る上は、當下皇帝の殿前に連れ行くとも我們が誤ならず、汝速に來るべしと扯立て行かんとすれども、八戒大路に立定つて根の生えたるが如く更に動かず。衆位の官人ども圍繞きて、只管に連れ行かんとして爭ひ騷動したりける。此時兩個の

年老いたる大監進み出で、八戒に向ひて云ふやう、儞が相貌此國の人に非ず、聲音も又別なり、我等に東土より來る一個の和尚在りて朝門に入るを見たり、儞は彼和尚の徒弟ならずや。八戒聞きて、實に其如し、我が師父朝に到りて關文を換へんとす、我が師兄弟は會同館に歇み居れり。彼大監、衆位の官人に向ひ、儞們渠と俱に會同館に到るならば其端的を知る事あらん、爭ふことは不要なりとて往めければ、尤なりとて官人ども八戒と打連れ立ち會同館に到りける。此時行者は、館に會同館に歸り悟淨に向ひ、皇榜を把つて八戒が饅中へ入れ置きし事を語り、兩人手を拍つて笑ひ居るところに、八戒は衆位の官人どもと打連れて入り來り、行者を見て大に亂喚きて曰く、師兄、儞我を欺き街に連れ行き、皇榜を揭し來つて我に難爲をさせつるは奈何。行者笑つて敢て答へず。衆位の大監、校尉、行者に見え、一同に拜して曰く、孫老爺、我が國王緣有つて今日天より長老を降し給ふ、極めて醫術の手徽あらん、疾く〳〵三折肱を施して我が國王の病を癒し給ひなば、天下を分ちて鎭を與ふべし。行者が曰く、我醫術の手徽有るを以て帝王の病を治すべく思ひ、皇榜を揭つて我が師弟に授け置き、儞們を煩まで導引かしめたり、若し帝王親ら煩に來りて我を請待するならば、手の到る所皆ず病を除かん。大監是を聞きて校尉等を館中に殘し置き、趁早歸つて朝に入りて帝王に見え、此事を仔細に奏聞す。國王是を聞きて大に歡喜び、三藏に向ひ、聖僧幾位の高徒ありて那の一位か善く醫をなすや。三藏の曰く、貧僧三人の徒弟有りと雖も、俱に是山野の庸才、一個も醫をなす者なし。國王聞きて、密僧皆ず太謙し給ふ事なかれと。文文武の衆官を召して曰はく、寡人親ら彼處に到り唐僧の高弟を請待せんとは思へども、病有るによりて輦に乘る事能はず、儞等一個も殘らず會同館に到り、尊長老を請ひ來り朕が病を看すべし、儞們神僧、長老に見えば、君臣の禮を以て相見え、皆ず眼疎にすべからず。衆臣命を受けて大監と俱に打連れ、會同館に到り行者に見え拜をなす。行者當中に坐して端然として動かず。衆臣謹んで曰く、國王病に依りて親ら長老を迎ふる事能はず、臣等をして神僧を請待せしむ萬望は朝に入つて主上の病を療治し給へ。行者聞いて、既如此列位前行し給へ、我俱に隨ひ行かんと衣を整へ立出づれば、百官前行して、頃刻朝中に到り國王に奏しければ、國王尊顏を擡かせて行者が相貌を見るより大に驚き怕れ、戰々兢々龍床の上に倒れ給ふ。許多の女宮謹得てふためき後宮に助け入れ奉る。國王近士の人々を召して、彼和尚疾く歸らしむべし、我斯る怕怖き者に怎麼ぞ近くべけんや。近士の人々此故を行者に告ぐる。行者曰く、若我が形容を怕れ給はゞ、我來をかけて診脈せん。近士の官人又此由を國王に奏す。國王是を聞きて大に歡喜び、然らば其如くして疾く〳〵我が病を看

せよ。近士の人々行者を宮中に招きければ、行者則ち寶殿に登る。三藏、行者を叱つて曰く、汝滅鋏我に又難儀をさせんとするや、倆我に從ひてより以來未だ一度も醫を爲し事を見ず、況んや診脈に於てをや。行者笑つて曰く、師父敢て知り給はず、我種々の藥法ありて專ら大病を癒すべし、又絲をかけて診脈するに、病根知れずと云ふ事なしと云ひつゝ、手を延して毫毛を拔き三條の金糸と變ぜしめ、何れも其長さ二丈四尺二十四氣を象り、是を取つて三藏に見せしめ、暫ず煩悩し給ふなとて終に後宮にぞ進みける。

六九　心主夜間修二藥物一　君王筵上論二妖邪一

話表行者は、近侍に伴はれて皇宮内院に入り殿宮に到り、門外に立ちて三條の金線を官員に與へ、數へて是を聖躬の左の手の寸脈、關脈、尺脈、三部の上に著けさせ、線の頭を格子より引出させ、行者右の手に是を掣り、左の三指を以て寸、關、尺の三部の脈を試み、又數へて右の手三部に是を着けさせ、行者左の手を用ひて件一是を試み、終に毫毛を以て我が身に返し、高聲に察しけるは、陛下の尊惱左の寸脈强にして緊なり、關脈濇にして緩、尺脈弛にして沈み、右の寸脈浮にして滑なり、關脈

遲にして結、尺脈數にして牢なり、此病積懼くこと有るか亦は愁ひ思ふ事有りて積れるが故なり、是を名付けて雙鳥失群の症といふ。國王是を聞きて滿心に歡喜び、思はず聲を發して曰く、倆が看る處誠に明なり、早く藥を進めよれ。行者徐々として殿を下れば、三藏行者を待構へて君王の病を問ぶ。行者曰く、老孫國王の病を診脈し病根を悟れり、此故に國王我に藥を求め給ふ、疾く調へて是を獻せん。此時一個の醫官來り行者に向ひ、長老今何樣の藥種を用ひ給ふや、要に隨ひて擧り來らん。行者聞きて、怎生一方に限らん、藥を見れば則ち用ふ、何程にても把り來れ。醫官が曰く、藥は總て八百八味あり、一個の病に那箇盡く用ふる理有らん。行者聞きて、古人曾て云へる事あり、藥不レ執レ方合て宜く用ふと、此故に全く藥品を徵し、然して後加減すべし。醫官再び問答に及ばず、藥品製煉の品を會同館へ送り遣しけり。國王又三藏に勅して、聖僧は殿中に在りて我と閑談し給へと止め給ふ。行者師父に別れて會同館に歸り、八戒、悟淨に事の始終を說談り、三個晩齋を喫ひ終りて、夜半の頃に到り、行者先一兩の大黃を取つて悟淨に命じ細末せしめ、赤一兩の巴豆を取つて殼膜を去り、槌にて油毒を去らせ、八戒に命じて細末なさしむ。二個製し終りければ、行者一箇の花磁盞を八戒に與へ、汝此器に鍋臍灰(なべのそこのすみ)を半盞刮げ入れて來るべし。八戒頓て鍋臍灰を取り來る。行者又

花磁盞を八戒に與へ、汝是を以て白馬の尿を牛盞取り來れ。八戒呆れて、馬の尿を怎麼かするや。行者曰く、藥を丸ぜんと答へければ、悟淨笑つて、師兄病人を弄り者にして戲むや、馬溺鮮くして脾虛の個一般道を嗅ぐ時は忽ちに嘔吐せん、況んや巴豆、大黃、鍋臍灰の類を交へ用ひば、上には吐し下には瀉すべし、斯の如くして豈病の癒ゆる有らんや。行者曰く、我が白馬尋常の馬に有らず、渠は是元東海龍神の化身なり、仙が便溺を用ふる時は、奈何なる病なりとも癒えざる事なし。八戒是を聞きて畢に白馬の傍に至り器を持つて待ち伺ひ、半時ばかり過せども馬更に尿をせず。沒奈何て立躊り、行者に向ひ、大哥々々、今帝王の療治する事を止めて白馬の療治を先にせよ、遣所乾結して一滴の尿も下さず。行者聞きて、獸子亂嚷を止めよ、然らば我行きて取り來らんと器を取りて白馬の前に到り、少時の間に尿を取り來り、藥種を搔交ぜて三粒の丸藥となし器に納め、其夜は個々歇みけり。斯くて天明くるに及んで國王衆臣を宣し給ひ、俱們急ぎ孫長老が方に到り藥を受取り來るべし。衆臣命を請けて會同館に到り、行者に見え拜して藥を求む。行者彼丸子を納れたる器を官員輩に與へて曰く、此丸子は是烏金丸と號く、無根水を以て用ふべし。群臣曰く、無根水とは奈何なる物ぞ、我們是を知らず。行者曰く、地に有る處の水悉く根有り、只天上より降りて未だ地に落ちざる處の雨水、是

無根水と名く。群臣拜謝して朝に歸り、彼丸子を獻りて行者が教を述べければ、國王卽ち常駕官を喚んで雨を求むべき法を談じ給ふ。此事會同館へも告し越し給ふ。行者是を聞きて急に印を結び呪語を唱へければ、忽ち東の方より一朶の烏雲一群起り、會同館の上に到り、雲中に聲有りて、東海龍王敖廣、大聖の宣し給ふに因て來れり。抑々何等の幹事有りや。行者曰く、今朱紫國王病あり、藥を與ふるに些の無根水を求めんと欲す、汝聊か雨を降して渠に與へ藥を服ましめよ。龍神聞いて曰く、大聖の呼び給ふに依て那幹も辨へず參りたれば、雨を降すべき器一品も持ち來らず。行者が曰く、許多の雨を求むるに非ず、只些の藥を用ふる程有らば幹足れりとせん。龍神曰く、既如斯我些の唾を吐いて渠に藥を用ひしめん。行者滿心に歡喜び、最好々々。龍王是を聞き又烏雲を起し、皇宮の上に到りて一口の唾を吐きければ、化して甘霖水となりて降り下る。宮中文武の官員、後宮の官女ども是を見て、手々に器を捧げ庭上に立出で、彼雨を受け入れける。一時許にして總て是を一集にして一個の器に納るゝに、許多の無根水を得たり。國王歡喜んで彼烏金丸を三度用ひければ、俄に腹中鳴り響き酒下する事夥しく病根殘らず下し終り、些の米飮を食し氣を養ひしに、少頃して心胸寬豁して衛骨調和し、脚力强健なり。龍床を立つて朝服を着じ、殿上に出て三藏に見え、身を倒して拜をなし、

趁早官員に命じて行者が輩三個を宣し來らせ、大に酒宴を安排して師徒四個を接待し、國王を初めとして文武の百官、后宮の宮女、都鄙の人民に到る迄、歡喜の聲止む時なし。行者重れて、老孫昨日陛下の脈を診するに、深く病の因を疑ふ、是を非に請承る事を得んや。國王曰く、家の醜は外に露すべからずと云へり、然れども神僧は我が命を救ひし人なり、那ぞ雅匿さんや、寡人元來深く愛する處の金聖皇后と云ひし美人有り、三年前端陽の節我が花園の裡に海榴亭と云ふあり、爰に皇后と俱に角黍を食ひ酒を呑んで樂み居たりしに、忽然として一陣の風吹き起り、一箇の妖怪現れ出で、自ら名宣りて曰く、我は是麒麟山の獅駝洞に居住する賽太歲大王といふ者なり、儞が金聖皇后美人なる事を聞き及び是を得んが爲來りたり、早く我に其皇后を與へよ、儞與へざる時は先儞を食はん、其後一國の人民總て皆喰ひ盡すべしと詈る。我其時命惜むには有らざれども、卵なき一國の人民を渠が爲に亡されん事悲く、奈何とも可爲やうなく、終に金聖を亭の外へ押し出したれば、彼妖怪乍ち皇后を攫り將きたり、我此爲に怕き怖るゝ事少からず、又彼角黍の類腹中に止滯り、且皇后の事を愁ひ思ひて日夜是を忘るゝ事なし、此故に深く病を得て三年に及びし處に、神僧の良藥を服して忽ち病癒え、當下本身に復る事是皆唐僧の賜なり。行者聞いて。今金聖皇后を此國へ返したしとは思ひ給はずや。國王涙

を流して、云ふにや及ぶ、我此事を思ふ事切にして、夜と無く晝となく憧々として戀思ると絶間なし然れども一個として彼妖魔に敵すべき臣下なし。行者聞いて、我陛下の爲めに此妖怪を退治し、皇后を此國に歸らしめば奈何。國王是を聞きて、倘然もあらば此國を儞に讓り帝王と稱し、我は臣下と成らん。行者又曰く、妖怪皇后を提行きて後一向に音耗なきや。國王曰く、他先年五月金聖皇后を提り行きて、又十月に到り、兩個の宮女を皇后の宮住に爲んと求めし故、又兩個の宮女を遣したり、去年三月亦來りて二個の宮女を要り行き、七月重れて二個を要り去る、今年二月亦來りて二個の宮女を要れ去きたりと、嗣も未だ終らざる處に、南の方より一陣の風吹き發りければ、國王初め文武の百官驚き慌得て、妖怪また來れりと呼はり叫び、皆奥宮へ逃げ匿る。三藏は國王と俱に身を匿す。八戒、悟淨も逃げんとするを行者扯住め、儞等少時爰に在りて妖怪を伺ひ見よと制すれば、二個は沒奈何行者と俱に立定りて虛空を睨んで立つたる處に、乍ち黑雲の間に焦面金睛の妖怪現れたり。行者二個に向ひ、汝等爰に在りて待つべし、我先妖怪に對面せんと觔斗雲に飛び乘りて空中にぞ升りける。

七〇 妖魔寶放二烟沙火一 悟空計盜二紫金鈴一

却說行者は鐵棒を持つて、空中に立つて大聲に喝つて曰く、彌何里より來れる妖怪ぞ。彼妖怪等を勵して曰く、我は是別人ならず、乃ち麒麟山獅駝洞賽太歲大王の部下の先鋒なり、今大王の命を受けて爰に來り、宮女兩個を把り行きて金聖娘々に侍御せしめんとす、抑々又彌は何的なれば斯く妨逆を做すや。行者答へて曰く、我は乃ち齊天大聖孫悟空なり、我が師三藏法師西天に往きて佛を拜し經を取り給ふ路上、此國を過る處に、彌等が惡業を聞いて片腹痛く、此國に荷擔して退治せんと思ふ處に態々其方より來つて我に命を送る、不便なりと呼はりければ、妖怪大いに怒り、有無を言はず長き鎗を取つて突いてかゝるを、行者は鐵棒を揚げ相迎へ、空中に在つて戰ふ事二三合、彼の妖怪、行者が棒を架外して長き鎗を兩に折られ、慌忙く風に乘つて西方へ逃げ失せたり。行者尋て是を追はず、雲頭より下り來り叫んで曰く、師父請ふ陛下と同く來り給へ、妖怪は逃げ失せたりと呼はりければ、唐僧は君王を扶けて同く穴を出て來りて見れば、滿天晴朗にして絕えて妖邪の氣なし。國王大いに歡喜び、また筵宴を設け、自ら壺を拿げ金杯を把つて行者に進め、神僧の妙力誠に感謝するに堪へず。行者杯を接りて未だ挨拶に及ばざる處に、乍ち告げ來る。西の朝門の外に出火起れりと。行者聞くより持つたる金杯を酒有る儘に空中に投げ上げゝれば、磕的と音して杯は地に落ちたり。國王慌忙く

問うて云く、大聖何ぞ杯を投げ給ふや、我が處爲に腹立つ事有りてか、煩心なりと曰へば、行者獨笑つて答へず、晏然として在りける處に、又一個の官員來りて報じて曰く、當下西の朝門の起火俄に一場の大雨降り來りて盡く消え滅せ候、然るに彼大雨、街中を流るゝ水、總て甚く酒臭く候と云ふ。此時行者曰く、是は彼妖怪西方に逃げ去きたるを、我會て他を逐はず、依て彼妖怪火を起したるものなり、老孫國王の賜はりし一杯の酒を投げて即ち妖火を滅めし救ひたり、西の朝門の市街までも何の別條あらんや。國王十分歡喜び、猶百倍の敬を加へ、三藏四個を賓殿に請ひ上らせ、万望唐僧に國を讓りて天子と做さんと云ふ。行者笑つて曰く、未だ半々其處に到らず、彼賽太歲大王部下の妖怪ども不多時押寄せ來るべし、我今這方より逆寄して、空中に於て擒にし來らん、不然ば許多の百姓を騷がせ陛下をも驚かし奉らん、唯這方より推掛けて金聖皇后を取回し來らん、但知ず彼山洞までは行程幾許か有るやらん。國王曰はく、寡人曾て那里の里數を聽くに、往來五十餘日多少三千餘里あり。行者聞きて八戒、沙僧に向ひ、彌等師父を護持して爰にあれ、我は那地に赴かんと云へば、國王扯住めて、神僧且寛々支度し給へ、些許の安排をも侑め乾糧盤纏も進らすべし、又快馬一疋を進らせん、是に跨つて旅立ち給へ。行者笑つて曰く、陛下の命事甚だ巴山轉嶺步行、三千里許の行程は烱酒を斟

んで不覚間に往回すべし。國王聞きて大に呆れ、僧は孫猴の如くなれども怎生這般の法力あるや。

行者曰く、

我身雖是猿猴類一　自レ幼打二開生死路一
福訪二明師一把レ道傳　山前修煉無二朝暮一
倚レ天倚レ鼎地爲レ爐　爾般藥物關二烏兎一
採二取陰陽水火交一　時間頓二把玄關悟一
全仗二天罡搬運功一　也憑二斗柄遷移歩一
退レ爐進火最依レ時　抽レ鉛添汞相交顧
撥簇五行造化生　合二和四象一分二時度一
一氣歸二於黃道間一　三家會在二金丹路一
悟二通法律一歸二四肢一　本來勅斗如二神助一
往來青漢一沒遮攔　一打十萬八千路

國王此詩を見て且驚き且歎び、許多かち吟じ、一杯の酒を着つて行者に與へ、神僧遠國へ旅立ち給

ふ骨折か謝せん。行者一心唯妖怪を降伏せんと思ふのみにて、速に一杯を喫し、空中に向て吻吟と一聲、寂然として形は見えず。一國の君臣上下唯奇異の思ひを做しぬ。斯くて行者は觔斗雲に打跨りて快くも一座の高山に到り、則ち下りて崖巒に在つて仔細を得と觀ひ、正に洞口を尋ねんと欲する處に只見る此山の凹なる處より烘々と火の光飛び出でたり。雲時に天を撲つ紅焰あり、又紅烟の中に一條の惡烟を冐ひ出す。此火甚だ毒火と見ゆるにぞ、大聖自ら恐懼せり。又此山中に一道の沙を迸り出して眞に天を遮り日を蔽ふ。行者見れども一向に其故を解たず。頓て身を變じて一個の猢猻子と成つて烟火の中に飛入り、蓦却蓦に駐回り、烟火、沙灰を吹き散らし、漸々烟火開けて本像を現し下りて見れば、只叮叮噹々と銅鑼の聲を聽く。此處は是妖精の巣穴に非ず、銅鑼の聲は是兵を布くの銅鑼、想ふに是通國大路に兵を出すこと有るならんと猶急ぎ行きける處に、忽ち一個の小妖兒、黃なる旗を立て、背上に書簡を帶びて銅鑼を敲ちながら走る事飛ぶが如くなり。行者又身を變じて一個の道僮となり、頭は双抓髻に結ひ身には白衲衣を着し、手に木魚を叩き口に道情詞を唱へ、山坡を轉りて彼小妖的に行迎ひ、稽首んていふ。長官那里へか行き給ふや、又持ち給ふは怎麼の公文なるや。小妖的銅鑼を打ち止め笑つて禮を返していふ、我が背上に負ひしは朱紫國へ送る戰書なり。行者曰く、何

故に戰書を送りて鬪はんとし給ふや。小妖的が曰く、我が大王三年以前朱紫國に到りて金聖皇后を奪ひ來り、園の樂に爲さんと思ひしに、一個の神仙來りて一件の五彩の仙衣を皇后に與ふ、是を着給ふに總身總て針刺を生じ、我が大王敢て摸てゝも見る事能はず、但些少も手を著くれば手心疼みて堪ふべからず、此故に三年の今日まで未だ身を汚さず、大王沒奈何又朱紫國より外の宮女二個を奪り來り竟に弄み殺し、其後又二個の宮女を弄み殺し、今年又奪りに遣りしを、今般は孫行者が爲に打破れて宮女を奪ひ來らず、此故に大王大いに怒つて彼國を攻亡さん爲、我をして戰書を屆けしめんとすなり。朱紫國王若戰はずして美人を送りて和睦せば造化也、戰はゞ管ず利あらじ、我が大王烟火飛沙を以て攻め給はゞ、彼國王臣下を首め百姓等に到るまで、一個も活きる者有るべからず、其時は我が大王は朱紫國の天子と爲り、我們は臣下と做るべし、然れば明日は合戰なり、快く戰書を屆くべしと云ひ捨てゝ走り行く。聞き終つて行者鐵棒を拿り出し、小妖的が後身より唯一打に打ち殺し、足を把つて澗へ扯下さんとする時、只聽く、磕的と一聲響きて金を摺りたる牙牌落ちたり。牌上に文字あり。曰く、心腹小校、一名有來有去、五短身材乾撻臉無鬚長川懸掛、無牌即假。行者是を見て打笑ひ、此小妖的名を有來有去とよぶ、然るに今一棍に打ち殺されて去有つて來なしと云ひて牙牌を取つて殿に

付け、銅鑼と旗とは草叢に藏し置き、戰書を取つて袖に納れ、忽ち又烟火の毒を思ひ出し致て洞門を尋ねず、有來有去が骸を鐵棒に拴り着け、其儘空中に飛び昇り、徑に本國へ歸り、且一個の頭功の手柄を賞報べしと、吻冷と發聲して朱紫國に歸り金鑾殿に到り、彼一封の戰書を三藏の袖の裡に推入れ收置て、師父且國王に見せ給ふなと云ひ終らざるに、國王、殿を下りて行者を迎へとり、神僧快く降り給ひたり、偖妖怪の動搖は奈何。行者地上に指して、那階下に妖怪を打ち殺して置きたりと云へば國王是を見て、是は這賽太歲に非ず、賽太歲は寡人親く認得りたり、身尺凡一丈八尺許、面金光有りて聲霹靂の如し。行者曰く、是は這一個の報事の小妖的なり、且血祭に打ち殺し來りて手始の功を告げ奉る。國王大に歡喜んで、好し〳〵、神僧一度出でゝ速に功を奏し返り來る、實に神通力なり、先先酒を烱めて其功を賀し奠さん。行者曰く、酒宴などは且置いて我第一に陛下に問ひ奉らん、金聖皇后と別れ給ふ時甚麼なる表記をか取交し給ひしぞ。國王表記の二字を聞くよりも心劃るゝ思ひにて、堪へ兼て涙下り、只管泣いて謂げて曰く、

當年佳節賀二朱明一　太歲凶妖忽震レ聲
强奪二御妻一殊倉卒　難留二表記一繫二離情一

是を聞いて行者曰く、娘々既に表記なし、然らば彼の君宮中に在りし時、甚麼か身に換へて愛し給ひし物有るべし。國王曰はく、是を問ひて怎麼か爲るや。行者曰く、彼妖王實に神通有りて當り難し假令能く是を爲果せたりとも娘々我が面を認得らざれば、朱紫國の使と云ふとも敢て信じ給ふべからず、是に依て彼娘々平日に心に愛し給ひし物一個を見せなば、是なりとして信じ給ふべし、其爲に齎ち行きたし。國王の曰く、昭陽宮の裡梳粧閣上に一雙の黃金寶串あり、是金聖帝に帶ぶる處の物なり彼奪はれたる日は端午の節會なれば纏命五色の絲を臂に懸くるに依りて脱いで有りたるなり、是のふ他が常に愛せし的なり。行者曰く、然らば其金串を老孫に賜はり候へ。國王遂に玉聖宮に人を遣はして是を取り出させ、見るより國王忽ち涙下り、最愛しや娘々と幾聲泣いて遂に行者に遞與し給ふ。行者是を臂に懸けて功賞の酒も呑まず、觔斗雲に打跨りて吻唷と一聲、又去つて麒麟山へぞ走り到る。頓て洞府を尋ぬるに、只人語の喧嚷を聞き、竚立みて睛を凝し觀看れば、原來獅子洞門の口にて大小の頭目あり、約摸五百名餘爰にありて保守り居たり。行者是を見て頭回し、舊路に到り、嚮に小妖的を打ち殺したる處に到り、黃なる旗と銅鑼を搜し出し、即ち身を變じて有來有去が像と做り、徑に前み行き、獅子洞に到れば、猩々出でゝいふ、有來有去、倆回り來らば快く行け、大王は剝皮亭上に

在りて倆が待ち給ふ。行者又銅鑼を鳴らして二の門を入り、忽ち頭を擡げて一座を見れば、人の愚明かにして亭子の中間に一張の紅金の交椅あり。椅子の上に端坐する魔王あり、生得惡像なり。行者見ながら傲慢にして些の禮をも做さず、外看して只管銅鑼を敲き居る。妖王問うて曰く、倆來れと云へども行者答へず。又問うて、有來有去倆來れと云へども倘答へず。妖王堪へ兼て上前出で扯住めて曰く、倆怎麼ぞ答へざるや。行者曰く、元來我不去と思ひしを、大王却つて那里に我を遣したり、行きて見るに限なき人馬陣勢を張りて、我を見るより推へつ扯きつ、遂に捉へて城の内に擁ぎ込まれ、彼國王我を見て則ち斬らんと云ひしを、幸に兩班の謀士ありて曰ふ、兩家相爭ふ時來使を斬らずと、遂に我を饒し戰書を收めて城門の外に押出し、三十杖鞭打たれ今放たれて還り候、彼動靜にては遠からず那里より逆寄に來り戰ふべし。妖王曰く、然らば彼國多少の人馬ありや。行者曰く、我甚だ疎き昏みて多少の人馬有りしか深く覺えず、唯彼國は兵器森々と羅列すること麻の生ひたるが如し。妖王笑うて曰く、假令那程の兵器有りとも、我が寶貝紫金鈴を打搖つて烟沙火を飛ばし、彼國を塵に爲すべきなり、倆は今より後宮に往きて金聖娘々に報げんに言ふべき事あり、他既に我が彼國を攻めんと云ふを聞きて泣き悲みて在るなり、倆往きて今見て來し通り、彼國人馬驍勇にして曾ず此國に勝たん

といへ、且々一時他が心を寛むべし。行者聞きて僞濟したりと思ひ、此事十分中意とて、則ち脚門を過ぎ臆堂を越え、見れば、此邊總て大厦高堂、此前邊の模樣とは大に替れり。直に後邊の宮裡に到れば、宮門の壯麗なる、是則ち金聖皇后の住み處なり。裡に入りて見れば、兩班の妖狐、妖鹿、個々總て美女の形に變じ粧ひて左右に侍立せり。中間には金聖娘々手づから香醪を托げ、双眸滴る涙果然たり。玉容寂寞胭脂冷、雲鬢蕭疎翠黛空、自古紅顏多薄命、懨々無レ語對二東風一。行者上前みて、言稟さんと云へば、金聖娘々の曰く、這潑妖的十分無禮なり、思ふに我今まで這樣なる妖的を見ず、是怎麼なる野獸なるや。衆婢上前み出でゝいふ。娘々怒を止め給へ、他は是大王爺々腹心の部下、名は有來有去と喚ぶ的也、今般朱紫國へ戰書を送り給ふ使に行きしなり。金聖些怒を忍び問うていふ。傭戰書を下して曾て朱紫國へ到りしや。行者曰く、老孫戰書を持ちて徑に金鑾殿に到り、面頭國君に見え候。金聖曰く、傭國君に見えて君王何と曰ひしぞ。行者曰く、彼戰鬪の事は既に大王に報上げたり、婦人に聞え上ぐるに及ばず、唯那君王娘々的の事のみ思想り言傳の一言稟し上げたし、然し左右の人の聞くを奈何。金聖是を聞きて兩班の妖狐妖鹿を退け行者を近寄け給へば、行者前倚りて本像を現し、金聖に向ひて曰く、娘々我を怕れ給ふな、我は是東土大唐より西天に往きて佛に見え經を求む

る和尚にて、孫悟空と呼び做せり、我が師父傭の國中を過るに依て、關文を換へんとせし處に、傭の妖王に攝り去られ給ひし事を聞き、國君の央に依て一般尊躬を救ひて國に歸し參らせんとす、依て彼使者有來有去と變じて爰に至り候といふ。金聖倘沈吟して疑はしき面色なれば、行者那寶串を取出し進らせければ、金聖見るより涙を發々と流し、座を下りて拜し、長老果して我を救ひ國に歸らしめ給はば、大恩死すとも忘るべからず。行者曰く、些も費心有るべからず、但し此國に有る處の火を放ち烟を出し沙を降す的是怎麼の寶貝ぞ。金聖曰く、那は是三箇の金鈴なり、彼一個を持ちて打搖れば三百丈の火光發つて人を燒く、第二を搖れば三百丈の烟火發つて人を燻らす、第三を搖れば三百丈の黃沙人を迷す、烟と火は遥りて不打緊と雖も、唯彼黃沙最も人に害なり、倘鼻の孔に入る時は乍ち命を失ふなり。行者曰く、利害利害、我曾て斯る鈴ある事を知らず、其金鈴今何處に有りや。金聖曰く、如然寶貝なれば、大王常に腰に帶して行住坐臥身を放たず。行者曰く、傭倘故郷へ還りたく思ひ給はゞ忍へて大王の心に從ひ、欺して彼金鈴を預り給へ、我是を取り匿して後傭を國に歸すべし。金聖聞いて、是理なり、我能く他を欺いて預かるべしと歡喜びて還嗣に從ひ給ふ。行者は原の有來有去と變じ、左右の侍婢を呼び出せば、金聖態と、有來有去、早く大王を請じ來れ。發と應へて行者則ち剃頂

亭に到り、妖王に向ひて曰く、大王、今日は娘々萬望尊臨を願ひ給ふなり。妖王大いに歡喜んで曰く娘々常に我を罵り喚く、怎麼なれば今日斯く熱懇に我を招くや。行者曰く、彼朱紫國の事を問ひ給ふ故、我態と僞つて、彼國王最早別に皇后を冊きて寵愛盛んなりと說話り候へば、娘々今は甚ふ心も沒め果てゝ、直に我に命じて大王を請じ奉るなり。妖王是を聞きて歡喜び、俺は實に大功的なり、我彼國を得ば俺を以て太宰と爲すべし。行者此言に從ひて恩を謝し、夫より妖王と俱に後宮に到れば、金聖有歡顏色にて出迎へ、手を把つて相攜れ給へば、妖王曰く、亦娘々の身に障らば我身の痣まん事を怕るゝなりと云へば、金聖曰く、怎麼左樣の事を曰ふや、且座に請き給へ、我君に說話あり、大王我を愛し給ふ事久しと雖も、未だ枕を俱にせざる其仔細は、我朱紫國に在りし時は、外國よりの貢物其外何に依らず大王先看終りて我にも看せ、我預りて收め置く事なり、此國にも三箇の紫金鈴とか云へる寶貝ありと聞きぬ、大王我には僞覺も爲給はれば看せも爲給はず、況や尙預けは爲給はじ、借老の契を做す我に匿し給ふは、然りとては薄情し、此故に我尊意に從はず、男といふ者は疑ひ深き者なりと恨み泣きて曰ひければ、妖王忽ち歡樂と成り、態と大いに笑ひて曰く、娘々管ず恨むる事なかれ、我が寶貝は腰に着けて則ち道に有り、今日當に俺に收預くべしと、則ち衣を揭げて鈴を把出すを、行

者は後邊に在りて眼も轉たず看著ひ居たり。妖王兩三層の衣服を揭起げて、三箇の金鈴を取りて些の木綿を以て口を塞ぎ、一箇の豹の皮の包袱兒に包み、金聖に遞與して曰く、能く〳〵心を用けて藏め置き給へ、必ず是を搖し給ふな。金聖是を受取りて、我良納處ありとて化粧殿の上に藏し置き、小的を呼よせ酒肴を按排し來らしめ、金聖は益々妖嬈なる態をなし妖王に着精靈く。行者其間に粧臺に近き、彼三箇の金鈴を拿つて輕々と持出し、宮門を出でゝ剝皮亭の前なる人無き處に到り、豹の皮の袱包を開き見れば、茶鍾の大きさなる金鈴三箇あり。木綿の裁布を以て其口を塞ぎたり。行者利害も知らず、彼木綿の塞を三箇一齊に扯了きければ、乍ち一聲の響有つて烟沙火の三箇の的一齊に迸る。悟空急に是を收むる事を知らず、亭中烘々として火起り、紅光天地に耀けば、小妖的周章て大王に告げ來る。妖王驚き飛んで來り、能く〳〵見れば有來有去金鈴を盜み來りて爰に在り。妖王大いに怒り已殘奴大膽、我が寶貝を盜みたり、小的ども快く拿へよと呼はりければ、小妖的の者ども是を聞き一齊に打つてかゝる。行者は金鈴を投げ捨てゝ本像を現し、金箍如意棒を掣つて打つて廻る。妖王は寶貝を取收めて門々を嚴く關固め遞さじと取卷きければ、行者は遁れ出づるに道なく、鐵棒を收め身を變じて蒼蠅兒となり、火の無き處の壁上に住り其動靜を伺ひけり。小妖的、行者を見失ひ、限々を尋

れ搜せども不知、妖王是を聞いて斯く門々を緊く鎖したるに、那處より逃げ失せけるや、抑菜は那的なれば大膳にも有來有去と變じて我に朱紫國の返答を告げ、機に乘じて寶貝を奪ひたるや、既に這山の上に在りて烟火を放ち、風に吹かるゝ事ならば我到底當ふべからず。先鋒白文豹が曰く、必定是は孫悟空なるべし、想ふに必ず路上にて有來有去に遇着ひ彼を殺し、銅鑼と旗とを奪ひ取り、然して有來有去に變じ來り大王を欺きしものならん。妖王是を聞きて點頭き、正是正是、偖が云ふ處有理なりと小妖們に分付けて仔細と尋れ搜させ、門々緊く保守せけり。

七一　行者假レ名降二怪狲一　觀音現レ像伏二妖王一

斯くて行者は壁の上に住り居て是等の事を聞き濟し、又輕々と飛んで後宮に到り、金聖皇后の裳の上に止り動靜を伺ひ居たりける。是時金聖は、行者が仕損じて生死も知らず成りし事を聞きて大に驚き、机の上に打伏して朱紫國の方を拜し、淚を流し、君王自妾を救はん怪神僧に命じ遣し給ふ、然れども神僧事を誤ちて生死も知らず、更に又妖怪に悟られなば、此事を恨として此上の艱難計りがたし偖生ぞ本國に歸りて鸞鳳鴛鴦の契を全うする事を得んやと聲を殺ちて歎き給ふ。行者是を聞きて、皇

后歎き給ふ事なかれ、我未だ死せず、唯我性急なる生れにて、寶貝を奪ひてより心の裡に忍びがたく是を開き見しに、計らずも烟沙火起り終に事を仕損じたり、皇后今一度渠を欺き遣れ來り、酒を備めて睡らしめよ、我又別に謀計を廻らし寶貝を奪ひ取らん。金聖驚き怕れ、神僧偖那處に在りて斯くの如く說話するや。行者笑つて、我偖の髮の上に蒼蠅兒となりて住りたり。皇后早く身近き丫鬟を一人呼び出し給へ、其姿に變じて妖怪を欺くべし。皇后あやしみ疑ふと雖ども、渠が旨ふに任せ一人の侍婢を呼び出す。其名を春嬌といふ。是玉面狐の妖精なり。召に應じて皇后の前に出て跪下き、娘々今何幹有りて召し給ふや。金聖が曰く、我今大王を請じて安寢せ遣せんと思ふなり。春嬌心得、七八人の小妖的を呼び出す。何も兎鹿の妖精なり。手々に灯火を秉つて出で來る。行者、皇后に敎へて立上らせ、一根の毫毛を拔きて睡蟲と變じさせ、春嬌が面に放ちければ、此妖怪忽ち睡くなり、一遍に倒れて臥しけるにぞ、行者は其骸を物陰に押込みおき、自已春嬌が姿に變じ、許多の小妖的を引列れ大王の前に至り、金聖娘々大王を迎へ奉らんとて爰まで來り給へりといふ。妖王聞いて出迎へければ、皇后の曰く、當今は烟火も消えて偸人も逃げしと聞く故、大王を迎へて安寢せ遣らせんと御迎に參りしなり。妖王滿心に歡喜びて、皇后珍重なり、彼盜人は孫悟空なり、我が部下有來有去を殺し、夫に

變化し來り寶貝を奪ひ取らんと爲しを、我幸に早く見咎め寶貝は取返したり、然れども這所いかに尋ぬれども跡方も見えず、此故に未だ安心する事能はず。皇后聞いて、悟空は神通ありとか聞けば、疾く逃げ失せしものならん、大王我心ひ思ふ事を止めて、後宮に入つて安寢み給へ。妖王、皇后の懇に迎ふるを見て固く辭するに及ばず、小妖的に分付けて、倆等堅く要心せよと、終に皇后と打連れて後宮に到りければ、皇后筵宴を設けて大王に進むる。行者は假に春嬌と成つて酌を把つて大王に酒を强ひて醉はしむ。皇后また專ら說的是夫妻話をなし、只管酒を勸むれば、大王骨軟え筋痲れて、只管皇后の身を任せざる事のみ悔恨いふ。皇后、大王に向ひ、樗程の寶貝は曾て損じ矢はざるや、今は那處に置き給ひしぞ。大王聞いて、彼寶貝は天地開闢以前より鑄なしたる處の物なれば、奈何ぞ損する事有らん、我今腰に帶びおきたり。行者一邊に在りて聞きも敢ず、手を延して一撮の毫毛をぬき、變じて數千の虱となし大王の身に放ちければ、衣帶の透間より潛り入り、浪亂に總身を咬ひけり。大王痒き事堪べがたく、手を懷に入れて痒き處を探り、手に任せて捻り出し、燈火の下にて是を見れば、則ち數千の虱なり。皇后笑つて、大王の襯衣思ふに久しく漿洗し給はず、此風を生ぜしならん。妖王大いに慚愧りて、我從來此蟲生じたる事なし、計らずも今宵醜を出したり。皇后笑ひて曰く、大王何ぞ

是を愧とし給ふや、帶言に曰ふ、皇帝身上三個御虱有と、左右且脫ぎ給へ、自ら是を捉り捨つべし。妖怪終に帶を解きて衣服を脫ぐに悉く虱なれば、覺えず襯衣も脫ぎ捨て赤裸になりける時、腰に帶けし金鈴の袱包にも虱多く着住り居たり。春嬌一邊に在りて是を見て、大王金鈴の上に虱多きこと計りがたし、我是を取り捨て進ぜんといふ。妖王怎生ぞ賢春嬌なる事を知らん、急ぎ金鈴を解きて春嬌に遞與す。行者是を受取りて態と靜に虱を尋ぬ。妖王は皇后と俱に頭を低れて衣服の虱を捉り捨て居たり。行者よき間ぞと又三根の毫毛を拔き取り、變じて金鈴となし、豹の皮の袱包まで些少も遜はず變じさせ、眞の金鈴は我が袖裡に匿し置き、虱に變じ、毫毛を取つて身に返せば、數千の虱忽ち失せて殘らず拾ひ捨てたる如し。大王衣帶を着しければ、春嬌賢的の金鈴を大王に捧ぐ。妖王是を把つて又腰に帶け、我皇后と俱に喪ん事を思へども、那刺針にさゝるゝ事を怕る、我西宮に歸りて心安く睡るべしと、皇后に別れ西宮に赴きけり。行者は春嬌が面に放ちたる睡眠蟲を身に返し、皇后に寶貝を奪ひし事を語り、頓て本國に歸し奉らんと云ひ置きて、隱身の法を行ひ、解鎖の法を以て門々を開きて走り出で、門外に立つて高聲に呼はつて曰く、賽太歲早く金聖皇后を返せと叫ぶ。小妖的是を聞きて驚き看れば門々殘らず開きたり。慌得て〻門を堅く關し、宮中に入りて斯くと報ず。宮女是を通ずれど

も、妖王酒に醉ひて目覺めず。左右する間に天曉に到る。行者門外に在りて只管罵り、終に鐵棒を擧つて洞門を打ち破り入らんとす。妖王此物音に睡を覺し、門外に跳り出で、行者を見て大に怒り、偖那嘶なれば爰に來り我が門を破りたるぞ。行者罵つて曰く、偖潑妖怪眼大いなりと雖も我を認得らず我は是齊天大聖孫悟空なり、金聖皇后を把返さん爲爰に來つて偖を亡滅すなり。妖王同じく罵つて曰く、偖は唐僧に從ひて西天に行き經を求むると聞きつるに、怎生ぞ今朱紫國の奴となり、爰に來りて死を求むるや。行者大に怒り、說話不知の潑怪的、今朱紫國の王家我を以て父母神明の如く尊む、何ぞ嘶になるべきやと、鐵棒を把つて打つて懸る。妖王宣花斧を持つて應り合ひ、五十餘合戰ひしが、妖王不當とや思ひけん、忽ち風頭の方に飛退き呼はつて曰く、孫悟空少時待て、我今偖と戰はずして金鈴を搖りて見すべし、偖逃ぐる事を止めて見物せよ。行者曰く、我も又金鈴を搖りて見すべし、偖逃ぐる事を止めて見物せよ。妖王曰く、偖が方にも金鈴有りや、抑那邊より傳へ受けしぞ、其譯を聞かん。行者曰く、且偖が金鈴の譯を聞かん。妖王曰く、我が此金鈴は大淸宮八卦爐中にして太上老君の久く煉鍛へし金を以て作り給ふ處の金鈴、最も無上の至寶なるを故あつて我に授け給ひしなり。行者曰く、我が此金鈴も偖が云ふ處と同じ、然れども偖が金鈴は雌なり、我が金鈴は雄なり。妖怪曰く、

是は仙家金丹の寶貝、何ぞ雌雄の有るべきぞ、偖且搖つて見せよ。行者曰く、偖且先へ搖るべし。妖王嘲弄つて頓て金鈴を取り出し、先第一の鈴を打搖りけるに、更に火出づる事なし。妖王驚き、又第二の鈴を打搖るに烟發らず。益々慌得てゝ第三の鈴を振搖せども、又更に黃沙起る事なし。妖王驚き怪みゝ、偖は我が此金鈴疑に雌にして、雄に逢ひて怕れて烟火を發せざるや、怎麼はせんとぞ回首きけるを、行者喝々と打笑ひ、然らば我が金鈴を振つて見すべしと、三箇の金鈴を拿り出し、三箇一齊に打振りければ烟、沙、火、一同に迸る。此時行者咒語を唱へて、巽の方に向ひて一口の氣を吐けば忽然に旋風吹き起り、火勢盛に烟渦卷き黃沙滿天に飛び散りて、面を向くべきやう非ず。妖王怕れ駭き逃げんとするに道なく、狼狽へ騷いで苦み廻り、既に命も危き處に、只聽く空中に聲有つて、孫悟空我來れりと呼はる者あり。行者頭を回して是を見れば、是則ち南海補陀峰敎主觀世音菩薩なり。左の御手に淨瓶を托着げ、右の御手に楊柳を拿り、甘露に濱して火の上に洒下ぎ給へば、烟火跡なく消え失せて黃沙も忽ち收りぬ。行者は金鈴を取納め空中に飛升り、合掌して菩薩を拜し、當下那里へ往かせ給ふや。菩薩曰く、我態々爰に來りて妖怪を降伏す、他は是我が跨的の金毛狐なり、他を守れる處の牧童睡睡し間に、此畜生繩を咬み斷り朱紫國に到り、國王の災を拂はんとす。行者曰く、彼妖精

朱紫國王を惱し皇后を狂惑し、害を爲す事少からず、何ぞ災を拂ふと曰ふや。菩薩又曰ふ、僱仔細事を知らず、朱紫國王當時太子たりし時、獵を好みよく弓射る事をなす、西天從來佛母孔雀大明王菩薩あり、生める處の雌雄兩個の孔雀あり、渠等山坡下に遊び居けるを、太子一矢放つて雄を射て疵付けたり、雌の孔雀其矢を取つて返り、佛母孔雀明王に訴へたり、佛母則ち是を聞きて、朱紫國の太子三年折鳳の災を與へ此罪を報いしめよと命ありしを、時節我彼狐に乘りて一邊に居合せ此詞を聞き居たり、此業畜亦是を心に覺え居て、彼國の災を拂はんとして、終に妖怪と成つて皇后を奪ひとり、三年洞の裡に隱れ住み、今年の當今數滿ちて僱國王の災を除き、我來つて妖邪を收め歸るなり。行者聞き終りて、左樣の故事ならば他が命を助け候はん。菩薩、魔王を一喝し給ひ、汝葉畜なほ俱に還らず、何の時を待たんとするや。妖怪地の上に倒轉びて本相を現しければ、菩薩其背上に打騎り給ひ、畜生三箇の金鈴は奈何せしぞ。行者聞きて、老孫是を奪ひぬと菩薩に金鈴を返し奉る。菩薩取つて狐の項に繫ぎ掛け南海に回り給ふ。斯くて行者は、鐵棒を輪して獬豸洞に打つて入り、小妖的を塵になし、宮中に至つて金聖娘々に見え首尾を委く語り、今より本國へ歸し進せんと云ひけるにぞ、皇后大いに懽喜び拜謝する事盡きず。行者頓て草を束れて龍の形を作り、是に皇后を跨上しめ、娘々怕るゝ事な

かれゝ堅く眼を塞ぎて管ず開き給ふべからず、我暫時に本國へ送り進すべしと、神通を以て彼草龍に空中を走らしむ。皇后は眼を塞ぎて唯耳に風の音を聞くのみにて、未だ半時ならざるに忽ち朱紫國の宮中に立歸り、行者雲を排きて殿上に下り、皇后眼を開き給へと呼はりける。此聲を聞きて金聖娘眼を開き見給へば、思ひきや我が本國の宮中なりければ、歡喜び給ふ事限なし。國王見るより龍床を下り走りより、絕えて久く逢はざりし思想の情を述べんとて、皇后の玉手を拿り抱き倚らんとし給ひしが、猛然として地上に倒れふし、皇后の身に刺針生ひたり、我手疼みて堪へがたし、早く救へと叫び給ふ。行者走り寄つて助け起し、謂つて曰く、皇后妖怪に捉へられ給ひし上首、一人の道士來り、五色の仙衣を贈り皇后に着せしむ、然るに其仙衣より刺針生ひて人の近づく事能はず、此故に三年の間終に身を沾し給はずといへば、國王是を聞いて且歡喜且愁ひて、此刺針を怎麼かせんと歎き給ふ。此時空中に聲有りて、大聖有りや我來れり、刺針の衣愁ふるとなかれ。行者頭を回して是を見るに、是眞人張紫陽なり。雲を下りて宮中に到り、行者に向ひ禮を施し、小仙三年前佛會に赴き此國を過るに國王三年折鳳の災ある事をきく、時に妖怪皇后を攜り去るをみる、怕らくは妖怪の爲に沾され給はん事を傷み想ひて、一件の古き棕衣を將りて變じて五色の霞裳となし、皇后に與へて着せしめたり、彼

剃針は棕毛にして、三年の間皇后の身を守りたる物なり、當今大聖功を立てゝ、皇后を救ひて本國に歸る事を得たり、此故に我來りて那棕衣を脱がしめんとす。皇后、眞仙を見て大恩を謝し禮拜す。眞人立倚つて棕衣を脱がしめ、自ら着し、人々に向ひ辭し別れ、空中に升りて歸り給ふ。國王及び皇后も天に向ひて禮拜し、夫より大いに酒筵を設け、三藏師徒を接待しけり。行者、三藏に告げて、樽に預け置きし戰書を出し國王に見せしめ、其外獅豸洞にて有りし事ども彼是落なく說話りければ、國王はじめ衆位の官員輩感謝して禮拜する事絕間なし。國王は只管に此國を讓らん事を曰ひけれども、三藏、行者固く辭して唯西方に赴かん事を急ぐ。國王今は沒奈何、關文に印を寫し三藏に遞與しければ師徒四人國王に辭語を告げ、城門を立出でければ、國王を首衆位の官員輩遠く送りて別れけり。

七二　盤絲洞七情迷レ本　濯垢泉八戒忘レ形

斯くて師徒四個は朱紫國を離れてより又多少の山水を經歷し、覺えず秋去り冬盡きて又春光の明に値ふ。或時一座の邨莊に望む。三藏馬を下り、我今此人家に往きて些の齋を要め來らん。行者笑うて曰ふ、師父齋を要め給はゞ我們代りて行くべし、那ぞ自親師父の行き給ふ事あらん。三藏曰く、平日

に俱們怎邊の遠き處にても勞を厭はずして齋を乞ひ來る、今日人家既に近く又天氣清明なり、我自ら去きて乞ひ來らんと、遂に鉢を取つて步み行き、直に莊前に至り給へば、前に一座の石橋あり、寂々寥々として雞犬聲もなく、一個の茅屋の奥に、四個の美女窓の下に在つて、鸞を描き鳳を繡す。又庭上に三個の女子、鞠を蹴て遊び居たり。三藏使ち橋上に立つて、貧僧は東土大唐より四天に至り經を要むるの僧なり、今檀府に來りて齋を乞ひ奉る、万望は些の齋を惠み給へ。彼女子等是を聞き大いに懽喜び、一齊に門を出て來り、長老疾く此方へ上前み給へと、三藏の手を扯き腰を推して、茅屋の一邊なる一個の石洞の裡に押入れけるにぞ、三藏驚き、偖は他們我を害せんと爲るならんと、身を轉して逃げ出でんとし給ふ。彼女子們總て武藝あり、三藏を扯倒し、繩を以て洞中に吊り上げ、個々衣服を脱ぎ肚を露しけるが、忽ち臍の孔中より蠶の粗細なる白き糸を扯り出し、玉を飛ばし銀を散らすがごとく、須臾の間に莊門を一遍に罩ひけり。三個の徒弟は路の一邊に獃みて在りけるが、莊門忽ち雪に埋みたる如く一片の白光と變じたるを見て、三個大きに驚き、是管ず師父の妖怪に逢ひ給ひしならん、早く行きて救ふべしと駈出でんと爲しけるを、行者兩個を住め、俱們躁ぐ事なかれ、我去きて見て來らんと直に村莊に走り行き、彼白光を見るに、白糸を經緯に引はえ千万層の厚さあり。手を

以て是を押せば却つて和にして粘あり。行者甚麽の物なるを知らず、頓て咒語を唱へて此地の土地神を呼び出し、此處は何と號へる地方にて、此白糸は怎麽なる物ぞと尋ねれば、土地神答へて曰く、此前邊なる山を盤絲嶺と號け、嶺下に一箇の盤絲洞あり、洞中に七個の女怪居住せり、他等俱に蜘蛛の精にて、白絲は則ち蛛の絲なり、又此南三里に一座の溫垢泉あり、此泉天生の熱水にて、他等毎日三遍づゝ那里に行きて洗澡するなり、今日も頓て出で來らん、少時待つて見屆け給へ。行者是を聞いて先土地神を放ち返し、一個の蒼蠅兒と變じ、草頭に住りて待ちける處に、不多時白絲盡く消え失せて原の村莊を露し、莊門の裡より七個の女子歩み出でたり。行者則ち翅を延べて前なる女の頭に住り他等に從ひ行きける處に、果然南三里許行きて一座の墻門あり、十分壯麗なり。一個の女子扉門を推排けば、中に一塘の熱泉あり。五丈に一丈餘の廣さにて、深さは纔三四尺に過ぎず、水は珠よりも清かなり。池の汀には兩箇の漆塗の衣架を椿へたり。行者又翅を延べて衣架の上に住りて伺ひけるに、彼女子等皆一齊に衣帶を脱ぎ、我們早く洗澡し、家に歸りて彼和尚を蒸して喫はんと、個々雪の如き肌を露し、浴池に入りて笑ひさわぎ、水を躍せ波を翻して戯れけり。行者是を見て思ふやう、今他等を打ち殺さんは何より安し、然れども常言に男不與女鬪と云へば、却つて我が名を失ふべし、且一

箇の謀計を以て他等を動さゞるやうにすべしと、忽ち一翅の老鷹と變じ、衣架の上に掛けたる七個の衣帶を盡く攫み取り、嶺上に飛び去つて原の路傍に立歸り本相を現し、八戒、沙僧に此事を說話りければ、八戒是を聞いて、師兄、妖怪と知らば何ぞ是を打ち殺さゞる、是草を斬つて根を除くの謂なり我今行きて打ち殺し來らんとて、釘鈀を執つて出で行きけり。沙僧、行者に謂つて曰く、今師兄の曰ふ如くならば、師父は極めて彼邨莊の裡に居給ふべし、我行きて伴ひ歸らんとて、頓て彼石橋の邊に走り行き、茅屋の裡に入りて見れば、妖怪一個も在らず。一邊の石洞の裡を覗き見れば、爰に三藏は綱縛められて御座たり。悟淨走り入つて縛めを解き下して、急ぎ行者が待ち居る路傍へ歸りければ、行者歡喜び三藏に向ひ、此後齋を求め給はゞ我們に任せ置き給へと云へば、三藏打點頭き、我假令餓死するとも此後自ら齋を要むべからずとて悔みけり。却說七個の女子は衣服を鷹に取られて出づる事能はず、水中に蹲り、個々鷹を罵り居たり。此時八戒門を排いて入り來り、是を見て打笑ひ、女菩薩我をも同く洗澡させて給はるべしと、直裰を脱ぎ捨て撥と水中に飛び入りければ、女怪等は大いに怒り、此和尚十分無禮なり、出家人の身として女人と同く洗澡せんとするやと、一齊に取り圍んで打たんと爲るを、八戒原水練の達者なれば、水中に在りて忽ち變じて一個の鮎魚と做り、女子等が肌を

探りて狂ひ廻れば、女戒等大いに困り果て、西へ追へども捉へ當てず、東へ搜れども手を滑らし、那方此邊と亂轉し、女怪等總て心倦み精勞れて詮方を知らず。八戒又水中より跳り出で、木相を現し直禰ん着し、釘鈀を揚げて罵つて曰く、儞們我を鮎魚と思ふや、我は是東土大唐より西天に至り經を要むる長老の徒弟猪八戒とは我が事なり、儞們我が師父を捉へ蒸し喫はんとす、大膽なる女怪ども性命を免し難し、我が釘鈀を受けよとて、走り倚つて突かんとすれば、女怪等大いに狼狽へ、水中に跪下き八戒を拜し、我們眼有りて珠なく、儞の師父を捉へて家に置きたり、今より師父の性命を助けて、些の盤費を送りて西天へ去かしめ進らせん、萬望我們が命を助け給へ。八戒曰く、糖を嘗らして君子を欺く常言あり、我那ぞ其甜口を信ずべけんや、早く頭をのべて我が釘鈀を喫へとて、只管上前で突きかゝる。女怪等慌得てゝ耻を覆ふに暇あらず、臍下に手を押着てゝ跳出で、個々臍より彼絲を繰出し、四方八面より絲をかけ、忽ち八戒を當中に罩ひ住めたり。八戒は浮雲の中に圍まれたる如く、脚を舉ぐれば躓き倒れ、飛出でんとすれば頭支へ、右に轉び左に倒れ、眼昏みて唯地に臥して呻吟き居たり。女怪們は八戒を罩ひ住め、個々赤裸にて村莊に歸り、舊衣を出して身に纏ひ、石洞の裡を見れば唐僧在らず。僧は遣斯逃げ失せたり、我們誤つて唐僧を捉へ、却つて此耻を蒙りたり、先師兄の許に

行きて商量なさんと、七個の女怪一齊に西を指してぞ出で行きける。少時ありて八戒頭を擡げ見れば纏ひたる絲些く破れたり。漸々是より遣ひ出でゝ三個の待ち居し處へ駈せ歸り、利害々々、我今女怪等が絲に罩はれて危く命を助かりたりとて、頓て又村莊に至り、一把の火を放つて石洞茅屋を燒き盡し、師徒四個立出でゝ西に向ひて急ぎ行きぬ。

七三　情因舊恨生災毒　心主遭魔幸破光

原來此盤絲嶺の西六七里、大路の一邊に一座の黃花觀あり。觀中の道士は則ち彼七個の女怪と同學の兄弟にて、常に往來をなしける故、此日女怪等直に觀中に來り道士に見えて、唐僧を捉へて耻を蒙りたることを語り、種々商議して居る處に、三藏は是を知らず、西に向ひて路を急ぎ、不多時觀門の前に至り、我們少時此觀中に休足し、便宜を見て齋を要むべしと、徒弟等と俱に門を入れば、主の道士出迎へ、老師父は何處より來り給へると問ふ。三藏手を拱いて答へて曰ふ、貧僧は東土大唐より西天に至り佛を拜せんと爲るの僧なり、一當今仙宮を過ぎるに依て少時休息を爲さんとす。道士是を聞いて大いに懽び、僧は聞き及びたる東土の聖僧におはし候や、小道大いに失敬をなしたりとて、四衆を

正堂に請じ裡に入り、童子に五鍾の茶をくませ、道士手親三藏に献じ、行者は師父の後に坐し形小きな見で是を三徒弟とや思ひけん、先八戒に茶を献じ、次に悟淨、次に行者に進め、自親一鍾を取つて相陪す。行者は鐙より道士が唐僧と聞くより大に喜び、慾て準備したる如く急速に茶を進め、又四鍾の茶には總て赤棗を入れ、道士が茶には却つて黑棗を入れたるを見て心中怪み、茶鍾を手に拿り少時伺ひ居る間に、三藏、八戒、沙僧は何の心もなく總て茶を喫み畢りけるが、忽ち三個一齊に呵呀と叫びて倒れけり。行者驚き、怒り罵つて曰く、此畜生我と倆と原來何の怨もなし、怎麼ぞ毒藥を以て我が師父を害したるやと、茶鍾を嚗的と投中けたり。道士袖を擧げて架住め、大いに怒つて曰く、倆潑猴自ら禍を招き、却つて怨なしと云ふや、倆們嚮に盤絲洞に入りて齋を乞ひ、濯垢泉にて洗澡を爲さずや、行者曰く、汝既に盤絲洞濯垢泉の仔細を知る、偖は彼七個の女怪は總て倆が老婆なるべし、且我が一棒を試みよと耳の中より金箍棒を把り出せば、道士も急に身を回し、一口の寶劍を取り、正堂に在りて戰ひけり。時に忽ち奥の方より七個の女怪一齊に出で來り、個々懷裡を引開き臍の孔中より絲を作出し、行者を罩ひ住めんとす。行者嚮に八戒が說話を聞きたれば、絲を掛けられては不當と、身を轉して空中に飛び升り、霎時息を休むる間に、忽ち彼觀門殿閣も梭を穿くが如く鋪き罩ひ、看る

看る一片の銀世界と變じたり。行者是を見て心に驚き、利害利害、我幸に早く脫れ出でたり、倘一度是に罩はれなば怎生ぞして身を動すべけんやと霎時沈吟したりけるが、頓て又一個の計策を思ひ着き七十根の毫毛を拔き七十個の小行者と變じさせ、金箍棒を變じて七十條の叉兒棒となし、一個の小行者毎に叉兒一條づゝ持たせ、彼鋪き罩ひたる糸の廻より播攪させければ、遂に裡より七個の蜘蛛を引き出しける。彼蜘蛛個々三尺餘の大いさにて、俱に手脚を縮めて一團となり、命を助け給へ〳〵と叫びけり。行者遂に小行者を身に返し收め、叉兒棒を集めて鐵棒となし、彼蜘蛛を件一に打ち殺す。彼道士又劍を揚げて跳り來り、行者に向ひて戰ふ事五六十合。道士漸々に力勞れて些身を退くと見えけるが、忽ち衣服を解き捨て兩手を上に指し擧げゝれは、兩邊に一千雙の眼ありて發止と一聲叫ぶと等く、眼中より金光迸放出で十分利害。行者此金光黃霧の中に罩ひ籠まれ、大に驚き脫れ出てんとすれども脚を動す地少く、上に向ひて飛び出でんとすれば却つて金光に打ち落され、左に廻り右に轉じ、汗を流して働けども、鐵桶の裡に在るが如く脫るべきやうも無かりしが、又忽ち一箇の計策を思ひ着き、一般身を搖し、變じて穿山甲と做り、土の中に潛り入り、地の下に在りて二十餘里を潛り、漸々にして頭を出し見れば、彼金光十餘里の裡を罩ひ、此處は光も無ければ、遂に地上に立出で本相は現

しけれども、遙々の地下を潛りて精心を勞らし、再度戰ふべき氣力なく、斯くては怎麼して師父兄弟等を救ひ得んやと、泪を流して立つたる處に、向邊の方より一個の婦女、身に重孝を穿、手に一盞の飯を持ち、泪を流して走り來りければ、一行者是を見て、世間又我と同く悲む人あり、彼婦人は誰が爲に哭くやらんと上前み倚つて問うて曰く、女菩薩何個を失ひて箇樣に哭き給ふやといへば、彼婦人淚を押へて曰く、我が夫黃花觀の道士と爭ひ、毒藥を以て殺さる、我此一飯を墓に供へて些少夫婦の情を露さんとす。行者是を聞いて發々を淚を流し、女菩薩は丈夫の爲に一飯を供へて祭り給ふ、我が師父も亦彼道士が毒に害せられ給へども、是れを祭るべきやうなく、心の疼堪へがたし。婦人が曰く、長老は那國より來り給へる人ぞと問ふ。行者則ち、東土より爰に來り觀中にて彼道士と戰ひし事、其身金光に罩ひ困められんとせしを纔に身一個遁れたりとて、萬般落もなく語りければ、婦人聞き終りて云ふやう、偖は長老、彼道士を知り給はず、他が名は百眼魔君とも又は多目怪とも云ふなり、他を降さんと思ふには、那里に一位の聖賢あり、此聖賢管ずよく金光を破り道士を降伏し給ふべし。行者急き再拜して、女菩薩萬望は其聖賢を敎へ給へ。婦人が曰く、此南千餘里に紫雲山といふ山有り、其山中千花洞に一位の聖賢、毘藍婆菩薩といへるあり、是を請ひ來り給ひなば、那道士を降伏せん事疑な

しと仔細に說き敎へ、我は爰にて別れ候はんと云ふかと思へば忽ち空中に飛び上り、黎山老婆と現れ我龍花會上より偖が師父を救はん爲爰に來れり、偖紫雲山に至るとも我が敎へし事を告ぐる事なかれと、西をさして飛び去り給ふ。行者則ち空中を禮拜し、忽ち觔斗雲を放ちて打跨り紫雲山へと飛行りけり。斯くて千花洞に至りければ、更に雞犬聲もなく靜々淨々たる洞中に、一個の老婦榻上に坐し居たり。行者是ぞ彼毘藍婆菩薩ならんと思ひ、進み入りて拜しければ、菩薩榻を下りて曰く、汝は孫大聖に在らずや、今何幹ありて來り給へるぞ。行者曰く、菩薩怎麼かして我を認得り給ふや。菩薩曰く偖前年天宮を鬧せし時、普天普地、總て皆名を傳へ、誰か偖を知らざらん。行者曰く、老孫今は佛門に歸依し、唐僧を守護して西天に至る路にて、今日黃花觀の妖怪に出遇ひ難に逢ひぬ、萬望は菩薩、彼妖精を降し、師父を救ひ給はるべしと云へば、菩薩曰はく、我魚籃會に赴きしより以來、已に三百餘年、姓を隱し名を埋み、未だ曾て門を出でず、今日誰が偖に我が隱室を敎へつるや。行者曰く、老孫原一個の地理鬼、曾て人の敎を受けず、自ら知つて參りしなり。菩薩曰はく、我本外に出でじと思へども、偖已に經を求むるの善事あれば、是を助けでやは有るべからず、我今偖と俱に去くべしとて頓て雲に駕りて出立ち給へば、行者後に從ひて不多時黃花觀に至り、金光灑々たるを臨み、行者指差

して曰く、彼金光は則ち妖精なり、菩薩今何の器械を以て他を降し給ふや。菩薩曰はく、我子昴日星官が煉へたる處の綉花針あり、是を以て降すべしと、衣領の裡より眉毛の粗細なる五六分の長短なる綉花針を取り出し、空に向ひて投げ上げ給へば、一聲の響と俱に金光忽ち消え失せて彼道士身を動す事能はず、直に原身を現しければ七尺許の大蜈蚣なり。行者大いに喜び、妙なるかな妙なるかな、早く針を尋れ候はんと云へば、菩薩一掌を展べて、針は返りて爰に在りとて、遂に行者と觀中に進み入り、唐僧等を見るに、三個俱に地に倒れ早事斷れたる光景なれば、行者聲を放ちて哭きにける。菩薩住めて曰はく、大聖悲む事なかれ、我が懷中に解毒丹あり、倆に與へて唐僧を救はしめんと、一個の破紙に包みたるを取出し、紅き丸藥三粒を行者に與へ給へば、行者急ぎ三個の口を推開き、個々一丸を吹き入れけるに、須臾の間に三個とも嘔吐をなし、毒藥を吐き出し忽ち正氣に復りけり。行者則ち師父に向ひ、有りし動靜を仔細と語りければ、三藏はじめ兩徒弟も深く菩薩を拜謝しければ、菩薩も夫々答禮し、彼蜈蚣を指に掛けて千花洞にぞ歸られける。八戒是を見て、此媽十分利害、那樣の惡的を翫弄びぬるやと駭けば、行者曰く、先に他が小兒ば彼昴日星官なるよし語れり、星官は一隻の公鷄なり、思ふに此婦人は極めて一個の母鷄ならん、鷄よく蜈蚣を伏すと、此故に容易く他を捉へたるな

らんと、三個是を語りつゝ、且行者が辛勞を謝し、大路に沿ひて出で行きけり。

七四　長庚傳ニ報魔頭狠一　行者施ニ爲變化能一

一時秋の初節に當り、一座の大山に至る。其高き事天と等く、松柏日を翳ひ、巖石峙立ち路阻狹し。三藏心中に怕をなし、徒弟等能く〳〵心を用ひよと曰へば、行者曰く、老孫光景を見屆け來るべしと頓て虛空に飛び昇り、前面遙に眺むる處に、忽ち雲端に太白金星現れ給ふ。行者急ぎ進み倚りて、李長庚何國に去き給ふやと問ふ。金星答へて曰はく、我今此山に妖魔有る事を大聖に告げんと思ひ、態爰に來れるなり、此山行程八百里、獅駝嶺と號く、山中に獅駝洞と云へる有り、爰に三個の妖魔有り、他等總て神通廣大にして部下に四萬八千の小妖あり、大聖十分心を盡して變化の妙を施し給へ、若些少にても怠慢あらば管ず爰を過ぎがたからん。行者是を聞き再拜し、頓て金星に別を告げ、雲を下りて三藏に此由を報ぐ。三藏淚を流して曰く、斯の如く艱難多し、怎麼して此地を過ぎ、何の日か西天に至り佛を拜する事を得んや。行者いはく、金星這樣に告ぐると雖も、管ず五六分は虛言有らん且八戒、沙僧は爰に在つて師父を護りて待ち給へ、我嶺に登りて伺ひ來らんと、又雲に跨りて飛び去

りけり。少時有りて行者雲より下を臨み見るに、忽ち山の背後に叮噹々々と鈴の音聞えて、一個の小妖怪一桿の令字を書きたる旗を捧げ、腰に鈴を着けて出で來る。行者是を見て思ふやう、他等ず山廻りの小妖なるべし、我他を欺きて妖怪が消息を問ふべしと、急ぎ雲より樹陰に下り一個の小怪と變じ他と同じき旗を擔ぎ鈴を帶け出で來り、彼小怪に行會ひければ、小妖見咎めて曰く、傭は何里より來れる的ぞ。行者笑つて曰く、傭却つて一家内の者を認得らざるや。小妖が曰く、我城中に汝を見ず、怎麼ぞ認得らんや。行者曰く、汝認得らざるも理なり、我今まで燒火的を勤め居し故平日に汝と會ふ事なし。小妖頭を打搖つて、我が家の燒火的に原汝を見ず、且我が大王家法嚴く、燒的は常に火を燒き、山巡りは常に山を巡る、既に燒的となり亦出で山を廻る者なし。行者曰く、偖は傭未だ知ずや大王我が怠惰なく燒火的を勤めしか見給ひ、當般陞して巡山となし給へり。小妖曰く、我們巡山的一班毎に四十名あり、十班俱に四百名、大王より個々に牌を與へて號となし給ふ、傭其牌ありや。行者曰く、我怎麼牌なからん、然も當般新牌を領して來れり、又傭も定めて牌有るべし、疾く出して我に看せよ、我も又傭に見せん。小妖就ち衣服を揭げ一個の金漆牌兒を取出しけるに、正面に威鎭二話魔一と四箇の金字有りて、背に小鑽風の三箇の眞字あり。行者是を見て、偖は巡山的は總て風の字を下に

附けるならんと、手を腰の間に指しいれ、一根の毫毛を拔き金漆牌兒と變じ、背に大鑽風の三字の文字を露し取出して看せければ、小妖大いに驚き、我等總て小鑽風と名を呼ぶに、怎麼ぞ傭一個大鑽風といふや。行者曰く、大王既に我を巡山的に陞し給ひ、此新牌を賜ばり、大鑽風と號けて傭們一班の四十名を司らしめ給ふ。小妖是を聞いて急ぎ拜して曰く、長官偖は新に職を蒙り給へり、我實に長官の面を知らず、當下の無禮を許し給へ、我が一班の鑽風等皆南嶺の下にあり、我快く去きて他們に報じ候はん、長官慢々來り給へとて、嶺の那邊へ跑り去る。行者、小妖が言に從ひ南嶺の下に至れば、果的一班の小鑽風爰に在つて、個々身を屈めて出迎へ長官に拜謁す。行者是を見て、急に巖頭に登つて座を定め、衆鑽風に對して呼はつて曰く、當般大王新に我を大鑽風に陞し給ひし謂、今傭等に說話らん、耳定に聞くべし、近頃大王、東土より來る唐僧を喫ばんと思ひ給へども、孫悟空といへる大徒弟、神通廣大にして能く變化を作すと聞き、然らば彼の悟空萬一小鑽風の像に變じ、汝等が中に交はり居て、洞中の消息を伺ひ有らんも計りがたし、此故に我を大鑽風に陞し、傭等が群黨中を查勘せしめ給ふ、我今汝等に問ふ事あり、夫を答へざる的は假鑽風なり、捉へ行きて大王に訴ふべし、傭們眞の鑽風に相違なくば、豫て大王の手列は知るべし、且速に是を答へよ。此時一個の小妖進み出でゝ

曰く、我等能く大王の手列を知れり、一の大王は神通廣大にして、能く變化をなし法身を現し、一度口を開き給へば其廣き事城門のごとく、一口に十萬の天兵を呑み給ふ、二大王は鼻鮫龍のごとく、假令鐵背銅身の人なりとも、一度其鼻に卷かるゝ時は終に命を失ふなり。行者曰く、偖が言ふごとく相違なし、偖は眞の鐵風にして假鐵風に非ず。亦一個の小妖上前み出てゝ曰く、我も又稟すべし、其次の三大王、是は却つて凡間の人に非ず、雲程萬里鵬と號し給ひ、能く九萬里を飛行し、又一件の寶貝あり、陰陽二氣瓶と號く、倘此瓶中に人を裝り入るれば、半時の間に化盡けて血水となるなり。行者是を聞いて心中に思ふやう、妖怪が手列怕るゝに不足、唯此の寶貝の瓶を怖るべしと、暗に驚きながら色にも出さずして曰く、偖が言ふ處違はず、偖は假鐵風に有らず。又一個の小妖進み出でゝ曰く、當般大王唐僧を喫はんと思ひ立ち給へども、一大王二大王は却つて是を要め給はず、三大王强ひて彼を要め給ふなり。亦一個の小妖上前み出でゝ曰く、三大王原此地の人に有らず、五百年前此西四百里隔つ獅駝國に來り、彼國の君臣百姓盡く喰ひ盡し、因てかの城地を奪ひ居住し給ひし處、近頃唐朝より一個の聖僧を西天に遣はし經を求むると傳へ聞き、彼聖僧は十世修行の好人にて、其肉を喰ふ者は不老長生を得ると聞き、彼を捉へんと思へども、他が徒弟孫行者神通廣大なりと聞きて一個の力に及

ばざれば、爰に來つて兩個の大王と血緣を結び、力を合せて唐僧を捉へんとし給ふなり。行者曰く、偖等が言すところ一件違はず、先大王に此由を報じ、亦來つて查勘を爲さん、擲に山を廻りし鐵風我に跟ひ來れ、大王に見えさせ賞錢を賜ひ得さすべし。山にて逢ひし擲の小妖大いに懽喜び、行者と列立ち一里許り過ぎ行く處に、行者忽ち鐵棒を把り出し小妖を打ち殺す。然して此小妖が像に變じ、旗を擔げ鈴を着け獅駝洞に尋れ行きけるに、果然一座の洞門あり。門前に許多の小妖的群り居て、行者が來るを見て、小鐵風歸りたるか、快く入つて大王に見えよといふ。行者、應と一聲應へ、直に門內に入り前面を看やれば、堂上に三個の妖魔並び坐し、兩邊に幾百の小妖伺候して、個々甲冑を帶し器械を把り、威風凜々として殺氣騰々たり。行者些も怕れず堂下に走り行けば、三個の妖魔問うて曰く、偖山を廻りて唐僧が消息を伺ひたるや。行者曰く、唐僧は未だ伺ひ得ず、却つて孫悟空を伺ひ來れり。老魔が曰く、偖怠慢して孫行者を伺ひたるや。行者が曰く、彼東嶺の那邊に、一個の和尙澗の上に蹲りて鐵棒を磨き居たるが、其像開路神のごとく、若身を起さば十餘丈の長有るべし、彼鐵棒も又椀程の粗細あり、他只管口裡に獨言くを聞くに、我が此鐵棒久く神通を顯さず、今是を磨いて洞中に入り三個の大王を打ち殺し、一大王は皮を剝ぎ、二大王は骨を砍り、三大王は筋を抽き、假令門を閉ぢて

防ぐとも我蒼蠅兒と變じて門の縫裏より潜り入り、他等を捉へ殺さんと云へり、我是に依て孫行者なる事を悟り候。老魔是を聞いて一身汗を流し、兩個の老魔に對して曰く、儞等きけ、我曾て孫行者が武勇を聞き及びしが、果的斯の如く却つて儞們を討たんとす、他又蒼蠅兒に變じて來らんと云ふ、我が此洞中往昔より蒼蠅を生じたる事なし、若蠅の來るを見ば儞等力を用ひて拿ふべし、曾ず遁す事なかれ。行者是を聞いて一邊に身を退き、密に一根の毫毛を拔いて蒼蠅に變じ、老魔が臉に向ひて放ち遣りければ、老魔大いに驚き、偖こそ孫行者來りたれ、快く拿へよと呼はりつゝ、個々鎗を把り刀を振ひ、小妖等も一齊に器械を取つて駈け來り、上を下へと立騒ぎ、蠅一隻に騒動するにぞ、行者可笑さ堪へかねて覺えず吃々と笑ひけるが、忽ち我が眞の臉を笑ひ出し、是を變じ正さんとする間に、彼三魔王目疾く是を見附け、急に行者を扯捉へ、老魔に向ひ、大哥々々是を見給へ、這厮則ち孫行者なり、想ふに這厮かの小鍵風を打ち殺し、却つて其模樣に變じて來りし者ならん。此時兩魔を初め衆部の小妖ども一齊に立ちかゝり、遂に行者を引倒し、他遁法を知る故に繩を以て縛めがたし、陰陽二氣瓶の中に裝り入りて化し殺すには如かじとて、小妖等に命じ陰陽瓶を取出ださせけるが、此瓶縱に二尺四寸の大きさなれども、三十六個を用ひざれば動す事能はず、此故に三十六個の小妖、彼二氣瓶を

擔き出し、瓶の口を行者に向けゝれば、瓶中に仙氣ありて搜的と行者を吸ひ入れけり。三魔打倚りて蓋か罩ひ、既に孫悟空を捉へたれば、唐僧は、自然と我們が口裡のものなりと、急ぎ歡喜の酒宴を儲しけり。

七五　心猿潛ニ透陰陽體一　魔主還ニ歸大道眞一

行者は瓶中に裝り入れられ、身を小く變じ少時蹲り居ける處に、忽然として四面總て火焰となり三條の火龍出て來りて行者が上下に盤り遶る。行者則ち咒語を唱へ避火訣の印を結び、氣を住めて坐しけれども、漸々に火勢甚だしく、孤拐の肉已に和ぎければ、行者心中に慌得てゝ、斯の如くならば漸々に孤拐より化盡けて湯と成るべし、此裡に化し死なば、師父を佐けて西天に行く事能はず、萬年の功業一旦に空しくなる口惜さよと、覺えず泪を流しけるが、忽ち前年蛇盤山にて觀音菩薩の救命巻を賜はりし事を忘ひ出し、瞬後を搜り見れば果然硬き毛三根あり。行者嬉く遂に是を拔き下し、一根を鋼鑌と變じ、一根は竹片と變じ、一根は細き綿繩と變じさせ、竹を張り弓となし、彼鋼鑌を以て底に向ひ穿み鑌しければ、一直に一箇の孔を穿み透きたり。火勢此孔より漏れ出で冷氣を生じ、行者大い

に懽喜び三根の毛を納め、頓て蟭蟟蟲と變じ此孔より潛り出て、忽ち門外に飛び行き本相を現し、三藏の居給ふ方へ馳せ返り、師父々々妖魔を伺ひ來りたりといへば、三藏曰く、倆久く歸らず、我深く愁ひたり、山中怎麼なる妖怪ありや。行者則ち小鐵風に變じたる事より、瓶の裡に裝り入れられ辛うじて身を脫れ歸りし事を語り、彼三個の妖魔甚だ手强く、數萬の小妖的あり、我一個他と戰ひがたし今八戒を領し再度那里に行くべしといへば、八戒是に從ひ、兩個とも雲に跨り、走りて獅駝洞の門前に至り、行者高く呼はつて、妖魔快く出て來つて孫悟空が手列を見よと叫びければ、門を守る小妖驚いて大王に此由を報ず。三個の妖魔是を聞いて大いに驚き、彼行者當に陰陽瓶の中に裝り入れたれば今の程は化盡けて水と成りたらんと思ひしに、他怎麼にして拔け出でけんと怪しみ、急ぎ陰陽瓶の有る處に至り、彼の瓶の蓋を把りて裡を見れば、悟空は在らず却つて底に一箇の孔を穿けたり。偖は悟空此孔より潛り出でしと覺えたり、一然れども這所奈何して孔を穿け、如何にして此小さき孔より出でにけんと、且怪み且驚き、茫然として立ちたる處に、行者門外に在つて萬般と罵りけるにぞ、老魔怒然として謂つて曰く、我等西方路上に在りては武勇の名あり、今日孫行者に侮謾られ他と敵する者無くんば、名を千歲の末に恥じむべし、命を捨てゝ戰はんに何ぞ怕るゝ事有らんと、刀を把つて門外に

跳り出で、呼はつて曰く、孫行者我が言を聞け、我軍兵を出して他を捉ふる事易しと雖も、然しては倆我が手列を知る事能はじ、我今倆と戰ひ快く雌雄を決すべし。行者笑つて曰く、怕らくは倆一個我に對する事能はじ、管ず逃ぐる事なかれと、兩個遂に戈を交へ五六十合戰ひける時、八戒堪へかねて師兄我代つて突き止めんと、釘鈀を把つて駈け出づれば、老魔二個に敵し難く、忽ち本相を現し一個の青獅と成り、口を開いて八戒を呑まんとす。八戒大いに驚き頭を回して逃げ出だす。行者は却つて眞面に上前みより、鐵棒を身に收め、彼獅の口の裡へ飛び入りけり。八戒是を見て行者を怨み、此期馬溫の死生知らず、却つて他が口に入るは何故ぞ、明日は管ず大恭と變じて出づるならんと獨言き、急いで舊路に逃げ返りける。三藏は沙僧と俱に兩個が歸るを待ち給ふ處へ、八戒喘呼呼的駈け來れば三藏驚いて曰く、八戒怎麼ぞ狼狽しく歸りたるや、悟空は未だ歸らずや。八戒曰く、師兄は妖怪に一口に呑まれ、我一個漸々脫れ歸りたり。三藏是を聞いて忽ち撞と地に倒れ、悟空、倆よく妖祠を降すと思ひしに、今日却つて妖怪の手に死せり、痛むべし〳〵と聲を放つて哭き給ふ。八戒、師父を勸解めんともせず、沙和尙快く行李を開け。悟淨が曰く、二兄行李を開いて何を出すや。八戒曰く、行李を分ち取つて個々別々に去らん、倆は流沙に立歸れ、我は高老莊に往きて我が渾家の面を看、白馬を

賣りて師父の棺を買ひて葬送の準備を爲すべし。三藏是を聞いて更に心を傷り、天に哭き地に伏して只管哭きて在します。却説獅駝洞の妖魔は、行者を一口に呑み終り、洞中に立歸り、我孫行者を拿へ來れりと呼はりければ、二魔歡喜んで曰く、長兄那處に拿へ置き給ひしぞ。老魔曰く、我他を一口に呑み今腹中に在り。三魔大いに驚いて曰く、大哥大いに過ち給へり、孫行者を喫し給ふ事中からず。行者腹裏に在つて曰く、我を喫する事大いに中し、我飢ゑたれば此肚裡の臟腑を喰はん。小妖聞いて不好々々、行者大王の肚裡に在りて說話りすと怕るれば、老魔が曰く、我手列在つて他を生む、聲を出すを那ぞ怕れん、誰か在る快く鹽湯を取り來れ、肚に灌ぎて他を吐き出し、煮熟して酒の肴とせん。小妖頓て鹽白湯を把り來りて大王に捧ぐ。老魔是を取りて喫み盡し、喉を開いて吐きけれども行者敢て出でず。老魔沒奈何て、孫行者俺怎麼ぞ出で來らざるやと云へば、行者肚裡より答へて曰く、俺甚だ不通變なり、我出家人原衣服なし、今秋涼の時節、我尙單の直裰を着す、此肚の裡暖にして風を透さず、冬を過ぎて後ち出づべし。衆妖是を聞いて、這厮大王の肚の裡にて冬を過さんといふ、怎麼して善からん。老魔が曰く、他冬を過さんとせば、我坐禪をなし搬運の法を行ひ、一冬飯を喰はず、蒲團溫を餓死せしむべし。行者曰く俺、猶世事を知らず、我廣東より過ぎ來り一個の摺疊と鍋とを持つて

入りたれば、俺が五臟、腸を取り、雜炊に煮て食せば來春までは乏しからず。老魔小妖に命じて藥酒を取り來らせ、俺等怕るゝ事なかれ、我今此藥酒を飲み這厮を苦め殺すべしと、一連に七八鍾を飲みけるを、行者酒香を得いて此酒を他に飲ませじと、頭を刺叭の口に變じ、他が咽喉の下に受けて、酒を盡く行者が口へ吸ひ取りける。老魔鍾子を下に置き、不正や、此酒平日は纔に二鍾を飲めば肚裡火の如くなるに、今七八鍾を飲めども些も醉はざるば何故ならんと只管に怪みける。行者原來酒量高からず、今七八鍾を連飲にしたれば、忽ちに大醉し、肚の裡にて舞ひ踊り、或は鞦韆、竪蜻蜓、鐵根頭して騷ぎけるにぞ、老魔肚中大いに疼み、苦みに堪えがたく地の上に轉倒れ、只管嗚呼いて絕え入りたり。多時有りて行者些醉醒め手足を止めて定まりければ、老魔漸々蘇生り、苦氣なる聲にて、大慈大悲齊天大聖南無孫行者悟空菩薩、萬望我を助け給へと呼はりけり。行者曰く、俺然樣に詞を費すべからず、唯孫外公と唱ふべし。老魔是を聞き又呼はつて曰く、外公々々、萬望は慈悲を垂れて我が一命を饒し給へ、我今唐師父を送りて此山を過えさしめ、活命の恩を報じ奉らん。行者曰く、我俺が命を饒さば、俺怎麼して師父を送るや。老魔曰く、我原金銀珠玉の贈るべきなし、我等兄弟三個一乘の轎兒を擔ひて、師父を駕せて送り候はん。行者打笑ひ、轎兒を以て師父を送らば金銀を贈るより尙厭れ

り、倆口を開け、我出て去らんといへば、老魔急ぎ口を開きける。此時三魔走りより、老魔が耳に口を倚せ悄悄的て曰く、他が出づる時齒を咬み合せて這厮を咬み殺し給へといふ。行者肚の裡にて忽ち悟り、先金箍棒を出して試みけるに老魔果して咬み合せ、鐵棒に嚙み的てゝ却つて門牙を碎きけり。

七六　心神居レ舍魔歸レ性　木母同降レ怪體レ眞

其時行者怒つて曰く、倆我を欺きて咬み殺さんとす、我再度出でずとて鐵棒を抽回れける。老魔、三魔を怨んで曰く、是却つて倆が過なり、今怎麼して他を出さんや。三魔曰く、長兄怨み給ふ事なかれ我計事有りとて、高聲に呼はつて曰く、孫行者耳定に聞け、倆が名を聞くこと雷の轟く如く、南天門にて威を現し靈霄殿にて勢ひを振ひ、今又西方路上に有つて妖を降し怪を拿ふ、古今無双の英雄と思ひしに、却つて一個の小猿の猴兒なり。行者曰く、倆何を以て我を小猿といふや。三魔曰く、倆若出て來りて我と賭鬪を爲さば眞の英雄と稱すべし、那ぞ人の肚の裡に潛み隱れ、我們を怕れて出て來らず、小猿ならずして抑々何ぞや。行者是を聞いて思ふやう、他が言も理なり、我若出でずあらば實に名を失ふべしと思ひ、答へて曰く、倆既に我と賭鬪を求めんとす、我今出て行くべし、唯洞内窄く

器械を遊ふに不宜、廣き處に出でゝ我が出づるを待つべし。三魔則ち許若の小妖的ふ領し、門外に陣を列れ、二魔は老魔を佐けて門を出で、孫行者出で來れ、此處場廣し、快く勝負を決せよと呼はりければ、行者又思ふやう、他亦反覆計りがたし、左右計略をもつて他を苦め、快く師父を送らしむるに如かじと、數十根の毫毛を拔き四十丈許の大繩と變じ、妖精が心の臟に緊ぎかけ、繩の尾を手に取つて咽下に至り、亦思ふやう、若口より出でなば此繩を咬み斷られんも計り難し、齒のなき處より出づべしと、上顎より鼻の孔に潛り出づれば、老魔忽ち一聲噴嚏をなし、行者は遂に進奔り出づ。則ち一手に彼繩を扯き一手に鐵棒を取り、急に雲に飛び昇り、力を極めて繩を扯けば、老魔又初めて疼く覺え、天に向ひて釣揚げらる。行者又地に下り横に繩を引けば老魔風車の廻る如く空中より滾び落ち、行者に從ひて牽かれ行く。二魔、三魔是を見て大いに驚き、一齊に繩に縋り落下いて曰く、大聖爺々は海量の神仙と思ひしに、却つて這樣に巧欺り給ふや。行者笑つて曰く、這潑怪ども十分無禮なり、前に我を欺きて咬み殺さんとし、今又我を欺て幾萬の怪兵を以て我一個を圍まんと計る、是何の道理ぞ。妖魔一齊に拜して曰く、擅の事は總て皆我們が罪過なり、今慈悲を以て命を饒し給はゞ、當ず老師父を送り奉らん。行者、然らは倆等刀を拿つて繩を割つて歸りされ。老魔が曰く、外の繩は割ると

雖も、心中に殘り住りたる處怎麼せん。行者曰く、儞等既に師父を送らんと云ふ、其言僞無きや。老魔曰く、繩を解いて給はらば則ち送り奉らん、更に僞り稟すべからず。行者頓て身を搖して毛を收むれば、有りし繩忽ち消えて老魔初めて疼を脫れ、衆妖大家拜禮し、大聖且歸り給へ、我等頓て轎兒を以て御迎へに參るべしとて、兵を收めて洞中に歸りけり。行者も身を回して急ぎ師父の許に歸りける。三藏は尙地に倒れ、只管哭きて在しける。沙僧身邊に在りて佐け居けるが、忽ち行者が來るを見て、三藏、八戒を怨み喝つて曰く、儞等ら能く人を怕す、悟空曾て死せざるか儞却つて死せりといふ、那里より來る者は誰ぞや。八戒曰く、我明かに他が妖精に呑まれたるを見たり、思ふに他師父に念を殘し、魂を回し來る幽靈ならん。此時行者廻り着き、是事を聞き八戒が顏を打つて曰く、我怎麼ぞ幽靈ならんや、向に妖寬我を呑みし時、我妖怪が腸を扯き五臟を掴み、他疼に苦み再三命を饒されん事を乞ふ、是に依て他を饒し、當今轎兒を以て師父を送り此山を過えしめんとす。三藏是を聞きて且歡喜び、悟空大いに儞か勞したり、我今再生の心地せりとて、手を拍つて喜び給ふ。却說那妖精等は既に洞中に歸り、二魔、老魔に對して曰く、我本孫行者を九頭八臂三身の大漢ならんと思ひしに、却つて五尺に足らぬ小猴なり、我が此洞中幾萬の部下唾を吐いても他一個は溺し殺すべし、箇下長兄

の命を救はん爲他を欺き歸すと雖も、眞實他を送るべけんや、長兄我に三千の軍兵を與へ給はゞ、管ず行者を捉へ來るべし。老魔是を聞きて、如何も儞が心に任すべしと云へば、二魔大いに歡喜び、急ぎ、三千の小妖を點じ、徑に洞門を出でゝ山を下り、大路に添つて陣を列れ、一個の小妖前み出で、我が二大王爰に在り、孫行者快く出でゝ雌雄を決せよと呼はりけり。八戒是を見て大いに笑ひ、師兄妖魔を降し轎兒を以て師父を送ると云ふに、却つて復戰を求むるは那ぞや。行者曰く、老魔既に我に戒められ敢て出でこず、定めて彼二魔が我等を送る事を願はず、また來つて戰を要むるならん、我思ふに此妖精兄弟三個這樣に義氣あり、我們も亦兄弟三個、我既に老魔を降す、儞も亦二魔を降し來るべし。八戒曰く、我那ぞ他を怕れんや、且他を拿へ來らんと釘鈀を執つて山崖に駈け登り、潑妖怪疾く出で來つて我が手列を見よと呼はりければ、二魔大いに怒り、鎗を擧つて駈け來り、兩個崖上に在つて相戰ひ、未だ十合に至らざるに八戒既に力疲れ、身を轉じて逃げんとするを、二魔快く鼻を伸べて捲き住む。衆妖吶と鯨波あげて洞中へ扯回りけり。三藏遙に是を見て、悟空快く他を救へと曰ひければ、行者笑つて曰く、師父も甚だ偏心なり、我が擒へられたる時は些も念に懸け給はず、他一度捉へらるれば却つて這樣に慌得て給ふは何事ぞや。三藏曰く、儞が擒へられしを我何んぞ念に懸けざら

んや、思ふに儞は能く變化をなし、管ず身を破るに至らず、他は生得愚なれば妖精が手を脫るゝの智なし、儞快く救ひ來れ。行者則ち雲に駕り空中を走りつゝ思ふやう、彼獸子我を死したりと咀ひたり且渠に苦みをさせて然して後救はんと、一個の蟭蟟蟲と變じ、洞裡に飛び行けば、不便や八戒、手脚を拴縛れ後園の池の中へ浸し置かれたり。行者是を見て、前日沙僧が說話に他私房銀を潛し持てりと云ひしが、不知那處に匿し置きたるや、且他を一睹驚して取出ださせんと、則ち八戒が耳の際に飛び行き、〻怕醜氣なる聲を作り、猪悟能々々〻と呼びければ、八戒怪みて曰く、我が法名を呼ぶは唯なるや。行者曰く、我は冥途の使なり、五閻王の命を受け儞を迎へに來りたり。八戒大に驚いて曰く、長官且歸りて五閻王に奏させ給へ、五閻王は我が師兄孫悟空と甚だ好敎なり、師兄の面に愛て〻一兩日を待つて給はるべし、頓て妖精等が師父を捉へ來りし時、師父と一同に往き候はん。行者曰く、五閻王已に儞を三更死と住定め置き給へども、我方便を以て一日を延引すべし、但し我今より外の處に往きて儞が代りの別人を伴ひ歸らんと思へども盤纏を持ち來らず、今腹中餓えたり、儞定めて盤纏有るべし些我に與ふべし。八戒曰く、我は是出家人、怎麼ぞ盤纏有らんや、別人に問うて要め給へ。行者曰く、汝已に盤纏なし、我外に行く事能はず、然らば儞に繩を掛けて扯き歸るべし。八戒慌得て〻、

長官且繩を出し給ふな、長官の索は追命繩とか云ひて、是を掛くれば則ち息絕ゆると聞けり、我此幾年上積來置きたる覩錢四五錢耳の裡に有り、我今綱められて手を動す事能はず、長官手親取り出し給へ。行者則ち他が耳の裡を搜れば、果而四五錢の銀子あり。行者是を取出し、堪へかねて哈々〻と笑ひ出し本相を現しければ、八戒是を見て、天殺的の弼馬溫、今此困苦の場處にて人の銀子を偽り奪ふやと牙を咬んで罵りけり。行者打笑ひ、財は是小事なり、我且儞が命を救はんとて、鐵棒を擧つて他を池より挑げ出し、縛めを解き放てば、八戒歡喜び、行者と俱に洞門に跑り出で、門の一邊に釘鈀の捨て〻有りけるを尋ね取りて門を出でんとする處を、許多の小妖是を見附け、遮さじと追ひ來る。兩個釘鈀を廻し棒を揮ひ、當るを饒倖打ち殺し、遂に門外に走り出てたり。二魔是を聞いて大いに怒り、鎗を擧つて門外まで追ひ來り、行者と少時戰ひけるが、忽ち本相を現して、鼻を伸べて行者を捲かんと前み倚るを、行者は双手に棒を横たへ、却つて他に腰を捲かせ、鐵棒を鼻の孔へ突き入れければ、二魔慌得て大いに驚き、鼻を伸べて退かんとするを、行者遂に鼻柱を掴み、前に向ひて扯下ぐれば、二魔疼苦だしく、行者に喝ひ率かれ行く。八戒は後より釘鈀の柄を以て他を打ち、兩個の衆奴を見るごとく師父の處に率き歸る。三藏是を見て、徒弟等且他を傷むる事なかれ、他若我等を送りて山を過え

なば命を饒して歸せよと曰へば、二魔地に跪下いて曰く、唐聖僧若わが命を饒し給はゞ、管ず轎兒を以て山を過えさしめ奉らん、更に變改致すべからず。行者曰く、我們師徒は俱に慈悲を最尊とす、然れば儞が言に從ひて命を饒し返すべし、這般倘變改なさば再度命を饒じがたしと、遂に放ちて歸しける。二魔は師徒に向ひて拜謝し、急ぎ洞中に馳り歸り、有りし事ども仔細語り、怎麼はせんと議しけれども、衆妖個々默然と一言を出す者もなし。其時三魔上前み出でゝ、我一個の謀計あり、恃ず唐僧を捉ふべし、謀計の次第は這樣々々と仔細に示敎しければ、老魔、二魔大いに歡恰び、急ぎ衆妖に命じ一挺の轎兒を擔げさせ、三個の妖魔つき添ひて三藏の處に到り、當下送り奉るべしと個々跪下いて云ひけるにぞ、三藏は謀計とは夢にも知らず、遂に轎兒に坐し給ひ、行者、八戒、沙僧等は後に附添ひ、三個の妖魔先に上前み、崖上に登りて急ぎつゝ、一日一夜に四百餘里の道を過ぎ、已に獅駝國の城地に至りける時、三魔忽ち方天戟を擧げて孫行者を刺さんとす。行者急に身を轉じ、鐵棒を振つて相戰ふ。老魔、八戒に斫つて懸り、二魔、沙僧に打つてかゝる。八戒、沙僧、釘鈀を擧げ寶杖を廻し個々勇を震つて戰ひける。環て計りし事なれば、轎兒を擔きたる小妖ども、飛ぶが如くに城門に至り門を排けと呼はりければ、門を開いて許多の小妖群り出て、三藏を城中へ迎へ入れ、其餘の小妖等は

白馬を牽き行李を擔ひ、個々城中へ入りにけり、三個の徒弟等是を知らず、只管戰ひ居たりけるが、八戒早く力疲れ身を回して逃げんとするを、老魔直に口を開き八戒を咬み止め、城中に飛び入り、小妖等を呼んで細縛めさせ置き、又出て來りて二魔を援けて戰ひ、終に沙僧を捉へ城中へ扯回れけり。行者は兩個の師弟が捉へられしを見て、急に雲に駕つて脫れけるを、三魔本相を現し翅を伸べて逐上けたり。原來行者が觔斗雲は一度放つて十萬八千里を去ると雖も、此三魔が翅は一度煽げは九萬里を飛ぶ、二度煽げは十八萬里を去く。此故に忽ち空中に在りて追及き、終に行者を掴み、飛回つて城中に入りにけり。

七七　群魔欺二本性一　一體拜二眞如一

三個の妖魔城中に歸り入り、唐僧四衆を捉へたれば、是を蒸熱して喫ふべしと、小妖等に命じて庭上に大いなる鍋籠を居ゑ、其中に水を汲み入れ、上に鐵籠を重れ、且八戒を下の一隔に裝り入れ、沙僧を第二隔に入れ、行者を第三隔に裝り入れ、第四隔に三藏を裝り入れ、乾柴を迎び火を燒かせ、湯を湧らせて蒸殺さんとしたりける。其時行者鐵籠の中に在つて一根の毫を拔き、假に行者に變じさせ

鐵籠の裡に住め置き、我が身は隱身の法を以て密に空中に飛登り、雲端に在つて遙に小妖等が立騷ぎて火を燒くを見て、若湯の湧滾りたる時は師父は乍ち命を失ひ給ふべし、且快く是を救はんと、咒語を念へて北海龍王を呼び出し、此一條を仔細語り、唐僧を守護し給はれと賴みければ、龍王諾んで承諾り、頓て身を一陣の冷風と變じ鍋籠の下に飛入り、火氣を抑へて昇らしめず、斯くとは知らず老魔十個の小妖を呼んで、倆們輪流に火を燒きて些も怠慢る事なかれ、我等是より略々安歇んで、明朝蒸熟したる時麗醋を調へて空心へ受用すべしと、三個の妖魔は個々寢宮に退きけり。行者空中に在つて是を見屆け、頓て十根の毫毛を拔き睡眠蟲と變じさせ投げ下し、十個の小妖の面に一隻づゝ住らさければ、十個の小妖忽ち坐睡り、前後も知らず倒れ臥しぬ。行者則ち鍋籠の一邊に飛下り、鐵籠を開いて師徒三個を救ひ出だす。三藏はじめ八戒、沙僧も大いに驚き、且懼怡び、偖は悟空が眞身は外に在りけるかと益々行者が神通を感じ、頓て白馬と行李を尋れ出だし、前後の門は小妖等が護り居て脫れがたからん、我等師父を援けて牆頭を越えて逃るゝに如かじと、行者且牆に登り、上より師父を扯き上ぐる。八戒、沙僧は下より推し上げんとしたるが、三藏災星未だ除かず、此時三個の妖魔忽ち睡を覺し、火燒の小妖を呼びけるに、一個も答せざりければ、怪みて鍋籠の邊に立出で見れば、小妖等

前後も知らず熟睡し、鍋籠の下に火の氣もなく、却つて鐵籠みな打反り、唐僧等も在らざりければ、妖魔大いに驚き慌得て、偖は唐僧を逃したり、快く來つて捉へよと呼はりけり。許多の小妖一齊に起き出で來り、火把を取り燈籠を照し、城中悉て白晝の如く、四面に別れて查尋れ廻る。老魔終に三藏を見着け、忽然として牆の下に走り至り、二魔、三魔も續いて來り、再旋三藏、八戒、沙僧を生擒り、許多の小妖是を扯立て裡に入りて、八戒、沙僧は兩處の柱に綑縛めつけ、三藏は皇宮の後邊なる錦香亭の裡に置し置き、堅く鎖して守らせけり。行者は已に牆の上に在りし故、急に雲に乘つて身を遁れ妖精が總て裡に入り城中悉靜りたるを見て、又雲を下り城中に入り、又小妖の傍に變じ、師父の在する處を查尋ぬるに、唯八戒、沙僧は柱に縛められて在り、師父は却つて見え給はず、行者頓て一個の小妖を呼びて、鄙に大王の捉へ給ひし唐僧は奈何なりしやと尋ぬれば、小妖答へて、我も是を知らず鄙に近士の說話を聞くに、大王又孫行者が來り奪ひ行かん事を怕れ、交生食し給ひし由なり。行者是を聞き、又雲に駕り城外に出で只管泪を流しけるが、密に思ふやう、此事總て如來の爲業なり、他極樂世界に居住し、暇に任せて三藏に經を遣らんと作言す、若實に東土へ經を傳へんと思はゞ、他方より送り遣すべき事なるを、却つて我們に來り要めさせ、千山萬水の艱難を歷、今日爰に至つて終に命

を失ひたり、我今如來の處に行きて師父既に失せ給ひし事を告げ、我が頭の金箍を外し、故鄉花果山に歸るべしと、忽ち觔斗雲に打跨りて西方に向ひて飛び行き、須臾の間に靈山に至り、寶蓮臺に近着き如來を拜し、泪を瀧の如く流し、唐僧の妖怪に喫はれたる事其外の事ども仔細に語り、萬望は大慈悲を以て我が頭の金箍を拔かせ給はるべしと涙に咽びて訴へければ、如來笑つて曰く、御心を惱ます事なかれ、彼妖精神通廣大なり、我惠眼を以て彼妖精を見るに、老魔、二魔、ともに皆主人有り、彼三魔は却つて我と些の親あり。行者曰く、其親といふは、如來の父母なるや母黨なるや。如來曰く、天地開け初りし時萬物盡く生ず、其中に獸の類あり、禽の類あり、獸は麒麟を以て長とし、禽は鳳凰を以て長とす、鳳凰又交合の氣有りて孔雀、大鵬を生ず、此孔雀出世の時人を喰ふ事甚しく、四十五里の間の人民を一口に吸ひ入れたり、我其時雪山に在りて丈六の金身と成りし時、又他が腹の裡に吸ひ入れられ、肛門より出でゝは我が金身を汚さん事を怕れ、依て他が背上を劃さて潛り出で、靈山に登り他が命を傷らんと思ひしかども、諸佛來りて會し、孔雀を傷る事我が母を傷るに等しと勸解め住るむ故、遂に他を靈山に住め置き、佛母孔雀大明王菩薩と號したり、今獅駝嶺の三魔は彼大鵬にて孔雀と一母なり、此故に我些の親あり。行者笑つて曰く、如來曰ふごとくならば、如來は却つて妖

精が甥に有らずや。如來曰く、我妖精に親因あれば、我自ら往きて彼を降伏すべしとて、阿難、迦葉に命じて五臺山の文殊菩薩、峨眉山の普賢菩薩を召し給ひ、此二尊を從へて獅駝國に向つて出で給へば、行者も同く雲に駕り後に從ひ走りける。不多時獅駝國の城地に至りければ、行者且雲より下り城門に立つて高く呼はつて曰く、槃斎早く出でゝ孫悟空が棒を領けよと罵りけり。三個の妖魔是を聞きて、個々器械を取つて一齊に駈け來る。行者三個を對敵にして少時戰ひ、頓て戰ひ負けて空中に逃げ昇りて如來の金光の裡へ隱れける。三個の妖魔も雲に乘りて逐上け來りけるが、忽ち三尊の佛菩薩の空中に立ち給ふを見て、老魔、二魔大いに驚き、彼潑猴怎麼して我們が主公を請じ來りしやと、急ぎ逃げんとする處を、文殊、普賢の二尊御聲高く、畜生怎麼ぞ歸り來らざるぞと喝り給へば、兩個の妖魔器械を投げ捨て身を搖すと見えけるが、忽ち本相を現し、老魔は青獅、二魔は白象と成りにけり。彼三魔は是をも怕れず、行者を捉へんと近着きけるを、如來手を擧げて指さし給へば、他も終に本相現れ一個の大鵬金翅鵬となり、一線の樓を翅に掛けられ、再度遠く飛ぶ事能はず。行者其時金光の裡より立出て如來を拜して曰く、佛爺々今妖精を降伏し給ふ事歡喜ばしと雖も、已に師父を妖精等に喫はれ、我今怎麼とも爲る事なし。大鵬牙を咬んで怒つて曰く、倜潑猴這樣の猖人を請ひ來り我們を困

苦め、却つて我們に師父を喰はれたりと僞るや、倆が老和尚現に今錦香亭の裡に在り、誰れか敢て仙を喫ひたるや。行者是を聞いて大いに歡喜び、急ぎ如來に拜謝すれば、如來遂に二菩薩と俱に三個の妖魔を引領れ、紫雲を放つて西天に飛び去り給ふ。行者は直に城中に飛下りけるに、小妖等は三個の妖魔降伏せられしを見て、大家四方に逃げ散り失せて一個も止住居者なし。行者遂に八戒、沙僧が索を解きて三個とも後宮に入り、錦香亭に至り鎖を穿ちて裡を見れば、果して三藏此處に居給ひけり。三個走り入りて細縛を解きて助け出し、四個個々歡恰にたへず、行者仔細に如來の妖精を降伏し給ひし由を語り、多時城中に在りて休息し、飯を安排へて個々喫し、而して復城を出で、西方に向つて急がれたり。

七八　比丘憐レ子遣二陰神一　金殿識レ魔談二道德一

三藏師徒は獅駝國の難を遁れ、數月を經て又一座の城地に至る。市街最も賑しき中に、家々の門毎に總て一個の鶯籠あり。皆五色の絹を以て上を遮幔ひたり。三藏是を見て、怎麼やらんと怪み給へば行者、我今見屆け來るべしと忽ち蜜蜂兒と變じ、彼絹の裡に飛び入りて、列れて八九家を窺ひけるに

盡く五六歳許の孩兒を鶯籠の裡に入れ置きたり。行者頓て飛び歸り來り師父に此由語りけれども、是又何とも分たず。師徒四人彌々怪み行く處に、遂に金亭驛館にいたる。三藏驛丞に見えて、朝に入りて關文を換へん事を求め給へば、驛丞曰く、今日已に晩に及んで朝に入り給ふ事能はず、明日を待つて入朝し給へ、今宵は此衙門に宿し給ふべしとて、客房に入れて歇ませけり。三藏深く拜謝して其後驛丞に問うて曰く、此城中を見れば門毎に小兒を籠に入れ置きたり、彼は何の僞なるや。驛丞低首きて曰く、長老是を問ひ給ふ事なかれ、明朝急いて西に赴き給へ。三藏是を聞いて愈々怪み、再三仔細を問ひ給へば、驛丞則ち人を避け、怕々焮々いて語つて曰く、此國は原比丘國と號し候を、近比民間の謠言によつて小子城とよぶなり、此三年前、一個の老者一個の美女を伴ひ來り國王に獻ず、國王此美女を深く寵愛し給ひ、遂に彼老者を國丈と稱し、彼女子を美公と號け給ふ、是より國王晝夜歡樂を貪り酒色に溺れ、近き頃は精神疲れ苦み大醫院の良法を進むれども更に驗なし、彼國丈、我海上の仙方ありとて、十洲三島に去つて藥を求め來り、其藥引に千百十一個の小兒の心肝を用ひ、是を煎じて藥を服すれば千年不老の功有りと國丈が敎に任せ、國中へ命を傳へ、五六歳の孩兒を求め給ふ、彼籠の裡なる小兒は則ち藥引に用ひん僞なり、人家の父母は王法に懼れて表面に悲み歎かずと雖も、内心

想ひ計り給ふべし、依て此城を小子城と號け候、是國王無道の事なれば、長老明日入朝し給ふとも等閑ず漏し給ふ事なかれと、仔細と告げ終りて驛丞は退きけり。三藏是を聞きて、此國王怎麼ぞ道樣に無道なる、許多の小兒の性命を斷つて其身一個の壽を延べんとするやと、只管涙を流し給へば、沙僧勸解めて曰く、師父悲み給ふ事なかれ、極めて彼國丈一個の妖邪にて、人の心肝を食はんと思ひ、法を設けて國王を欺きたらんも計りがたし。行者曰く、悟淨が言大に理あり、我明日像を變じ師父に跟ひて朝に入り、彼國丈を窺ひ、若妖邪ならば他を捉へて國王に示し、小兒等が命を救ふべし。三藏曰く 倘若此小兒等が命を救ひ得ば天大の功德なるべし、唯怕らくは國王理非を察せず、却つて我を罪せば奈何。行者曰く、我自ら爲法あり、今宵且此小兒を外に匿し置き、明日其理の宜きに從ひ事を計ふべしと、行者直に半空に飛昇り、一聲の唵淨法界を唱へ、城隍土地神幷びに揭諦、功曹等の諸神を呼び集め、此比丘國王許多の小兒の心肝を取つて藥引と爲さんとす、我が師父此小兒等を救はん事を思ひ給ふ、萬望は列位彼小兒等を山林に匿し、一兩日食を與へて守護なし給はるべし、國王を正果に勸解めて後、個々返し給はるべしと央みければ、衆位の神聖總て許諾し、忽ち一陣の陰風を發し、滾々として城中に降り、彼小兒們を籠と俱に壁く攝り去り行方も知れず成りにけり。行者則ち雲を降り、師父

に斯くと告げ入れば、三藏大いに歡怡び、再三行者を賞謝しけり。其夜は個々安殿し、天曉に至り、三藏衣を整へて朝に入り給ふ。行者は蟭蟟蟲と變じ、師父の毘盧帽子の上に住り居り、三藏、朝門外にて黄門官に見え、貧僧は東土大唐より西天に至り經を取るの僧なり、今關文を換へん爲王城に至れりとて、仔細に來歷を述べ給へば、黄門官入りて斯くと報ず。國王旨を傳へて唐僧を殿上に宣し登らせ關文を見終り、寶印を用ひて三藏に返し與へ給ふ。時に忽ち當駕官上前み出で、國丈爺々來り給へりと奏すれば、國王急ぎ龍床を下り身を躬めて出迎ふ。三藏則ち一邊に座を避けて密に國王を見給ふに、相貌疲衰へ精神倦怠りて、纔に骸骨を住めたる形狀なり。不多時國丈殿上に至り、國王に禮をも爲さず、端然として繡墩の上に坐し、頭を回して三藏を看、此僧那國より來れるやと問ふ。國王答へて曰く、是は東土大唐より西天に至り經を求むるの僧なり、關文を換へん爲今茂に來れるなり。國丈笑つて曰く、西方の道何の好き處有つて那國に赴くや、自古來唯道獨稱尊と云へり、他が佛門寂滅の如きは、唯用なき功を貪すのみ。三藏是を聞き給へども敢て一句の應答も爲し給はず、國王に拜謝し階下に歩み下り給へば、行者則ち師父の耳に飛び入り、焰々に告げて曰く、師父、彼國丈は妖怪なり師父は且驛館に返り給へ、我爰に住り居て渠が消息を見るべしと云ひ捨てゝ赤殿上に飛び歸り、窃聽

屏の上に住り居る。三藏は直に朝門を出で驛館に歸りて待ち給ふ。其時五城兵馬司慌忙しく入朝し、國王の前に奏して曰く、昨宵一陣の冷風吹き來り、家々の小兒龍と俱に刮去り一向に踪跡知れ候はずと告しける。國王大いに驚き、今日午の刻に彼小兒が心肝を取り、國丈が仙藥を服さんと思ひしに、計らずも冷風に刮き去らるゝ事、是天より朕を滅し給ふ處なり。國丈笑つて曰く、是天より陛下を滅するに非ず、却つて長生を與へ給ふ處なり、我今日一個の絶妙の藥引を見る、千百十一個の小兒の心肝より勝れる事萬々なり、陛下此引子を以て仙藥を服し給はゞ、壽を延ぶる事天地と同じからん。國王是を聞きて其故を問ひ給へば、國丈答へて曰く、當今來りし東土の唐僧は十世修行の眞躰、元陽の氣未だ漏れず、小兒の心肝に比ぶれば萬倍の功あり、他今歸つて驛館の裡に在るべし、陛下快く羽林衛官軍を遣し、彼唐僧を捉へ心肝を要め給へ、必ず脫し給ふべからず。國王滿心に歡喜び、遂に是に從ひ、急ぎ旨を傳へ羽林官を召し給ひ此事を命じ給ふ。行者是を聞き濟し、急に殿上より飛び出で驛館に飛び歸り、本相を現し、師父亦 醐 發りたりとて今聞きたる動靜を件一に語りければ、三藏聞いて大いに驚き、戰々恟々として魂を失ひたる如く、呆々抑々ぞ居たりける。行者曰く、此難を脫れんと爲るには、師父を徒弟となし、徒弟を師父と爲さば管ず何の患か有らん。三藏曰く、猶果而我を救は

ば、何ぞ倆が徒弟と爲るを恨みんや。行者曰く、然らば快く準備を爲すべしと、且八戒に快く泥を些取り來れと云ひければ、八戒、心得たりと釘鈀を取つて庭の土を突崩し、尿に交ぜて和げ持ち來りける。行者心中不平と雖も、急卒の間なれば沒奈何、この泥を將つて自己の面を掩作し、一個の猿の臉を印し下け、夫を亦三藏の臉に掩ひ、管ず辭を出し給ふ事勿れと、眞言を念へ一口の仙氣を吹掛けゝれば、三藏忽ち行者が像と變じたり。行者又其身を搖して三藏の模樣と變じ、纔に準備整ひける時、卒然に近邊騷しく、三千の羽林軍早くも驛館を取圍み、驛丞が指引にて一個の錦衣官客房に入り來り唐長老、我が國王の請待し給ふ、疾く〳〵來れと呼はりけり。此時行者の假唐僧出で迎ひ、錦衣大人最畏けなくも降臨し給ふ、貧僧何の德か有つて陛下の請待に逢る事、惶寒何ぞ此上有らん、今大人と俱に入朝し、陛下を拜し奉らんと、直に客房を立出づれば、羽林軍士前後左右に圍繞して急いで朝中に還りけり。

七九

尋レ洞求レ妖逢二老壽一　當レ朝正レ主救二嬰兒一

羽林軍士等假唐僧を扯把れて朝中に歸り、殿前に至りければ、假唐僧階下に立つて高く呼はつて曰

く、比丘王貧僧を請ひ給ふは怎麼の要め給ふ事あるや。國王笑つて曰く、朕偶々一病を得て久しく癒えず、僥倖に國丈朕に一方を賜ひ、今長老の心肝を要めて引子となし此藥を服せんと欲す、長老敢て是を賜はらば、長老の爲に銅堂を建立し、永く香華を國に傳ふべし。假唐僧曰く、是甚だ易き事なり貧僧原幾個の心肝あり、不知國王今何色の心肝を要め給ふや。國丈一邊より指定して曰く、我只倆が胸中の黑心を要む。假唐僧曰く、然らば早く刀を取り來り給へ、我今胸を割開き、若黑心有らば謹んで奉らん。國王是を聞いて當駕官に命じ、一把の短刀を取り來らせ唐僧に與へける。假唐僧刀を手に把り衣服を解き開き、刀を胸に剛的と突立て、肚の皮を割開き、五臟を掴んで扯き出だす。國王はじめ衆位の官人是を見て、個々色を失ひ膽を冷し、面を背けて居たりけり。假唐僧臟腑の中より幾個の心肝を取り出し、衆官を呼んで點檢せしむるに、只是紅心、白心、利名心、嫉妬心、我慢心抔は有れども、更に一個の黑心なし。假唐僧其心肝を取つて原の如く肚の裡に收め、忽ち本相を現し庭上に立つて呼はつて曰く、陛下全く眼有つて珠なし、彼國丈一個の黑心あり、何ぞ他が心肝を要めて藥引と爲し給はざるや。國丈、行者が本相を看て大いに驚き、倆は天宮を鬧せし孫悟空ならずやと云ふと思へば忽ち殿上より走り出で內院に飛入り、彼美公と諸俱に一道の寒光と化して那里ともなく消え失せ

けり。國王群臣是を見て、僧は國丈は一個の妖精にて、却つて此長老は眞の神僧にて有りけりとて、急ぎ行者を殿上に請ひ登らせ、國王問うて曰く、長老怎麼ぞ這樣に像を改め給ふや。行者笑つて曰く今朝來りしは則ち我が師父唐朝の御弟三藏法師、我は其徒弟孫悟空と云ふ者なり、尙兩個の徒弟猪悟能、沙悟淨、師父と俱に驛館中にあり、樞に陛下妖邪が言を信じ給ひ、吾が師父の心肝を要め給ふ、此故に我師父の像に變じ來りて妖精を退けたり。國王是を聞き、急ぎ衆位の官人に命じ唐僧を請じ來らせ給ふ。衆官個々驛館に至り、師徒三個を迎へ來る。行者急ぎ殿を下り、師父の面に一口の仙氣を吹噴けゝれば、三藏忽ち眞の像に返り、師徒總て殿上に登り、國王に相見ゆ。行者、國王に向ひ、彼妖精が巢穴を知り給はずや。國王答へて曰く、初め他が來りし時、其住處を問ひたるに、此南七十里に一座の柳林坡あり、其裡の淸花莊に住すと云へり、朕不才にして深く他に狂惑され、今日また他に欺かれて罪を法師老佛に得たり、萬望は神僧大法力を顯し、後日の患を除き、彼妖怪を降伏し給はゞ、生生世々大恩を忘却るべからず。行者笑つて曰く、我寔に陛下に告ぐべし、彼鷄籠の裡の小兒は我が師父の慈悲を以て我に匿さしめ給ひしなり、陛下且師父と俱に少時安に待ち給へ、我八戒と俱に那里に去き妖精を捉へ來るべしと、直に雲を發して空中に飛び去りければ、八戒も扯續いて雲に駕り南を指

して飛び行きけり。國王群臣是を見て、我們總て唐僧羅を異形の長老なりと怪みたりしが、偖は眞佛臨凡なりと一齊に空に向ひて拜しけり。行者、八戒は七十里餘馳り行き、雲を下りて見れば、一股の清溪あり、澗の一邊に千萬株の楊柳崖を挾みて排列し、却つて清花莊は何處に在るを見ず。行者則ち庵宇眞言を唱へ當方の土地神を呼び出し、清花莊は那里に有りやと尋ねければ、土地神答へて曰く、當方に清花莊と云ふなし、唯一個の清花洞あり。行者曰く、其清花洞は那里に有りや。土地神曰く、大聖、南の岸に九叉頭に分れたる一顆の楊樹あり、其楊の下を左に三遍右に三遍轉りて、兩手を以て樹を撲つて、門を開けと三聲高く呼び給はゞ、則ち清花洞現れ出づべし。行者是を聞きて且土地神を歸し、八戒と俱に南岸に尋ね至れば、果的一顆の楊樹九條に分れたる有り。行者、土地神の敎へしごとく、左に三遍右に三遍轉りて、手を以て彼楊樹を拍つて、門を開けと呼はりければ、忽ち一聲の响あり て兩扉の門現れ、門內の石屏の上に清花仙府と四個の大字あり。行者徑に門を開いて石屏の後に至れば、彼妖精一個の美女を抱きて裡に坐し居たるが、行者を見て大いに怒り、急に蟠龍拐杖を取つて行者を打たんとす。行者鐵棒を以て架住め、兩個洞外に跳り出で、千變萬化して相戰ふ。八戒彼の九叉の楊樹を押倒し、釘鈀を舉げて突き碎きければ、鮮血滾々と迸り、嚶々として聲を發す。妖怪は行

者と戰ひしが、終に力疲れ敵する事能はず、身を搖して一道の寒光と變じ、東に向ひて逃げ去らんとす。時に忽ち空中に南極老人現れ給ひ、彼寒光を推住め、大聖少時待ち給へ、天蓬逐ふ事を休めよ。八戒笑つて曰く、肉頭兒寒光を罩住めたるぞ、極めて妖怪を捉へたらん。南極壽星曰く、妖怪已に爰に在り、萬望は兩公他が命を饒し給へ。行者曰く、南極壽星と相親しむは怎麼なる緣ぞ。壽星笑つて曰く、他は原我が家の白鹿なり、前日東華帝君我が家に來り給ひ、我と碁を圍みて戲れしが、其間他を園中に放ち置きしに、他間を窺ひ爰に來りて妖怪となれり、他出て、より歸らざる事既に三日を過ぐ、天上の三日は下界の三年、我今漸々に尋ね得たり。行者曰く、已に壽星の物ならば我等敢て他を傷らじ、快く領れて歸り給へ。壽星是を聞いて兩個に拜謝し、寒光を放ち一聲を喝し給へば、遂に一隻の白鹿となる。壽星則ち此鹿に打跨り歸らんとし給ふを、行者曰住めて曰く、今比丘國王此妖精に欺かれ病を得て癒えず、萬望は彼國王が壽を延べ給へ。壽星曰く、我鹿を尋ねに出でし故丹藥を持ち來らず、唯懷中に三個の棗兒あり、是を倆に贈るべし、國王に與へて疾く病を癒やせよとて、取出して與へ給へば、行者是を受け收め、遂に壽星に扯別れ、八戒と俱に又清花洞に歸り入れば、彼美人戰戰兢々外面に逃げ出でんとするを、八戒馳り寄つて一突につき殺せば、忽ち本相現れて白面の狐と成

りにけり。行者是を見て、是國王のなしたる美后なれば、拿り歸りて他に見すべしとて、死狐を手に扯着げて、八戒と俱に頓て比丘國に飛び歸り、殿上に至り國王、三藏等に見え、壽星が妖精を治め給ひし事を語り、彼國丈は一個の白鹿にて、此狐は則ち美后なりとて見せければ、國王は大いに恥ぢ入り、且歡喜び、衆位の官人等感歎に堪へず、忽ち東閣を開いて素宴を安排し、國王手親杯を捧げて三藏師徒に進め、妖怪を降し小兒を救ふの恩を謝し給ふ。行者又壽星より給はりし棗兒を國王に贈り與へければ、國王大いに歡喜び、直に是を服し給へば、病立地に癒えて精神健固に成りけるにぞ、益深く恩を謝し、只管四個を接待しけり。斯くて三藏は國王に辭詰を告げて西方へ進まんと曰へば、國王止む事を得ず、唐僧を龍車に坐せしめ、君臣后妃盡く城門を送り出でける時、忽ち空中に聲有りて、大聖前日央みに倚りて小兒等を預りおきたり、今日大聖功成つて妖怪を平らぐ、依て今返し送るなりと云ふかと思へば、破破落落と千百十一個の小兒を驚寵と俱に城門の前に落しける。三個の徒弟是を見て、城中の百姓ども早く來つて小兒を受取れよと呼はりたり。城中の百姓等此事を聞くよりも皆我先にと群り來り、個々我が兒を尋ね取り、只管に歡喜び騒ぎ、笑ふも有れば舞ふも有り、是總て唐僧爺々の恩德なりと三藏の車を扯回し、亦徒弟等が異形なる姿をも怕れず、八戒を肩に駕せ沙僧を

手車に坐せしめ、行者を頭に頂き、一個に二十人三十人づゝ取着き、馬を牽き荷を擔ひ城中に歸り入る。其形勢言語に絶す。國王も是を制する事能はず、三藏師徒沒奈何再度城中に回り入り、家々の供養を受け、一月餘逗留し、再三に辭退しつ、漸々に別を告げ、遂に西方に進み給ふ。

八〇　妬女育レ陽求ニ配偶一　心猿守レ主識ニ妖邪一

話表三藏師徒は只管西に進みける處に、一時一派の黑松大林の中に入りて、半日餘行けども未だ林を出づる路を見ず。三藏則ち馬を止めて曰く、此林中僥倖に閑雅なり、我少時馬を憩むべし、儞等暫を求めて來れ。行者領承りぬと應へて、且師父を馬より下し松陰の下に坐せしめ、自ら鉢盂を取つて雲に打跨り空中に飛び行きけり。八戒沙僧も馬を繫ぎ擔兒を下し、林中を徘徊して其處爰遊び歩きけり。三藏は獨樹下に在りて多心經を念へて居給ひしが、忽ち聽く、彼處に人の叫ぶ聲して、助け給へ助け給へと呼はる事頻なり。三藏大に怪み、斯かる深林の中に何人か在つて斯樣に叫びぬるや、是管ず虎狼の類に出遇ひたる者ならんと、彼聲を視的に尋れ行き給へば、果して一株の大樹の下に、一個の美貌女子、上半身を裸藤を以て松樹に細縛め、下半身を土裡に埋め置きたり。三藏是を看て大に歎じ

て曰く、女菩薩何事有りて斯く細縛められ給ふや。彼女子泪を流し答へて曰く、我が家は爰を去る事二百餘里、貧婆國と云へる處なり、此程清明の時節なれば、我が父母諸人と倶に野に出で、遊びしに忽ち一夥の强偸現れ來り、鎗刀を取つて斬つて廻る、我が父母を上首め諸人我先にと逃げ去りぬ、我幼に依りて狼狽へて地に倒れ、遂に强盜に捉へられ、此山中に扯き來り、他等個々我を妻にせんと云ひて亦爭を做發し、因て我を斯く林中に捨て置き、四散に別れ去つて往方を知らず、我爰に在る事已に五日五夜なり、萬望くは老師父大慈悲を垂れ給ひ、我が一命を救ひ給はゞ、九泉の下に在りても更に大恩を忘れ候はじ。三藏是を聞いて覺えず泪を流し、徒弟等那處に在ると呼び給へば、八戒、沙僧、是を聞き着け急ぎ師父の許に駈け來る。三藏則ち八戒に命じて、彼女子が綱縛を解き放たしめんと爲給ふ處に、行者空中より是を看て、急ぎ林中に飛んで下り、早く八戒が耳を取つて扯倒しければ八戒驚き罵詈つて曰く、師父今我に命じて這女兒を救はしめ給ふを、倆怎麼ぞ我を引倒すや。行者曰く、師父、此女子を解く事勿れ、他は是一個の妖精にて我們を欺かん爲に來れるなり。三藏是を聞いて、悟空が云ふ言平生に違背ず、既に其如くならば我も亦是を不願とて、畢に八戒を止めて立去り給へば、行者大いに歡喜び、急ぎ師父を扶けて馬に跨らせ、四個一齊に四を指して進みけり。原來這女

兒行者が盲に違はず一個の妖精なりけるが、牙を咬んで行者を恨み、此幾年孫行者が神通を聞き傳へしが、果然虛ならず、彼唐僧は童身より修行し一點の元陽を泄さず、他を拿へて配合を做し太乙金仙と成らんと思ひしに、不期這猴孫に識破られたり、我再び法を設けて他を呼び返さんと思ひ、唐師父那ぞ人の一命を救はざるぞ、這樣の薄情意を持ちながら、却つて佛を拜せんと思ふは何事ぞやと、風に隨ひて兩三聲呼はりけり。三藏遙に是を聞いて馬を住め、悟空、倆彼女子が云ふ言を聞け、他がいふ處大いに理あり、人の一命を救ふ事、七級の浮屠を造るより勝るとかや、我再び返りて彼女兒を救ふべしと亦馬を轉廻し給へば、行者打笑ひ、師父亦例の慈悲を發し給ふ、我も亦師父を治すべきの良藥なし、若强ひて是を住めは、師父亦我を怒り給はん、唯心に任せ給へとて個々原の處に立歸り、三藏、八戒に命じて遂に彼女子が綱縛を解きとらせ、釘鈀を取つて他が半身を穿り出だせば、彼女子大いに懽喜び、立上りて衣裳を整へ三藏を禮拜しけり。三藏は此女子を同伴ひて又西に向ひて林中を步み出で給ひける時、悟空は只管笑つて止まず。三藏の曰く、這潑猴怎生ぞ斯の若く笑ふや。行者が曰く、師父、今佳人に逢ひ給ふ、今宵は好樂あらん。三藏是を聞いて怒つて曰く、倆亂說を云ふ事なかれと。此時天色漸々晚に及び、松林の盡くる處に一座の殿閣現れけるにぞ、三藏徒弟們を呼んで那

里は管ず一座の寺院と見えたり、我且那里に往きて宿を要むべし、儞們女菩薩を介抱して靜に來れと三藏一個前に進み、山門に立入り、少時彷徨ひ居給ふ時、寺中より色黑く筋骨露れ出でたる道人走り出で、怪氣に三藏を顧り居たり。三藏是を看て暗に怕れ、儞は妖精に在らずや、我は尋常の僧にあらず、東土大唐より爰に來れり、我が手下に降龍伏虎の徒弟あり、我を過ち傘へて却つて儞が一命を亡ふ事なかれと曰へば、彼道人跪下いて曰く、老爺々、我は管ず妖精にあらず、此寺は鎭海禪林寺と號し、我は則ち寺中の香華道人なり、爺々既に遠方より來り給ふ、且這方へ入らせ給へとて、二層の門內へ導引き入れける時、亦一個の喇嘛僧走り出て、三藏の威儀堂々たるを看て大いに懷喜びたる光景にて、三藏の鼻を撫て耳を扯き肩を按み背を撫でゝ、手を携へて方丈に伴ひ入りけり。是は喇嘛僧の人を親む禮なりとかや。三藏已に座に着き、東土大唐より西天に到り經を求むるの緣由を仔細く語り、今夜爰に一宿を過したき由を述べ給へば、喇嘛僧笑ひて曰く、老師父偽りを云ふ事なかれ、東土より西天に至るに、幾萬里の山川を經、又妖精邪鬼到る處總て多し、老師父一人怎生ぞ能く爰に到り給はんや。三藏の曰く、我元來三個の徒弟あり、他等よく路を開き水を渡り、我を守護りて爰に來り唯今俱に門外に在り、貧僧一個怎麼ぞ爰に到る事を得ん。喇嘛僧大いに驚き、我が此所虎狼妖精多く

して夜に入りては絶えて人の往來なし、徒弟們、快く唐長老の高徒を呼び來れと云へば、兩個の小喇嘛兒急いて門外に出てけるが、忽ち驚き馳り歸りて曰く、唐長老の高徒は門外に居給はず、却て三個の妖精一疋の白馬を牽き、又一個の女子一邊に在り、思ふに高徒は已に妖怪に喫はれ給ふならん。三藏打笑ひ、其三個は則ち我が徒弟なり、管ずしも妖怪にあらず、一個の女子は松林中にて一命を救ひ來れる者なり、他們總て怕るべき者に有らず、快く呼び來り給へと曰へば、小喇嘛漸々に心を定め又門外に立出て、不多時三個の徒弟と彼女子を導引いて方丈に入り來りけり。

八一　鎭海寺心猿知レ怪　黑松林三衆尋レ師

鎭海寺の衆僧等、東土より聖僧の來れる由を聞き、方丈に集り來りて三藏に相見え、急ぎ師徒に齋を進め、彼女子を一邊に坐せしめて相陪させつゝ、衆僧們一つには三藏の說話を聞き、二つには彼女子を暗に窺ひ、亦女子を救ひ來れる事などを聞き、已に三更の頃に及びて、彼女子は別に天王殿に臥さしめ、三藏師徒は其儘方丈に安寢せおき、衆僧個々退きけり。明旦に至りて、徒弟們已に馬を備へ行李を收め師父の起き給ふを待ちけれども、三藏只管沉睡して起き出で給はねば、行者則ち師父の枕を

搖し、再三聲呼號しける時、三藏僅に頭を擡げ、我何故といふ事を知らず、頭重く身中疼み、一向に一身動し難しと曰へば、八戒急ぎ手を伸べて師父の身上を摸でゝ曰く、我能く此病を知れり、是昨宵錢數らざる飯と見て餘りに幾碗食ひ過して食傷をし給ひたり。行者曰く、傭愚に亂說を吐く事なかれ、師父既に不快ならば且爰に住り居て、平復を待つて路に出で給ふべしとて、遂に此寺に滯留し、不期も兩三日を過しぬ。一日三藏頭を擡げて悟空を呼んで曰く、此兩日我病に困苦みて曾て問はざりしが、彼松林にて救ひ來りし女菩薩に食を送る者有るやと問ひ給へば、行者曰く、師父自己の病を愼み給へ、他が事を憂ひ給ふ事なかれ。三藏曰く、傭少時我を扶け起して紙筆を取出して我に與へよ。行日者く、師父紙筆を要めて何にし給ふや。三藏泪を流して曰く、我今斯かる病を得て管ず爰に身を終るべし、今一封の書を寫めて此旨を大唐皇帝に奏し、別に又人を擇んで西天に到らしめんと欲す、傭我が爲に長安に登りて皇帝に我が書を獻るべし。行者是を聞いて大いに笑ひて曰く、師父、今少の病あり、忽ち這樣の庶弱き事を曰ふや、假令十分に疾重くとも、老孫冥府に打入り十大閻王を捉へて究問せば、誰か師父の命を要むる的有らん。八戒曰く、師兄斯の若く曰へども人の性命は計り難し、我等且送葬の準備を爲さば可からん。行者曰く、獸子亂話を云ふ事なかれ、傭原故を知らず、師父は如

來第二個の徒弟金蟬長老の轉世にて、師父前世のとき、如來の會下に在つて坐睡をし、左の足にて一粒の米を踏み給へり、此罪に因て今生にて三日の病疾あり、今日過ぎば管す快氣し給はん。三藏曰く、誠に我が病昨日に比すれば同じからず、今日は口裡渴を生じ冷水を得ん事を思ふ。行者曰く、師父水を思ひ給はゞ病已に除きたるなり、我快く水を取つて進らせんと、鉢盂を取つて寺中の香積厨に入りけるが、爰に衆僧總て一處に在り、個々泪を流して居たりけるにぞ、行者怪みて曰く、傭等何を歎くや、我輩が幾日爰に滯留り米薪を費すを憂ふるにはあらずや。衆僧曰く、更に左樣の事に有らず那里よりか妖怪來りて前夜二人の小和尙を取られ、只衣服と骸骨後園に有り、次の夜亦二個の和尙を喫はれ、昨宵又二個を失ひたり、此三日已に六個の和尙を失ふ、傭の師父今病有るに因りて敢て是を告げず、我們此故に只管心を痛め歎くにて候なり。行者是を聞いて曰く、是妖怪の所爲に疑ひなし、我原妖を降し怪みを取るの術あり、傭等が爲に今宵彼妖怪を捉ふべし、管ず費心ふ事なかれ。衆僧此言を聞きて思へらく、他已に唐僧を守護し幾萬里を經て爰に來る、極めて降龍伏虎の手列あらんと思ひ、長老此地方の爲に妖怪を除き給はらば、我輩が爲の再生の僥倖ならんと云へば、彼喇嘛僧が曰く傭等且共盲を住れ、今唐師父病あり、長老若妖精と戰ひ給はゞ、或は唐師父の憂を成さん。行者曰く

院主の言理なり、且師父に告げて商議を做すべしと、頓て水を取つて方丈に行き、師父に聞り與ふれば、三藏只一飲に喫み終り、忽ち神氣暢達し、又兩碗の粥を進め、病勢頓に七分を減じけり。行者是を看て大いに歡喜び、夜に入りて師父の病いよ〳〵快氣に見えければ、則ち、此寺中に妖怪あり、我們爰に滯留る事既に三日、其間に六個の小和尚を捉られしとなり、我今宵他輩が爲に妖精を捉へんと思ひ候なりと告げゝれば、三藏大いに驚き、妖精已に寺内の僧を喫ひ殺す、我們も亦僧なり、兎死すれば狐歎むの道理なり、傭能く心を用ひて妖精を捉へ來れと曰へば、行者歡喜び、唯一個佛殿に至り、十四五歳の小和尚と變じ木魚を敲き經を念へ、妖精が來るを待ち居たり。已に三更の頃に至り殘月僅に影さす頃、忽ち一陣の風颯と發り、蘭麝の香鼻を穿ち、一個の美貌女子忽然と現れ來り佛殿に上り、行者が手を取つて曰く、小長老何の經を念み給ふや、少時後園に來り我と與に交觀して樂をなし給へと、行者が手を扯き去かんとす。是を見て行者心中に想ふやう、僧は幾個の愚僧們、色慾に欺かれて性命を失ひたると覺えたり、我今他を遁さんやと、急に彼女子が手を扯き住め、本相を現し鐵棒を扯つて打たんとす。妖精大いに驚き急ぎ身を退き、兩口の劍を拔き出だし佛殿の前に在りて兩個多時戰ひけるが、妖精忽ち身を轉じて左の脚の鞋を脱ぎ、咒語を念へて本身の模樣と變じさせ、

兩口の劍を使ひて行者と戰はせ置き、眞の身は一陣の清風と化し方丈に飛入り、三藏を攝將つて何地ともなく飛び去りけり。行者は是に心着かず、只管彼女子と相戰ひ遂に妖精を打倒し、又一棒に打たんと爲る時却つて是一隻の鞋と變じけるにぞ、行者是を見て首めて覺り、偖は他が計策に陷りしか、口惜さよと、急ぎ方丈に歸り入りて看れば、師父は既に居給はず、八戒と沙僧と二個茫々然てぞ居たりける。行者曰く、師父は何處へゆき給ひしぞ。八戒、沙僧答へて曰く、今一陣の風至ると思ひしに忽然師父は見え給はず、是皆ず妖怪の爲に捉られ給ひしならん。行者是を聞いて大いに怒り、傭等守護して在りながら何ぞ空然と妖怪に師父を奪はれたるや、且傭們を打ち殺さんと鐵棒を出しければ、八戒慌得て驚き、頭を抱へて身を縮め動き得ず、沙僧は却つて捲簾大將の臨凡にて、事に馴れたる者なれば些も驚かず。行者が前に跪下き、師兄少時待ち給へ、今我們二個を打ち殺さんとし給ふは、再び師父を救はず花果山に歸り去らんと思ひ給ふならん。行者罵つて曰く、我那ぞ水簾洞に歸らんや、唐僧を守護して西天に至るなり。沙僧が曰く、師兄過ち給へり、若我們兩個無くんば、誰か能く馬を牽き誰か荷を擔ひ、誰か又食を造り薪菜を拾はんや、師兄且怒を止めて我們を免し、明朝三個同じく力を合せて師父を尋ねば亦却つて益あらん。行者是を聞きて、理なりと怒を收め心を歸し、然らば明

日傭們と同く力を盡して師父を尋れて救ふべしと云ひけるにぞ、八戒大いに懽喜び、此般の事は絶て我が身に懸りたる事なり、唯我們に任せ置き給へとて、其夜は三個ともに方丈に夜を明し、翌旦個々急ぎ起き出でゝ、衆僧を呼びて昨宵の事を語り、又前日携來りし女子を尋ねるに、已に去方を知らざれば、偖は這女子妖怪にて、師父を奪ひ去りたるに疑ひなしと云ひければ、衆僧等大いに驚き、我等却つて老師父の煩勞を做したりとて、且三個に齋を備めけり。行者が翌三個は、遂に馬を牽き擔を荷ひ、此妖精は前日彼女子の居たりし松林中に往きて尋れば速に知るべしとて、又東に向ひて轉廻し彼松林中に至り、行者則ち咒語を念へて此地方の土地神を呼び出し、此地に妖精在りやと尋ねれば、土地神答へていふ、曾て妖精なし、然れども此正南千里許陷空山無底洞と云ふ處あり、這洞中に一個の妖精住めり、他昨宵一陣の陰風と做りて此地方を過りたり、極めて他洞中に歸りしならん。行者是を聞きて且土地神を歸し去らしめ、八戒、沙僧と諸俱に白馬を率いて一齊に雲に打跨り、少時の間に南方千里に飛び行き至り、一座の大山頭に住り、且八戒に分付けて洞府の有る地方を尋ねけり。

八二　妬女求レ陽　元神護レ道

八戒は山を下り、一條の小徑を求め五六里餘り上前み往きける處に、忽ち兩個の女怪あり、井の邊に水を汲み居たり、八戒是を看て聲を發げて、女怪々々と喚びければ、彼兩個大いに怒り、這和尚甚だ不禮なり、怎生ぞ我們を妖怪と喚ぶやとて、釣桶の棹を把り延べて、八戒が頭を連打に打ちたりける。八戒大いに驚き、頭を抱へて山上に走り返り、長兄此地方の妖精果して勇猛なり、彼山下に兩個の女怪あり、我一兩聲妖精々々と喚びたれは他便ち棹を把て我を打ちたり。行者是を聞いて笑つて曰く、傭已に妖精と呼ばゝ他が怒るは理なり、傭今像を變じ再び他等を伺ひ來れ。八戒曰く、我今像を變じ行くとも亦他們に打たるべし。行者曰く、傭他們を妖精と呼ぶ事なかれ、他輩若我等と同じ年記ならば姑娘と呼び、若老いたらば奶々と呼ぶべし、然らば那ぞ打たるゝ事有らんや。八戒是を聞いて、我早く是を知らば他們に打たれざりしをとて、遂に一傭の黑胖和尚と變じ、再び山の坡下に走り往き、彼の女怪が水汲み在るところに到り禮を施して、姑娘這樣に水を汲んで何にし給ふやと云へば、兩個の女怪笑つて曰く、長老來歷を知り給はず、我が家の老夫人昨宵一個の唐僧を帶れ歸り給ひ、我傭に命じて陰陽交媾の好水を汲ませ、筵宴を安排けて唐僧と親俚を做さん要なり。八戒這事を聞き畢り急に又山上に馳せ返り、師父は既に妖精と親俚を做し給ふ、沙僧疾く行囊を出せ、個々是を取り分

ちて故郷に歸るべしと云へば、行者曰く、獃子亦亂說を做すは那ぞや、然らば我們快く其女怪が後に從ひ往きて、他が洞中に至り、事の動靜を伺ひ來るべしとて、夫より三個一齊に山を下りて遙に見れば、彼兩個の女怪は水を汲み終りて南に向ひて歩みゆく。行者が聲三個も後に連きて行きけるが、一片の崖の邊にて彼女怪を看失ひけり。三個急ぎ那里に至り、崖の前に轉り出づれば、果然一座の樓門有り。樓上に陷空山無底洞と云へる六個の大字を彫り附けたり。門内却つて房宇なく、一塊の大石十餘里に跨る。石の正中に一箇の洞あり、底の深淺計り知るべからず。行者是を見て、是管ず妖精が巣穴なり、倆等少時爰に在りて待つべし、我且裡に入りて動靜を伺ひ來らんとて、身を搖して洞中に飛び入りけり。斯くて行者洞の裡に入つて看れば、却つて明々朗々として唯是一個の世界に出でたる如く、日色風聲、花草竹木、人間世界に異ならず。行き〳〵て見れば、亦爰に樓臺房舍許多あり。行者忽ち一隻の蒼蠅と變じ、奥深く飛び至り見れば、一個の草亭の裡に彼妖精絶色の美女と變じ、數多の女妖的等を會へ筵宴の準備を做し居たり。行者亦東の廊下へ飛び行き看れば、三藏は一室の格子の鎖ぢたる裡に坐して茫然として在したり。行者格子の裡に飛びいり、三藏の頭の上に住り、師父と一聲呼びければ、三藏、行者が聲を聞きつけ、悟空倆來れるか疾く我を救ひ呉れよ。行者曰く、妖精當

今筵宴の準備を做し師父と親事を做さんとす、我思ふに、師父は他と夫婦に成り、或は一男半女を生下給はゞ、却つて師父の子孫を住め、和尚と成るに勝るべし。三藏牙を咬んで曰く、倆遁場に至りて尚我を欺かんと爲るや、我大唐を出でしより以來、一毫の妄念を生ぜず、若此妖精に因て眞陽を亡はて、永世輪迴に墮入つて生々身を歸する事能はず。行者笑つて曰く、師父恨み給ふ事なかれ、我計策を設けて救ふべし、今妖精酒を備へて師父に進らせんとす、師父少時堪へて他が一鍾を喫み、師父又急に他に一鍾を掛き、鍾中に一個の喜花を掛起せて他に送り給へ、我其時蝍蟟蟲と變じ喜花の下に飛び入り、他が肚の裡に呑み下したる時、肚の裡に入りて心の儘に他を困苦降伏せしめ候はん。三藏是を聞いて大いに歡喜び、其如く做すべきなりと曰ふ處へ、妖精快東廊に進み來り、鎖を開きて裡に入り、唐長老這邊へ來り一鍾を飲んで樂み給へと三藏の手を携りて扯立つる。三藏沒如何女怪と俱に草亭の裡に出で給へば、女怪且鍾子を擧げて一杯を喫し三藏に與へける。三藏止む事を得ず鍾子を手に取揚げ、少時躊躇ひおはします。行者、師父の耳の中に飛び入り、此酒は御菊酒なり、一杯を喫み給ふとも苦しからずと低語けば、三藏遂に此一鍾を喫み終り、向の計策の如く親手一鍾の酒を掛ぎ、杯中に喜花を掛起し給ふ時、行者早く蝍蟟蟲と變じ喜花の下に飛び入りて、妖精が飲み乾すを待ち居た

り。三藏則ち鍾子を妖精に送り給へば、女怪大いに懽喜び、急ぎ手を取つて三藏を拜し、却つて酒を飲まず、且鍾子を下に指置きて幾句の情話を訴べつ、少時して鍾子を取揚げゝる時、彼喜花已に消え果てゝ彼蟭螟蟲現れ見えければ、女怪小指を以て蟲を挑げとり、地上に彈き捨てたりける。行者謀計の成らざるを見て口惜く思ひ、即時一隻の大鷹と變じ、翅を掀べ爪を輪開し、酒肴、卓席、盤碟の類ひを盡く打捽碎きすて外面に向ひて飛び去りけり。女怪是を見て大いに驚き、這洞中に原這樣なる畜生なし、思ふに今日親事を做すに善からざる日にて、天より此災ひを下せるならん、我又更に良辰を擇み、改めて唐長老と親俚を做すべしとて、又三藏を東廊の裡に送り推籠めおき、小妖的を呼んで筵宴の家伙を收めさせけり。却説行者は草亭を飛出でゝ、草花の裡に隱れて少時潛み居たりけるが、忽ち後邊の方より散亂と香の烟飄り出でけるにぞ、行者不審く思ひ身を轉して打探ひ看るに、一座の石壇の上に一張の卓子が備け、卓子頭に香を焚き、上面に兩個の大金字の牌子あり。是を讀むに、一個は尊父李天王之位、また一個は尊兄那吒三太子之位と寫着けたり。行者是を看て滿心に歡喜び、遂に彼牌子と香爐とを取つて直に洞外に出で、八戒、沙僧等が待ち居たる處へ飛歸り、喃々哈々として笑ひ居たり。八戒、沙僧是を見て問うて曰く、長兄這樣に懽喜び給ふは師父を救ひ出し給ふにや、然

れども師父の見え給はざる事は奈何。行者、彼牌位と香爐を地に指置きて曰く、我們師父を救ふに及ばず、此牌位を以て玉帝に訴へ奉らば師父は自然助かり給はん。沙僧が曰く、此牌子那里に有りしや。行者曰く、此牌子則ち彼女妖怪が供養する所の牌子なり、想ふに彼妖精は李天王の女兒にして三太子の娣なり、他凡氣を發して下界に到り、妖邪と成つて我が師父を拿へしものならん、我今より天上に昇り、此牌位、香爐を證據と做し、玉帝に奏し奉り、李天王父子を呼び下して我が師父を救はしむべし。八戒が曰く、玉帝に奏聞せんには告文なくては協ふべからず。行者曰く、我即ち告文を主張むべしとて、頓て行李を開き師父の紙筆を取出し、一張の狀子を認め、是を袖裡に推納れて、牌子、香爐を手に取りて、觔斗雲に打駕りて急ぎ天上に昇りけり。

八三

心猿識二得丹頭一　蛇女還二歸本性一

行者直に南天門の裡通明殿に到り、四大師に向ひ禮を作して仔細を賴み、靈霄殿の下に入り、頓て玉帝を拜し、牌位と香爐を取出し彼紙狀兒を呈上りければ、玉帝是を取揚げて讀み下し給ふ。其文に曰く、